

近代ロシア社会再考：「科学と文化」の時代における労働者をめぐって

高田，和夫
九州大学比較社会文化研究院国際社会文化専攻・欧米社会講座

<https://doi.org/10.15017/8649>

出版情報：比較社会文化．8，pp.89-137，2002-03-01．九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：

近代ロシア社会再考

—「科学と文化」の時代における労働者をめぐって—

高 田 和 夫*

Kazuo TAKADA

キーワード：近代ロシア社会，科学，文化，都市，農村，啓蒙，インテリゲンツィア，専門家，検閲，
宣伝，宣伝家，ナロード，ナロードニキ，ヴ・ナロード，サークル，労働者＝インテリ

目 次

- I. 問題の所在 近代ロシアの都市と農村 — 二元論と関係論
- II. 近代ロシアにおける「科学と文化」の時代性
 - 1. 「科学と文化」の担い手 — 政府とインテリ・専門家
 - 1) 啓蒙と開明の時代
 - 2) インテリゲンツィアと専門家
 - 2. 「科学と文化」の時代的雰囲気
 - 1) 「厚い雑誌」の普及
 - 2) 「科学と文化」の全国的ネットワーク — 科学団体の設立
 - 3) 「大改革期」の文化的国際環境
 - 3. 「科学と文化」の象徴としての出版
 - 1) 検閲政策と出版
 - 2) 出版事情全般
 - 3) 革命派出版事情
 - 4) 農村農民と読書
 - 4. 「科学と文化」の発現様式としての「ヴ・ナロード」
 - 1) 人民との接触 — 「ナロード」のイメージ
 - 2) 宣伝と宣伝家
 - 3) 宣伝の方法 — 言語コミュニケーションをめぐって（以上本号）
- III. 「科学と文化」の結節点としての「労働者＝インテリ」（以下次号）
 - 5. 1873年の革命派諸綱領
 - 6. サークル運動における労働者
 - 7. 「ザヴォツキエ」の世界
 - 8. 「労働者＝インテリ」の出現をめぐって
- IV. 結 語

I. 問題の所在

近代ロシアの都市と農村 — 二元論と関係論

B. ミローノフ（Mironov）は注目すべき近作で正面から帝政ロシアの都市と農村との関係を扱っているが、そこでは17世紀中葉まで両者の区分はさほどつかなかったが、その後1860年まで差別化が最も進行し、農奴解放後になると今度は両者の関係は深まり、徐々に差異が小さくなったとする枠組みで議論を展開している。¹⁾ 従来、ロシア史研究において陰に陽に影響力を有したいわゆる「[ロシア] 二重[二元] 社会（dual society）論」（以下、単に二重論などとす

る場合がある）では、都市と農村はそのことを論証する格好の根拠のひとつとして対比的に扱われる傾向にあったから、彼の想定はとくに近代史研究にとって新鮮に映るかもしれない。念のために、ここでいう二重論の典型例を示せば、例えば、碩学 N. V. リャザノフスキーの次のような叙述である²⁾ — 帝国ロシアは二つの分かれた世界から成る統一体としてあった。つまり、教育ある部分と文盲、政府および公衆（obshchestvo）と大衆、都市または町と村、富裕者と貧者、搾取者と非搾取者、能動と受動、動態と静態の別々の世界である。

しかしながら、構造的複合的な関連性において歴史理解

* 国際社会文化専攻・欧米社会講座

の道を探究しようとする立場からすれば、二重論が実態を過度に簡略化してみる傾向にあり、それはむしろ理念型として扱うほうが相応しいことを指摘しないわけにはいかないであろう。したがって、それをそのまま歴史叙述に置き換えるのは多分に難があることから、二重論に対しては直接間接に批判的な議論が数多くなされてきたのである。それらの先例にわずかに触れれば、すでに帝政期にあって、代表的な民族誌学者のひとり V. セミョーノフ=チャン=シャンスキー (Semenov-Tian-Shanskii) はロシアでは都市と農村は文化的に差が乏しく、むしろそれらははるかに強く精神的に結び付いていること (dukhovnaia sviaz') を強調する立場を採用したし、³⁾ あるいは農工ともに進んだフランスを理想視した歴史家 N. A. ロシコフ (Rozhkov) の場合は、都市の経済的発展がもたらす巨大な文化的役割に注目しながらも、その歴史的発展は農村と組織的に結び付いている。都市なしに農村が生きる以上に農村なしに都市が存在するのは困難であると主張したのであった。⁴⁾

最近の欧米において、二重論の見直しが進んでいることにも触れなくてはならない。例えば、S. P. フランクと M. D. スタインベルクが編集した社会史論集で、⁵⁾ 編者たちは序言において著作の意図を次のように強調している。ロシア近代史において社会的な分裂 (social division) が深化したが、その一方でしばしば新しい行為者が登場してそれらの境界を侵犯し、その結果、再調整が図られた。それを行ったのは都市と農村との間を取り持つ文化的な仲介者たちである。19世紀後半期にもなると、文化に関してそれを創造する部分 (都市) と消費 [だけ] する部分 (農村) とに二分しておけば済むわけでもない。このように考えて、フランクらは社会的に越境する文化現象に注目し、その行為者と作用の実際を観察しようとしている。この視点は、近代ロシアにおいても国民ないし国民国家の形成過程を考察しようとする場合にも (本稿ではこうした論点に本格的に立ち入ることはしないが)、ひとつの糸口を与えることになるかもしれない興味深いものであろう。

さらに関連して、今日のロシアで盛んな「郷土誌研究 (kraevedenie)」の動向は注目に値するであろう。1992年にエレツ市で行われた「ロシア地方文化」をめぐるシンポでは「地方文化 (provintsial'naia kul'tura)」を「都市および都市にいた人民的な農民文化とを含む」ものとして捉えて、それを上と同様に農村と都市の境界領域の問題としようとしたのである。⁶⁾ また、1997～8年にトヴェーリ大学、1999年にエレツ教育大学で開催されたシンポ記録は、⁷⁾ 1775年までは公的な行政区分であった「地方 (provintsia)」がその後専ら「古い遅れた」部分を意味するようになる過程を扱っているが、その論集の中で、R. A. ロスタイン (Rothstein) は1870年代から20世紀初頭にかけて民謡

が死滅するかもしれないという話がなされたことを紹介して、実はそうではなくて都市と農村共通の音楽文化が発生してきたのだとしてチャストゥシカ (chastushka)、つまり4行からなる民衆歌謡を農村と都市との接点で起きる文化現象として扱っている。また H. F. ヤーン (Jahn) は、時代が第一次大戦期に下がるが、「エリート文化」を「下層大衆」も享受してロシア社会が単一のコミュニケーション・グループから成立つようになったとする議論をしている。彼が目するものは愛国的で文化的なエンタテインメントについてである。明らかにここでの議論のベクトルは、上と下、あるいは都市と農村が収斂する方向にあるといえるであろう。⁸⁾

一方、わが国では、最近、ラヂーシチェフの『旅』をめぐる、注目すべき論考を発表した坂内徳明は其中で「ローカル」なるものを重要論点のひとつとして選び、18世紀後半以降、それは単に未開な辺境ではありえず、「ローカルな文化 (ローカリティ)」や「地方性 (mestnost')」が中央との関係で個別の自立するものとして成立したことに読者の注意を喚起している。⁹⁾ ここにも中央と地方の関係論への関心の所在を見ることができるのであるが、今後、さらに本格的な議論がなされることを待ちたいと思う。

さて、都市と農村が文化のあり方をめぐって何度目かの緊張した関係に立ち入ったのが本論で取り扱おうとする時期である。この時期の最大級の特徴として決して無視しえないのは両者の関係の結節点に位置して、重大な役割を果たした (都市) 労働者が登場したことである。なかでも注目されるのは、新旧の階級的境界にまたがる位置にいたいわゆる「労働者=インテリ」たちの存在である。ロシアで文化 (そして科学) のあり方が全社会的に注目されはじめたこの時代は、半ば自動的に世間 (obshchestvo) が労働者の存在に気付いた時代でもあった。このことをロシアにおける「社会問題」の発生と言い換えることも出来るであろうが、本論ではむしろこのように両者 (都市と農村) の関係論を「労働者=インテリ」の現象化に引きつけて考察することを通して、近代ロシア社会の特質理解を改めて点検してみたい。表題の「再考」とはさしあたりそうした意味である。上に挙げた論集でフランクたちが、もう一歩進んで、文化的にマージナルな存在であった労働者が (文化的に都市と農村の双方にまたがるという意味で) 労働人民 (農民) を組織することで本質的な役割を果たし、さらには労働者世界に新しい思想を持ち込み、階級的アイデンティティの觀念の発達を促進したと結論的に断言していることに対する評価は本論での検討を待つことにしたいと思う。

確かに、印象的には帝政ロシアの都市と農村の間には対照的あるいは対立的と思われる事態が一貫して存在してい

たかのように思われる。都市を意味するロシア語 gorod は ograda (柵) から派生したことからも容易に分かるように (gorodit' はその動詞である)、それらは敵の攻撃を想定して柵で囲った閉鎖的な空間であり、元来、軍事的な性格を有したことは明らかである。その城外の商工地区をさす posad は sadit' (植えつける) や osadit' (入植させる) から発しているから、いずれもそれらはロシア史にあっては人為的かつ人工的に人がまとまって居住する一定の広がりを目指したのである。18世紀初頭以降になるとロシア帝国では都市住民は自動的に特別な法的地位を与えられ、さらに都市自体も独自の機能を果たすようになったが、612都市を数えた1897年センサスにしたがってそれらを分類すれば、①「行政・軍事・農業」役割に重点を置いた前工業的タイプが219、②「工・商・金融」の工業タイプが最多の390、そして③「サービス・文化」のいわば「ポスト工業的」タイプはわずかに3 (ペテルブルク、オデッサ、キーエフ) にすぎず、19世紀末の時点では工業タイプが過半を占め、この傾向は帝政崩壊時まで変わらなかったのである (時間的にみて進化する方向は①→②→③であり、ペテルブルクが一步先を行っていたことに注目しておこう)。また、法的にも都市が進化したことは知られる通りである。とくに1870年都市法はもともと「都市自治」を推し進めたと評価されるのだが、それも1892年都市法で大きく後退を強いられたのだからロシア都市のこの面での成熟度は決して高くはなかったのであり、大局から見れば、国家権力の側が財政負担の軽減を図って地方自治と都市自治に「配慮」を加えた側面が多分にあることを否定しきれないのがロシア近代史の現実であったことを想起しなくてはならないのである。¹⁰⁾ また、ロシアの都市が都市住民すべてを代表する機関や制度をもたなかったことから、例えば、商人などが近隣の町人たちとは疎遠でアイデンティティを共有することなしに、むしろ彼らは農村住民の方に近しさを感じるようなこともあったのである。¹¹⁾

ロシアの都市は広大な空間に散在した。19世紀中葉の欧露では都市間の平均距離は87km (シベリアでは516km) もあったから、とくに鉄道で結ばれる以前には都市間連絡は非常な時間と困難をともなったことは容易に想像出来よう。¹²⁾ それに比して農村はいわば自然発生を第一として欧露全域にほぼ隈なく所在し (いわゆる周縁に行くほど移住、植民、入植など村落発生にその人為性が目立つ傾向がある)、それらの間は実に平均3kmほどでしかなく、したがって村と村のネットワークは少なくとも客観的には極めて密なのであって、それは明らかに「ロシア性 (Russianness)」を本来的な意味で人文地理的に代表してきたといえるであろう。しかも農奴解放後には生存上の必要のほかに政府の政策にも促されて小さな新しい村が増えたから、その網の目はますます

細くなる傾向にあった。¹³⁾ 農村のあり方に関わるこの論点は、情報の伝達、思想の伝播拡散、国民意識の形成、ナショナリズムの発現、社会運動の発生と展開などを考察する際にまず念頭に置かなくてはならない背景事情を提供するのである。

通例、都市のなかにも二重論は存在するとみなされてきた。そこに居住したいわゆる the educated society の代表者たちが自らを barin (旦那、特権階級) とし、残余の人たちを prostoliudin (あるいは prostoi narod, prostye liudi, ありきたりの人、平民の意) としたのである。この関係論は前者にとっては殊のほか居心地のよいものであったかもしれないが、そうでなくてもそれは全体としては物質的経済的に非常に分裂していてほとんど凝集力がなく、また組織力にも欠け、政治的立場も多様であったから、¹⁴⁾ その側から積極的に二重論を克服しようとする志向性は現れ難かったのである。これは「都市ロシア」のいわば歴史伝統的性格のひとつであったともいえる。

また、周知のとおり、農村農民の側では共同体的な規制力が強烈に作用して一般は近代的な意味での権力、名誉、愛、個、財産、知などの諸価値には無関心や軽蔑でもって対することが多かったから、たとえそれらが豊富に存在すると思われても、その「向こう岸」に架橋して「社会的上昇」を図ろうなどは普通思いつかない事柄なのであった。¹⁵⁾ さらに彼らの時間観念は多分に循環的であったから、それに従えばすべては変わることなく繰り返されるのであり、苦渋に満ちた現状を前にして「昔はよかった」という諦念が、待つことへの期待をともなって、呟かれることが通例なのであった。¹⁶⁾

しかしながら、すでに言及したとおり、歴史的实际的には、都市と農村、都市諸身分と農民とは絶えざる相互作用の中に置かれ続けたのであった。17世紀以前ではそうしたやり取りは多分に条件的であり、本格的に諸価値の交換が始まるのは都市が農村とはっきりと区別されて各々が独自の文化を持つようになったそれ以降のことであったと考えられる。定期市、巡礼、修道院、バザールなどがまず両者の出会いの場と機会を提供したのである。そこでは双方の差別的特徴がはじめて相互に確認されたであろう。しかし、それは格段に意図的なことではなかったから、両者の関係はいわば相互尊重的なものであったと考えられる。

だが、とくに農奴解放後は書籍、定期刊行物、博覧会、日曜講座、学校など新規の近代的な道具立てが都市文化の運搬者や提供者となつて、農村に対して具体的実作用的な作用を本格的に及ぼし始めたのである。ここに出現した現象は決して自然発生的とはいえず、むしろ政策的で作作的性格がより明瞭であったとみなくてはならない。つまり、クリミア敗戦を一大契機としてツァーリ政府が迫られて実行

に移した一連の「大改革」がロシアの近代的な社会的諸関係（とりわけ都市と農村のそれは基幹的であり運命的でさえあったと考えられる）の基調を調べようとしたのである。さらに、都市に居住した革命家などの意図的な働きかけも同様な作用を伴ったはずである。その意味では政府のなすことと反乱者の企てとは同じ性格を有したのである。これらの諸改革と変革運動とにたいして歴史的評価を加える際に、どの程度まで両者を架橋しえたか（実効性の深度）という論点ないし視角を除外することは困難であろう。これは両者の一体化あるいは一体性の問題であると換言できるとすれば、それはなかば自動的にロシア国家体制の均質化（いわゆる「国民国家化」）に関わる問題群のほぼ中央に位置することになるであろう。V.トルツの近作はロシア帝国とロシア（国民）国家との関係論をよく整理した秀作であるが、それはツァーリ（政府）の目標はロシアの国民国家化よりもむしろ帝国の安定に重点を置いたものであり、国民国家化のために企てられたロシア化や正教化は自ずから帝国の安寧を脅かさない限りで遂行されたものであるとする立場をとっている。¹⁷⁾ 本論はこの仮説の正当性を、部分的であれ、確かめることにもなるであろう。

この時期に生み出され醸成された社会的雰囲気の中かで都市と農村は新しい出会いの機会をもった。ここで言う「社会的雰囲気」が何たるかを前以て表示することは困難であるが（本稿自体がそのひとつの回答たらしとするものである）、ここで敢えて言及すれば、それは「科学と文化」が尊重された時代風潮であるといえるであろう。そうした一種流行の中かで一部の（革命的とは限らない）インテリたちがそのために学習サークルなどの結社的な動きを自発的に見せたこと、つまり「科学と文化」が人間の結合関係につよく作用するようになったことも同様に特徴的であった。各地にできた多様なサークルがそうした文化的気象を維持し促進するのに貢献したのである。この時期にナロードニキ（人民主義者）と呼ばれるようになる一群の人たちもその多くは何らかのサークルに属していたし、彼らに特徴的な人民（ナロード）観は都市側からする農村（農民）にたいする救済願望に理屈抜きに満ちあふれていたのだから、ここに近代ロシアに出現した両者の関係論の一バリエーションを明瞭に見出すことができるのである。こうしたことを考慮すれば、彼らが繰り広げた運動なども今一度、ここでいう「社会的雰囲気」のなかに置き直してみることができるし、またそうする必要があるであろう。

無論、都市と農村の関係論は都市の農村にたいする影響といった一方向性で捉えることは出来ない。逆のベクトルもあってはじめて相互作用は成立する。¹⁸⁾ 都市的なものの進出を受けて、農村側はそれにどう対応したのか。素直にそれを受容したのか、彼らなりの解釈を加えて変容させて

受け入れたのか、断固として拒絶したのか、その他の場合を含めて何れかの反応をする際の判断基準や人間関係はどうであったのかなど興味深い論点は数多いのである。現実には確実に進行し実現したつぎのような諸事実、つまり、村々に各種の信用機関ができ、本を担った行商人が行き来し、政府を含む幾つかの発行主体が農村農民向けに新聞など定期行物を創刊し、出稼ぎなどで都市から帰郷する者たちが新しい価値観や物品を持ち込むといった、一連の都市との現実的關係を表現する諸行為は村民の生活にいかなる影響を及ぼし（え）たのであろうか。農村へ入ったナロードニキが体験したことはこれらの疑問に部分的にであれ答えてくれるはずである。都市の革命家たちが仕掛けたことは、結果としてたとえ歪んでゆっくりとした作用と波及効果しか及ぼさないものであったとしても、都市と農村との相互關係の一局を極めてよく示すものであった。

この時期の、農村（民）の側は受けて立つことだけをしていたのではない。たとえば、同じ「大改革」の時期に大きく進展した農村から都市への人の移動は都市をいわば migrant city と化して、そこへ流入する者が運び込む伝統文化と the educated society 側の近代的な都市生活文化（「モダニズム」と通称されるもの）との衝突を出現させた。おそらく、主として都市で観察された（といっても農村でのそれを除外するものではない）、その作用の及んだかぎりが「ロシア近代」の総体でありその特徴的表象のはずなのだが、いわずもがな、それは実に多方面に渡るものであった。本稿は、それらの中からわずかにつぎのような事項を扱おうとするものである。流入した農民によって都市の工場労働者の中には「近代的なプロレタリアート」とは決していえない部分が増大し肥大化したから、ロシアのマルクス主義的（まさしく近代的）革命家は労働者階級のなかに意図的に差別的視点（つまり「ザヴォツキエ」と「ファブリーチヌイエ」の二分論。ここでわざわざカタカナ表記する労働者グループについての説明は以下の本論で行う）を持ち込む必要性を認め、その結果、同時代人だけでなく後代の歴史研究者の間にもある種の混乱と誤解を生じさせたことは否定できない。これは「先進性（近代性）」と「後進性（前近代性）」（ここでは、それぞれを体現するのが「ザヴォツキエ」と「ファブリーチヌイエ」であると言っておく）といった極めて安易に想定された指標的な概念で工場労働者範疇を真っ二つに割るもので、発想的には都市と農村を固定した二元論において捉えようとするのとひとしく、両者を指導＝被指導の關係に位置づける一方的視角、つまり偏見を特徴としたものであった（これが安易ではなく考え抜いた結果であるとするれば、それはそうした時代であったのだとみなさなくてはならないであろう。この点も本論で検討しよう）。しかしながら、この場合も同様に片方側の一方的な（つまり「ザヴォツキエ」の「ファブリーチヌ

イエ)への)影響力行使を先験的で宿命的なものとして扱うことがあってはならないのである。後者を絶えず受け身の存在としてとらえようとするのは大きな誤謬をもたらす主要因であると考えられる。人々が陥りやすいのは、分析概念の明解さ(単純さ)に魅了されて、それが打ち出すシェーマを史的事実関係そのものと混同してしまうことである。ここでも相互の作用と関係は肝要な事柄なのであって、本稿は具体的事例をもってこのことを検証するであろう。

さて、ミローノフは近代ロシアで都市化がゆっくりとしか進まなかった決定的理由として次の3点を上げている。¹⁹⁾ ①農民の土地へのこだわりの強さ(都市化すれば別途に地方税を課されること。共同体の土地が都市の財産になりその統制下に入ってしまうこと。都市諸身分にならなくとも事業参加できること)、②「散在的な」工業化(農村も都市と同様に工業化されたこと。小規模な都市以上に大規模で商工的な「工場村」が出現したこと)、③政府の都市政策(政府の意向に左右され、村は自動的に都市になる訳ではない。しかし、貴族の同意なしにはその政府さえも私有地を都市へと変換できなかったこと)。いずれにせよ、ここで大切な点はこの時期の都市化が低速であったこと(1867年から1897年に欧露で新たに生まれた都市は31であり、そのほとんどが行政上の必要からである)²⁰⁾ 以上に、それが上に見たように、単に土地問題に限らずひろく農村や農民との直接間接の関係をともなって遂行され、また遂行されざるをえなかったことである(ミローノフはこの点をより強調するべきである)。しかも、この局面は当事者のメンタリティにまで作用するものであったと考えられる。農奴解放後、合理主義、実用主義、経済的打算、個人主義などの近代的価値観がロシア社会にも抬頭して、それらがコミュニティな共同体的発想と原理的な衝突をするに至るが、前者が後者を圧倒するような変換は緩慢にしか進行しなかったと考えられるのである。つまり、伝統的かつ宗教的な基盤を有する思想体系に共通する惰性がここでも存在して広くインテリゲンツィアも捉え、ようやく頭をもたげた「ブルジョアジー」は社会的に否定的に扱われて自らはかろうじて特殊ロシア的な姿しかとれえず、²¹⁾ 都市においてもいわゆる「ゼムリャーチェストヴォ(zemliachestvo、仮に、同郷性と訳しておく)」にこだわりそれを生活基準にした農民をはじめとしてひろく住民一般も世俗化都市化の進行に抵抗したのであった。都市の中では新奇で革新的な思想は片隅に置かれて決定的な影響力を持つことは容易でなく、その一部は急進化せざるをえなかったと考えられるのである。

M. コンフィーノは「二人のロシア人(two Russians)」という言い方をして、その秀逸なインテリゲンツィア論で二重論に触れている。²²⁾ 彼によれば、ロシアには同時に二

つの文化が存在する。つまり一方には貴族官僚ら少数エリートに観察される西欧的なものがあり、他方には人民(ナロード)にうかがわれる土着の過去に根ざした伝統的なものがある。これら両者は内容的に遙かにかけ離れているだけでなく、中間を繋ぐ主体が不在であると、ややもするとそれぞれが接点を見出せないまま個別世界を生きることになる。しかし、もはやこの「大改革」の時代はそうしたことは現実にはありえず、両者間を取り持とうとする試みが種々になされたのだ。なかでもインテリゲンツィア存在は注目され、それはほとんど不可避免的に二重の役割を果たすことになった。つまり、コンフィーノによれば、彼らは文化的に西欧とロシアの間を架橋するだけでなく、社会的には上層と下層の間を連結しようとしたのである。彼はこのような意味でインテリゲンツィアをロシア社会を西欧化し近代化する主体として改めて捉え直すのだが、残念なことにその議論は具体性を欠いている。そこで、筆者はこの仮説も検証してみたいと思う。何故ならば、こうした整理は宣伝と人民の関係論をより広い文脈から考察しようとする際にひとつのヒントとなるからである。²³⁾

繰り返すが、革命的な知識人によって「宣伝された(propagandirovannye)」労働者の中から、「労働者=インテリ」などと呼ばれる部分が登場したのはこの時代の特徴であった(この分野の議論で謂わば古典的位置を占めるのはクラインボルクであろうが、²⁴⁾ しかしながら、彼は遅く1890年代以降にこの部分の発生を見ている)。彼らは知識人たちの関与を嫌うまでに成長して、いわば下から向こう岸への架橋を試みるようになるのである。そうした者の数は一部では数十から多くても数百どまりであったと見られているが、²⁵⁾ 社会的に境界領域にいた彼らの動きはただ単にプロレタリア的な秩序を樹立する可能性があったから注目されるのでは全くないのであって(そうした想定はほとんど実証不能で無意味な局外者の単なる思い込みに過ぎないが、旧来の革命史研究の相当な部分がそのために動員されたことも確かであろう)、そうではなくて、それが労働者(あるいは農民)とそのほかの社会的分子との間を仕切っている有形無形の差別と区別をもたらす諸要因を除去し、それらを乗り越えようとする懸命な試行であったが故に、ここで改めて着目しようとするのである。

II. 近代ロシアにおける「科学と文化」の時代性

1. 「科学と文化」の担い手—政府とインテリ・専門家

1) 啓蒙と開明の時代

前段で「科学と文化」が尊重された時代風潮という表現を使ったが、そのためにツァーリ政府が上から一定の役割を果たしたことは特徴的であった。1860、70年代に大臣委員

会 (Komitet ministrov) は臨時措置として一連の科学立法を行ない、ロシアはひたすら正教を前面に掲げて科学や芸術を低く見た時代から大きく舵を切ることになった。やはりクリミア戦争がそのための決定的な契機となったのであり、すでに1855年秋の敗戦必至の段階で国民教育相 A. S. ノーロフ (Norov) は「科学はいつもわれわれにとり最も重要な必要のひとつであったが、いまやそれは第一である。わが敵国がわれわれより優勢だとすれば、それは唯一教育の力によってである」²⁶⁾と述べたのである。この意味で、当該戦争はロシアにとり総力戦的な重みをもって受け止められたであろう。これを受けて戦後企てられた「大改革」を実現するために大量の専門家が必要となるのは必定であったから、政府は教育体系をより実業的世俗的な方向に変換することを迫られたのであった。

それと同時に公衆の間には旧来とは異なる将来に対する期待感が醸成された。当時の「大改革」に対する夢を語る(あるいは回想する)人に出会うことはそれほど困難ではないのである。例えば、社会評論家の N. V. シェルグーノフ (Shelgunov) は大略、次のように当時を回顧している。——それは「大改革期のこと」素晴らしい時代であった。あらゆる人が考え、読み、そして学ぼうとし、高潔清廉な人が仕来りにたいして其のこだわりを躊躇なく表明し、それまで眠っていた思想は目覚めて働き始めたのである。その刺激は力強く、その課題は巨大であった。皆は現在のことよりも将来の世代の運命やロシアの行く末を真剣に考え、判断し、そして何時も確かな改革〔の実現〕に心を通わせたのである。これはすべての才能ある人を惹きつける仕事であった。²⁷⁾

このように、これは物質的な進歩、社会的な発酵、そして新たな知的進路の開拓が試みられた時代であった。この時期のロシア文化に占めた科学の位置に関して最も信頼するに足る著作者であるヴシニッチは、この時代相を「自主性 (samostoiatel'nost')」という用語で端的に表現しようとしている。²⁸⁾あるいは梶雅範は同時代の化学者メンデレーエフを社会的関係において議論しようと意識的に試みの中で次のようなエピソードを紹介している。1887年1月、ロシア物理・化学会主催で有機化学者プトレロフ追悼集会がなされ、そこで彼の助手であった人物がこのように述べたというのである。「[1857年からの10年間は] 思想の顕著な高揚がみられた、あのロシアの社会的運動の時代です。1860年代の初め、我々を科学的興味に向かわせるような高揚がみられ、この時期に目立って多くの一級の科学者が現れた」。²⁹⁾梶はそうした社会的科学的な時代相に関する説明を補強するためにロシアにおける植物生理学のパイオニアである K. A. チミリャーゼフの話を用いている。「物心がついたときが、1860年代とよばれるときと一致した世代

は、間違いなくこれまでロシアの地で生まれた者の中でもっとも幸福であった。その世代の個々人の人生の春が、四半世紀以上の間にわたり国土を拘束していた精神的な麻痺と惰眠からの解放とともに国土の津々浦々にもたらされ、万民の春の最初の息吹と重なったのだから」。³⁰⁾

これらの引用からよく伝わるのは閉塞感を打破する時代の変化にたいするインテリゲンツィアの共感であり、場合によっては楽観である。特に自然科学者は、ロシアにおいても科学は次のような意味合いの文化の存在を前提にしてはじめて発展しようとする考える性向があった。つまり、人間が有する合理的理解力を知識の最重要な資源とし、その知識の価値を実用性によって推し量り、さらにあらゆる人が知識をそれなりに理解する権利があることを認める雰囲気としての文化である。³¹⁾したがって、社会がそうした文化の存在を感知するようになれば、それは科学の進展のための基礎条件が成立したことを意味するであろう。「大改革」は文化と科学をこのような構造的な連関性の中に置いた(置くはずである)と理解されたのである。それ故に、この時代の先頭を走ったニヒリストは自らをリアリストとみなし、D. I. ピーサレフ (Pisarev) は科学こそが人民を目覚めさせ、民族のために道理ある指導者を生み出す力となると言い放ったのである。³²⁾そして、当然のことに、この科学=文化論は、農村農民の教育に直面してより現実的な色調を帯びざるをえなかったにしても、引き続きナロードニキにも受け継がれたと見なさなくてはならない。つまり、科学が近代ロシア思想の基本的構成要素の一つになったということである。ピーサレフの立論を「学のための学」とし、それにたいして「人間の幸福のための科学」を主張したのがラヴローフであったから、革命理論における科学の位置は変化したとみなくてはならないが、どのような立場をとろうとも科学を無視することはできなくなったということである。

しかしながら、当然のことに事態は妥協的であり条件的であるから、上に見たような科学者たちの願望をもって歴史叙述に換えることは出来ない。ツァーリ政府はここでも古典的伝統的な従来の教育観や科学観を強制と強要そして時に妥協により保持しつつ、彼らなりに近代の道を歩もうと図った。近代には付き物の科学が専制とは本質的に相容れないことを権力者はよく承知していたから、それとの対応がやたらアンビバレントなものにならざるをえないことは教育政策に最もよく示された。国民教育相 D. A. トルストーイ (Tolstoi) [在任1866~80年]によれば、ロシアでは徳育(この場合の用語は vospitanie)はそれが強圧的な過程とならざるをえないから本質的に限られたものであり、さらに知育 (obrazovanie) は徳育とは全く分離されるものではありえないからそれもまた本来的に自由である必要条

件を欠くのである。トルストイ自身は機会あるたびに労働者教育の必要性を説き、自らが訪独して実業学校調査までする人であったが、こうした教育観がその政策を支えていたのである。³³⁾ しかしながら、専制にとり教育は国内にある潜在的な危険を表面化させるおそれがあるかもしれないが、それにも増して教育を欠くことは外部からより一層現実的な脅威をもたらすであろうことをクリミア敗戦は教えたはずであった。現に、権力上層部では多くの者が1866年にプロシャがオーストリアに戦勝したのは教育が軍事力のあり方にたいして見事な作用を及ぼした結果であると正確に認識したのである。³⁴⁾

上に見たような科学的文化的な高揚は何も職業的な専門家たちに限られた話ではなかった。すでに1850年代末には青年学徒の間で自然科学への関心は高く、社会的な定着をみせ、志ある若者は大学の物理数学部や医学部への入学を望むようになった。後年、作家ドストエフスキーの妻になるアンナ・グリゴリーエヴナは、1858年にペテルブルクで最初に開設された女子中等学校に学んで優秀な成績で卒業したあと、引き続き1866年秋に師範科（これはヴィシネグラツキーによって創設された）へ進学した向学心豊かな人であったが、彼女はその時分を回想して次のように書いている。「当時は自然科学熱がさかんで、わたしもその風潮に負けてしまった。物理学、化学、動物学などが何か『天啓』のように思われ、物理数学科へはいった」。³⁵⁾

政府は1858年にペテルブルク大学教授らに新大学令原案の作成を依頼したが、1861年の学生運動高揚は当局をして自ずから慎重な路線を歩ませることになった。ようやく1863年に公布されたそれは、よく知られるように、学生に自治活動を禁じる一方で大学当局に一定の自主性と自律性（教授などからなる大学評議会の設置や学長や学部長の自主的な選出など）を付与したものであった。評議会は教官人事や大学の出版活動を統制し、優秀な学生を選抜して西欧の大学へ留学させる権限を有するようになった。旧来の学部編成が見直され、物理数学部が幾つかの新しい学部に分割された。こうしたことによってロシアの高等教育がようやく奨励されて具体的進展を展望しうることになったことは否定できない。ヴシニッチはこれによって、大学がペテルブルク科学アカデミー（後出）を凌ぐほどの科学研究センターになったとまで高く評価している。³⁶⁾

軍医学の権威でもあった教育学者ピローゴフが徳育の必須条件としてしっかりした科学教育の実施を主張したのは半ば当然のこととしても、徳育と知育のバランスのとれた総合教育を言うのがもはやリベラル派にとっては常識的なところであったろうが、しかしその一方では、『モスクワ報知 (Moskovskie Vedmosti)』や『ロシア通報 (Russkii Vestnik)』の主筆として保守的公衆や政府に対して隠然た

る影響力を行使しえた M. N. カトコフ (Katkov) は専制にとって科学全般は不要であり、ただ「国家の必要に応じた健全で有用な科学」だけが入用であるというご都合主義の取捨選択論を主張したのであった。³⁷⁾

この時期、政府当局は教育政策に旧来になく敏感になった。1862年6月10日にツァーリは「ペテルブルクにおける公衆向けの講義 (publichnye lektsii) の認可規則」を認めたが、それは国民教育相、内相、第三部長官そしてペテルブルク特別市長官の実に4者の合意を条件としたものであった。1865年8月23日、内相ヴァルーエフは科学論文の形式をとった無神論、社会主義そして唯物論を厳しく検閲するように指示を出した。その翌年、国民教育相に就任したトルストイは専制原理の復活を強く望んで、私的な見解を奨励し尊重すること（これがグラスナスチ [glasnost'] の本来的な含意である）を否定したのであった。1871年につくられた「特別委員会」（陸軍省、内務省、国民教育省、ペテルブルク警察などが参加）は人民向けの講義 (lektsiia dlia naroda) は国民教育相が認可したテキストにのみ依ることを確認した。さらに1876年12月24日法は県都における人民読書会は県知事の同意をえた学区後見人 (popechiteli uchebnykh okrugov) の請願によって初めて許可されるとした。³⁸⁾ わずかに人民読書会をめぐるこれらの例示だけでも容易にうかがえるように、1860、70年代「大改革期」のツァーリ政府を捉えていたのは、啓蒙を絶えざる統制下におくという臆病な開明思想であったといわなくてはならない。

このような及び腰の対応は国内事情に強く規定されていた。農奴解放の過程が進行して、1870年代、80年代になると、公衆は農民生活の基盤がかえって動揺していると感じるようになった。農奴解放にたいする否定的評価が広く定着するようになったということである。それは都市下層民だけではなく、その供給源でもあるいわゆる「精神的な暗黒」に沈み切っている農村にたいする社会的上層一流の恐怖心をともなうものであった。そうした漠然とした印象が「社会問題」という形をとって定置される（せざるをえない）段階にロシアは初めて差し掛かったのである。あるいは帝政ロシアは近代なるものが自ずから放出する固有の「毒素」に対応せざるをえなくなったとも言い換えることが出来るであろう。

ここで問題とされるべきはこうした状況にどのような対応がなされたかであるが、結論的なことを乱暴に言えば、ロシアにおいても危機の根源を状況に対応できない（しようとしな）農村農民の暗愚さに求め、それを「科学と文化」の力によって啓蒙することで事態の打開を図ることがさまざまな手段と方策をもって試みられたのである。そして、このことは、明らかに、左翼も右翼もなしに思想的立

場を超えて啓蒙なるものを信じる事が出来た（あるいは信じざるをえなかった）この時代の特色をよく示すのである。³⁹⁾「社会の発展」はその背後にそれと相容れない沢山の要素を、自然にかあるいは意図的にか、積み残していくものである。その際、発展構造に組み入れられることなしに、否定された積み残しの中に掛け替えないものがあるだろうと熱狂に捉われた人たちがそれに気付くことはないのである。そうした影の部分を見ない発展構造論は限りなく単純な近代化論に近づくであろう。

改革と改良のために最大級の標的にされる運命にあったのは農村農民文化であったから、ここで都市と農村とは文化レベルで本格的に衝突することになった。その際に、都市側によって意図されたひとつは、彼らにとって都合の良い「理想的な人民の発見」であった。農村農民のさまざまな生活慣行は徹底した調査の対象となり（この点はすぐに後述する）、それを各個撃破するために、「科学的で合理的な」根拠がこれ見よがしに提示されることになった。例えば、農村農民にとって生活サイクルの基幹的リズムそのものであった祝祭日が血祭りにあげられた。それは異常に日数が多く、そのことが農民の生活を自堕落なものにして、いわゆるフリガーストヴォ（無頼暴力行為）が発生する根本因となっているから、減少させるべきだ。祝祭日や日曜日に開催される市は単なる混乱と暴力の場でしかないから禁止する。やはり祝祭日には酒の販売を禁ずる。あるいは、植樹祭のような近代的でスマートで世のためになるような祝日と差し替える。こうした都市側の一方的な攻勢にたいして、例えば、S. P. フランクは、それは改革派が民衆文化にたいしてまだ都市自体が経験したことがないような「植民地主義的な言語とイメージ」とに彩られた「啓蒙的文化」を適用しようとするものであり、それは政府が企てる「政治的な植民地化」の上を行くものであったと非常に手厳しい評価を下している。⁴⁰⁾私も感覚的にはこの論評に賛意を表したいが、ここで少なくとも確認できることは、当然予想される農村農民側のリアクションとともに、近代ロシアの「大改革」（あるいは「改革」全般）は、都市と農村との間で絶えず繰り返された、そのたびに緊張が増幅される往復運動の過程におかれたということである。⁴¹⁾

公私にわたる啓蒙活動が近代ロシアの都市社会にネットワークを張るようになった。⁴²⁾日曜学校あるいは無料学校が大都を中心に開設されたが、これは必ずしも労働者の組織化をめざす左翼の専売品であったわけではなく、ペテルブルク市役所などは1879年からそれを公的に開設することに踏み切るまでしたのである。モスクワには、インテリ学徒が果たした啓蒙活動の拠点のひとつに1871年に創設された「技術知識普及協会」（著名な社会教育家 V. Ia. ストューニン [Stoiunin] が代表）があり、その教育部は当地のリベラ

ルな教師たちを集めて、単に技術教育に限らず一般教育に精を出したことで有名である。後述するように、スイチン出版社がそれに協力して「自習文庫（Biblioteka dlia samoobrazovaniia）」シリーズを刊行するなど出版活動も熱心であった。⁴³⁾

情報伝達メディアが限定されていたから、⁴⁴⁾文字を通して啓蒙することが目指されたのがこの時期の一大特徴であった。いわゆる「良心的な出版者」がこの事業に参画することによって自己の存在理由を再確認しようとしたことも社会的に目立つことであった。V. O. コヴァレフスキー (Kovalevskii), N. I. ポリャーコフ (Poliakov), F. F. パヴレンコフ (Pavlenkov), O. N. ポポーヴァ (Popova) などがそうである。先に回想を引用した、アンナ・ドストエフスカヤは1873年に『悪霊』を初めて自費出版して作家の家計を支えようとしたのだが、この企てが彼女の「出版事業」の基礎となり、1880年には、長続きはしなかったが、通信販売専門の『フォードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー書店』を開店したのである。アンナによれば、地方向けの本屋は「上手に、几帳面にやりさえすれば利益の大きい仕事で」あった。⁴⁵⁾この証言は本に対する需要が全国化しつつあったことをよく示すであろう。すでに別の場所でも触れたことがあるのだが、⁴⁶⁾「識字協会」あるいは「識字委員会」といったものが各地につくられ、いわゆる「良書」の普及に励むようになったのもこの時代である。ペテルブルク市の場合だけをとっても、それは1880～95年に126点、約200万冊を出版し、無料配布したといわれるほどであるから、この動きは決して無視しうる例外的な試みではなかったであろう。⁴⁷⁾その「ペテルブルク識字委員会」はウクライナ人作家 A. Ia. コニースキー (Konisskii) を仲介にして初期サークル運動で全国的に見ても先進的な役割を教育啓蒙活動で果たした「ポルターヴァ・サークル (Poltavskii kruzhek)」と協力関係を有したことは、啓蒙に関して広範なネットワークが私的なレベルにおいてある程度はつくられていたことを示すのである（この時期のサークル運動全般については、本稿Ⅲ-2を参照）。⁴⁸⁾

さて、ロシアの図書館用語には英語の public library（公共図書館）にそのまま相当するものがない。public library に該当するのではないかと考えられる obshchestvennaia biblioteka は都市公共図書館をさすのが通例であり、また publicnaia biblioteka は市営図書館（municipal library）を普通、意味し、これは gorodskaiia biblioteka とも呼ばれたのである。私的に創設された「読書図書館 (biblioteka dlia chteniia)」は古くから大きな都会には存在した。このように農村農民は図書館サービスからは取り残されていたのだが、ようやくこの時期になって、「人民（無料）図書館 (narodnaia [besplatnaia] biblioteka)」ないしは「農村図書

館 (sel'skaia biblioteka)」と呼ばれるものが登場するようになったのである。1864年に全国で280の図書館を数えたさいに、その内訳は publichnye が92で、sel'skie が15であったというようなデータがある。ゼムストヴォが農村図書館建設に精を出し始めるのはおそく1890年代中ごろからであるから、それまで農村農民はその読書欲を農村初等学校の図書室や個人的な人間関係を頼って満たしたのである。⁴⁹⁾

このように、この時期はとかく読書・出版を通じた啓蒙に人々が熱中した観があるのである。ここで B. アンダーソンによる周知の「出版資本主義」にまつわる議論を持ち出すまでもないのだが、⁵⁰⁾ このことは全体としてみれば、ロシアにおいても活字メディア（アンダーソンは特に新聞を重視している）を媒介として国民の創出が本格化したと整理することができるのかも知れない。そうであるならば、このことはこの時点における都市の農村にたいする文化的作用を最も端的に表現するものとなるであろう。しかし、ここでは、ただ「人民」ないし「国民」を表題に冠した定期行物が数多く発行されるようになったことを指摘するに止めておきたい（注記では「ナロード」を「国民」と訳しておく）。⁵¹⁾ それらは二つの首都で創刊されたものばかりであるが、さらに地方都市においても同様に盛んな出版活動が観察されるようになったことに触れておかななくてはならない。各地の商工業界の多くが『取引所新聞 (birzhevoi listok)』の名で業界紙を出し始めたのはやはりこの時期である。それだけでなく、いわゆる進歩的な知識人たちが（この存在自体については後述する）独自に新聞を出すようになった。例えば、シベリアでは『アムール (Amur)』(1860-)、アストラハンでは『ヴォルガ (Volga)』(1862-)、カザンでは『カマ=ヴォルガ新聞 (Kamsko-Volzhskaia gazeta)』(1873-) がそれぞれ創刊された。こうした私的な動きはそれまで地方において実質的に唯一の新聞であった、政府の広報紙『県報 (gubernskie vedomosti)』を脇へ押しやるほどであった。1874年1月、「モスクワ検閲委員会」が『カマ=ヴォルガ新聞』をその検閲下において実質的に停刊としたことは、これらの新聞が中央当局にとり無視しえない存在として認識されるまでになった経緯をよく示しているであろう。⁵²⁾

このような事情であったから、「大改革」において、政府が社会的に孤立していたとみることはできない。中央に限らず地方にもとくに公衆の間に「改革ロシア (poreformennaia Rossiia)」が根を張りだしていた（そのためにゼムストヴォが果たした役割の大きさについては別途に議論があつてしかるべきであろう）。上に見たように、この時期は地方出版 (provintsial'naia pechat') が活性化し、その新聞、雑誌には各地の住民たちの生活状態、彼らの経済的文化的ニーズなどに関連する記事や通信などが頻繁に掲載されて

社会的な注目と反響を呼ぶ、いわゆる「グラスナスチ」状況が出現したのである。それは、従来、何を考えているのか、何をしているのか分からなかった隣人たちの相貌が次第に輪郭を伴って明らかになるということでもあつて、社会的連携や国民の発生に道を開く可能性を秘めた、ロシア史上重大な出来事であったはずである。それまでの人民 (ナロード) は反乱や蜂起など特に国家権力にたいして矢を引くような問題を惹起しないかぎり、「記録に残る」存在ではなかった。かの P. クロポートキンに言わせれば、「ここにはおよそ5000万の民衆が住んでいて、その生活様式、信条、考え方や理想は知識階級のものとはまるでちがっているし、みずから進歩の指導者と称している人々にとって、彼らは全く異なった言語を話す人種のようにまるきりとつきようのない未知の存在」⁵³⁾ なのであつた。彼によれば、インテリたち公衆の多くは「田舎にある邸宅のバルコニーから農民を眺めたことがあるだけ」⁵⁴⁾ であつた。そうした人民の日常に関心が寄せられ始めたのである。クロポートキンが「民衆作家 (folknovelist)」と名付けた、「人民のためにではなく、人民のことを書く」、つまり人民をその作品の主題や素材とする一群の作家たちが本格的な執筆活動をはじめたのも丁度、この時期なのであつた。それは D. グリゴローヴィチ (Grigorovich)、G. ダニレーフスキー (Danilevskii) らに始まって、A. ピーゼムスキー (Pizemskii)、A. ポテーヒン (Potekhin) を継いで、A. レヴィートフ (Levitov)、G. ウスペンスキー (Uspenskii) らへと続く一大山脈をなしたのである。⁵⁵⁾

帝政ロシアにおいて、学としての民俗研究は「ロシア地理学協会 (Russkoe Geograficheskoe Obshchestvo)」(1845年創設。以下、単に「協会」とする場合がある) を組織的中心として展開され、その主たる関心はいわゆる「人民的創造 (narodnoe tvorchestvo)」にあつて口頭伝承や神話の研究に重点がおかれてきたが、農奴解放に関わる諸般の事情が「農民問題」について具体的で信頼に値する情報を求めさせるようになったのは確かであろう。社会経済生活、家族関係、共同体、慣習法など農民の生活実態、つまり人民生活の社会的条件に関する科学的な解明がようやく目指されるようになったのである。⁵⁶⁾ それは「民族誌学 (etonografiia)」を広く「人民学 (narodovedenie)」として組み替えるに等しい作業になるはずであつた。こうしていわば「ロシアおよびロシア人研究 (izuchenie Rossii i russkogo naroda)」が本格化することになったのである。この時期に「協会」の活動は著しく拡充された。その民族誌学部門は1864年に人民の法慣習に関する資料を収集するための特別なプログラムを作成したが、それは「ロシア民族生活の真の基盤を発見する (naiti istinnye osnovy

russkoi natsional'noi zhizni)」こと、つまり「民族の神秘主義 (natsional'nyi mistitsizm)」を解明することを志向したのであった。⁵⁷⁾ さらに「協会」は1862年から1885年の間に全5巻の『ロシア帝国地理統計事典 (Geograficheskostatisticheskii Slovar' Rossiiskoi imperii)』を刊行した。これはロシアという国の全景 (かたち) を描き出そうとするほとんど初めての本格的な試みであった。彼らにとり人民を研究することは国家のあり方を究明することに等しいはずであり、現にこれら研究者の動きは政府中央と緊張した関係を生じさせることになった。1867年にA. F. リッティフ (Rittikh) が編んだ新しいヨーロッパ・ロシア地図は大ロシア人、ウクライナ人、白ロシア人それぞれの居住地を区分して相違を際立たせ、1874年から刊行が開始された全12巻本『絶景のロシア (Zhivopisinaia Rossiia)』はやはり同様な編集方針を採用したから、これら3つの東スラヴ族に極力、均質性を見出して、大ロシア人が全体を無理なく束ねることを当然の前提にしようとしてきたツァーリ政府の民族政策はその根幹を揺すぶられる恐れが出てきたのである。すでに1863年にウクライナ語での出版に非常な制限を加えていた内相ヴァルーエフは1870年に「協会」の南西部門を一時閉鎖するなどの対抗措置をとったのであった。⁵⁸⁾

しかしながら、こうしたロシア地理学協会の動きはとりわけて孤立したものであったのではなく、例えば、1873、74年にいわゆるリュボシンスキー委員会が欧露15県の郷裁判所活動調査報告を全7巻の圧倒的な分量でもって出版したことが法学界に農民慣習法研究のための一大刺激をあたえたこと⁵⁹⁾などは当時の知的雰囲気の在り処をよく伝える事柄なのである。「協会」でも特に1870年代中期以降、人民慣習法への関心は益々高まり、1876年、民族誌学 (etonografiia) 部門にA. G. カラチョーフ (Kalachov) が代表を務める「人民の法慣習に関する委員会 (Komissiia o narodnykh iuridicheskikh obychaiakh)」が新設されて、関連資料の組織的収集を開始した。⁶⁰⁾ 1876～89年の間に出版された慣習法関係の著作は実に3500編以上を数えたといわれるから、まさしく異様と思われるほどにまで加熱した関心の高まりぶりをはっきりと確認することができるのである。さらに、農村共同体研究もこの時期に大きく促進され、ある農村土地共同体資料集に添付された関連文献表にしたがえば、共同体関係の年代別著作数は1850年以前の4点に始まり、1851～55年5点、1856～60年99点、1861～65年54点、1866～70年44点、1871～75年76点、1876～80年372点と推移したというから、1870年代後半期の顕著な伸びに注目せざるをえないのである。⁶¹⁾

このように人民にたいする関心が公衆の世界をあまねくとらえたから、個人的にもその調査研究に人生をかけるひとが現れるようになったのである。近年、土肥恒之によ

る紹介などを通してわが国でもよく知られるようになった、V. I. セメフスキー (Semevskii) が『ロシア思想 (Russkaia Mysl')』誌に「ロシアの農民の歴史を書く時期ではないのか」と端的に目的を掲げた表題の論文を発表したのは、1881年であった。⁶²⁾ そこで彼は、「新しい社会体制創出の必要性」が問題とされ、「人民の自覚」が高まっている。ロシア国家史はあるが、ロシア人民史はいまだない。わが国のインテリゲンツィアは人民の金で子弟を学ばせている。学者は何よりも人民史に注意を払うべきだ、と熱っぽく主張したのである。「ロシア農民史はわが国の科学にとり人民にたいする借りである (istoriia russkikh krest'ian est' dolg nashei nauki narodu)」⁶³⁾とその信条を吐露した彼は、科学は人民への負債を返却する手段であると考えたのであった。つまり、科学の側から人民のほうへ歩み寄ろうというのである。そこには、そうすることが科学を民主化するひとつの方法であるとする確信があったであろう。

V. N. テーニシェフ (Tenishev) の場合も有名であろう。資産家であった彼は学術全般の振興に深い関心を示し、その晩年に出した著書『人間の活動 (Deiatel'nost' cheloveka)』(1897年刊)において科学の実践的な必要性を力説し、人間の周囲を取り巻く環境の総合的な解明を強く望んだ人であった。彼によれば、人間観察はそのための重要な一環であり、それは科学的方法をとまって行われなくてはならないものであった。同じ年に彼はそのために詳細な『中央ロシア農民に関する民族誌学的情報 [収集] 計画 (Programma etnograficheskikh svedenii o krest'ianakh Tsentral'noi Rossii)』を策定し、調査を実際に進めるために私的に『民族誌学ビュロー』まで開設した。実際に調査は中央部と北部の24県で348人の協力者をえて実施され、膨大な資料が集められた。しかし、もうひとつの『教育ある階級の都市住民に関する民族誌学的情報 [収集] 計画 (Programma etnograficheskikh svedenii o gorodskikh zhiteliakh obrazovannogo klassa)』(通称『ロシア官吏に関する計画』) は手付かずにと終わった。興味深いことは、これら『計画』の名称からも類推できるように、テーニシェフの場合もロシア社会の二重論を意識していたらしいことである。⁶⁴⁾

革命派、それも革命事業を人民の力に依拠して遂行しようとする者たちにとり、「人民研究」が死活的意味合いを有したことは本論で別に詳しく見るとおりであるが(とくにII-4.を参照)、この時期以降、革命結社『土地と自由』や『人民の意志』がそのために具体的な計画を立てていたことはそれぞれの場合について容易に判明することである。⁶⁵⁾ 人民の意志派の重要な活動家であったN. S. ルサーノフ (Rusanov) はベルビ=フレロフスキーの『ロシアに

おける労働者階級の状態』(1869年刊)が世に出た頃を回想して、自分でも地元のオリョール県の樵や麻梳きの労働と生活の実態を調べようとして、当時、中央ロシアで出回っていた農村調査プログラムを利用したと話しているほどであるから、志ある人たちの間ではこの種の実態調査がブームにすらなっていたと思われるのである。⁶⁶⁾

さて、1867年の4月～6月にはモスクワで「全露民族誌博覧会 (Vserossiiskaia etnograficheskaia vystavka)」が開催され、そこには帝国各地のいわゆる民族衣装を着用したマネキン人形288体をはじめ、生活様式を伝える日用雑器などが展示された。この企画の中心にいたのは当時の代表的な人類学者 A. P. ボグダーノフ (Bogdanov) であったが、明らかにロシア政府はこれを帝国の強大さと偉大さを誇示する場に利用しようと考え、ツアー自身も親しく観覧した。会期の来場者は9万人以上といわれ、公衆のあいだにこの種の知識を広く普及するのに貢献したのである。⁶⁷⁾ さらにこの年にスラヴ諸国家の盟主たらんとして、この博覧会の延長線上で「スラヴ人大会 (slavianskii s'ezd)」が開催されたことも付記しておかなければならない。⁶⁸⁾ ここで確認された博覧会 (vystavka) の成功は主催者側に自信を与え、その後も類似した一連の博覧会が帝国内で繰り返されることになった。それらの集積効果がロシア帝国臣民にたいして自分たちは多様性をとれないつつも全体としてはひとつのロシア国民であるとする意識の確立を促したであろうことを過小に評価してはならないであろう。

すでに1864年にはモスクワ大学に付属して科学知識を公衆に普及する目的で『自然科学愛好者協会 (Obshchestvo liubitelei estestvoznaniia)』が開設されていたが、それは「全露民族誌博覧会」や「スラヴ人大会」が開催された1867年に『帝室自然科学・人類学・民族誌学愛好者協会 (Imperatorskoe obshchestvo liubitelei estestvoznaniia, antropologii i etnografii)』として改組改名された。「帝室 (Imperatorskoe)」という冠が付されただけでなく、広く人間学が加えられた点が肝心であるが、そのことは先の「スラヴ人大会」の企てが象徴した時代精神 (dukh vremeni) と明らかに符合する面を有したのであり、内実は多分にロシア帝国主義的性格を強化するものであった。したがって、そうした雰囲気の中で、さらにそれを強化しようとして、科学なるものが少なくとも形式的には一般化する時代をロシアは迎えたと考えてよいであろう。この流れの中で、民族の歴史的な起点を再確認しようとする動きも顕著になり、各地に「古文獻学委員会 (arkheograficheskaia kommissiia)」がつくられた。1877年には P. P. ヴァーゼムスキーが『古代文字文化愛好家協会 (Obshchestvo liubitelei drevnei pis'mennosti)』を結成し、精力的な出版活動を展開した。⁶⁹⁾ これらは宗教 (正教) だけでなく、言語や生活

習慣までも人民史研究に取り込もうとする流れの中で起きたことである。

帝国の全景にたいする関心の高まりはおのずから地域研究 (kraevedenie) を盛んにした。広大な地域に関する人文地理的な知見は皆無に等しい状態であったから、ここでも基礎的な情報の収集が図られることになった。P. V. シェイン (Shein) や S. V. マクシーモフ (Maksimov) のような地域資料収集家 (kraevedy-sobirатели) が活動し、その結果、膨大な資料が整理刊行されるようになった。さらに軍部がそのために動いたことも注目値する。1871年には少将 N. N. オブルチョーフ (Obruchev) を中心とした陸軍参謀本部の統計家たちが非常に包括的な国勢調査である『ロシア (Rossiia)』を『軍事統計集 (voenno-statisticheskii sbornik)』の第4分冊として刊行した。⁷⁰⁾ 系統的なプログラムに則って、学者たちの「統計的-民族誌学的遠征隊 (statistiko-etnograficheskaia ekspeditsiia)」や「科学的旅行 (nauchnye puteshestviia)」が編成されたことも見逃せないことであった。帝国中央権力の実効支配が弱い周辺地域にたいしては科学研究を大義名分とした、こうした学術探検隊が何次にも渡って組織された。中央アジアの場合、最初の大規模なそれはアム＝ダリア方面にむかって1874年に派遣されたものである。⁷¹⁾ こうした試みはロシア帝国の版図を最終的に定めるにあたって先駆的かつ先導的な役割を果たしたと考えられる。ちょうどその年に帝政ロシアによる征服がトルクメン人の抵抗によって最も遅れていた外カスピア州 (カスピ海東部地方) に臨時統治法が公布され、「辺境 (krai)」を外カスピア軍部長官が統治するようになったのであった。⁷²⁾

この時期のロシアで啓蒙活動の先頭に立ったのは、自然科学者たちであった。その相当部分は人民大衆にたいする啓蒙に関心を抱いていたと見られ、それが特にダーウィン学説の紹介を通して図られたことは特徴的であった。『種の起源』が刊行されたのは1859年であり、ダーウィニズムが欧州の知的世界を席卷するが、この現象とロシアも無縁ではなかった。ドイツにダーウィンの思想を紹介した E. ヘッケル (『自然創造史』[1868年刊]) の影響を受けた A. O. コヴァレーフスキー (Kovalevskii) と特にその弟である V. O. コヴァレーフスキーがロシアヘダーウィニズムを紹介するのに力があつたのである。学術機関では、科学アカデミーよりも大学がそれに熱心であった。ここでも、あらゆる権威にたいして懐疑的で批判的たることによって彼ら大学人は時代精神を反映しようとしたのである。1864年には『種の起源』がモスクワ大学の S. A. ラチンスキー (Rachinskii) によって露訳されたがその出来が悪くて、同年すぐに M. ヴラヂミールスキー (Vladimirskii) の別訳

が出た。ダーウィンのほかの著作もロシア語で紹介された。そして、本論にとりさらに大切な点は自然科学者が科学の社会的普及を重視したことである。すでに触れたチミリャーゼフはダーウィンの学説を平易に解説する啓蒙書を出した。1868年にピーサレフの葬式で「過激な」発言をしたことを理由に逮捕された経歴を有する出版者 F.F. パヴレーンコ (Pavlenkov) が1880～90年代に実に500点余りの科学的啓蒙書を出版したことはこの時代相の一端を象徴的に物語るものであろう。⁷³⁾ 彼らが目指したものは西欧近代が生み出した合理的精神をロシアに普及することであった。したがって、このような人たちがそうした目的の実現にとり阻害要因となりうると判断された事柄にたいして厳しい評価を下したのは自然の勢いであった。例えば、その中には人民大衆の間に普及していた「内容的にも安価な」いわゆるルポーク (大衆向けの民俗版画) があった (出版については後節で取り上げる)。彼ら自然科学者はその点で余りに西欧近代的であって、伝統的なロシア農民の価値観と鋭く衝突する運命にあったのである。

教育、とりわけ知育を意味する *obrazovanie* から派生するいくつかの用語が流行したのもこの時期の社会風潮であった。ふつう古典的として引用されることが多い、同時代の流行作家 P.D. ボボルイキン (Boborykin) の「インテリゲンツィア」定義は「最高に教育を受けた社会層」(*vysshii obrazovannii sloi obshchestva*) であるし、⁷⁴⁾ 本稿が主題のひとつとして詳しく後述するように、急進派たちは「教育を受けたプロレタリアート」(*obrazovannii proletariat*) との関係に格段の配慮を払ったのである。当時まだ革命陣営にあったチホミーロフは1872年にペテルブルクの革命的な青年のあいだで加熱した論争を「文化的階級において [のみ] 人びとを発展させ育むことが必要である」と考える教育派 (*obrazovanniki*) と呼ばれた部分と、養育と宣伝とをまさしく超階級的にナロードと労働者にまで及ぼすべきであるとする人民派 (*narodniki* ナロードニキ) の二派の間のものとして紹介している。同時に彼は「ナロードニキ」なる呼称はこの時に初めて創られたとも主張している。⁷⁵⁾ そうであれば、「ナロードニキ」はまず何よりも人民の間での文化革命を志向する者たちを意味したのである。このチホミーロフの分類は、読み書きをはじめとする文化や教育の普及を是認する雰囲気満たされつつも、その適応範囲において鋭い意見対立を見ていた当時のロシア公衆の模索状態をよく示しているであろう。「ナロードニキ」はそうした志向性をもつ一派であり、その一方には人民大衆に知的世界を体験させることはかえって害悪をもたらすのみであると考えた部分もいたのである (「知識と革命」をめぐる、周知のラヴローフ派とバクーニン派の論争も広くこのような問題系の一部として整理しうるであろう。この論争につい

てはⅢ-5 [次号]で触れてみたい)。この啓蒙と教育のおよぶ範囲に関わる問題はたとえば国民国家形成問題とも深い関係を有することを思えば (啓蒙が果たすべき社会的役割として理念的に想定されたのは近代合理精神の普遍化である)、あきらかにその意味で「ナロードニキ」は最先端を走った近代化論者たちなのであった。この時期に、教養や教育が特定の部分に世襲的あるいは先験的に限られるのではなく、そうした制約を振り払って社会的に波及しだし、可能性があるところでは「教育あること」やさらには「知識人」をも意味する *obrazovannost'* という言葉が現実的な意味合いを持ちうる時代にロシアは突入したのである。プレハーノフなどがよく好んで用い、本論も大いに気にかけている存在である「労働者インテリゲンツィア (*rabochaia intelligentsiia*)」といった固有な用語法の登場もこうした背景を抜きにしては考えられないであろう。彼は学生にさえ劣らない知的な労働者がいることを発見して、その「文化性 (*kul'turnost'*)」を率直に驚いている。⁷⁶⁾ また、このような教養や教育に関わる言説の流布と「ナロードニキ」、とくにそのラヴリストたちによる書籍普及事業 (*knizhnoe delo*) とは無縁ではありえないであろう。彼らの運動は時代精神を非常に正確に反映したものであったと考えられるのである。

2) インテリゲンツィアと専門家

ロシアにあって「インテリゲンツィア」という言葉がはらむ多義性や多様性は等しく認められてきたが (一例をあげれば、上に触れたボボルイキンの定義であるが、それは官吏や行政権力者をもその範疇に含むものとして理解されていた)、⁷⁷⁾ しかし、その一方で多くの論者がそれらに共通する特性を見出そうとする努力を重ねてきたことも確かである。B. エルキン (Elkin) は、ロシアでは教育ある階級 (*the educated class*) のうち、現存する政治体制の沈滞を克服し、体制の変革を達成しようと熱望する人々が「インテリゲンツィア」であると理解されてきたという。⁷⁸⁾ すでに触れた坂内徳明の場合、ラヂーシチェフの『旅』がナロードの文化の存在を世に知らしめたこと、そしてそれを「一つの社会プログラムへ結晶させ」る作業を担うべくこの時期に登場したのが「インテリゲンツィア」であるとするのだから、⁷⁹⁾ その出現は18世紀末と論者のなかでは時期的におそらく最も早く、何よりも「ナロードの発見」と不可分の関係でその存在を確認しようとする特徴がある。さらに、既に引用した M. コンフィーノの秀逸なロシア・インテリゲンツィア論における整理に従えば、それはほぼ次のような特性を備えたものである。つまり、公益 (社会、経済、文化、政治) に対する深い関心、そうした諸問題に対する罪と個人的な責任感、政治・社会問題を道徳的なものとみ

なす傾向、限りなく論理的な結論をもとめようとする義務感、物事はなすようにはならないが、何かはなすべきであるとする信念である。⁸⁰⁾

以上のような性格はピョートル一世期に始まるロシア知的生活史の過程で徐々に形成されたはずのものだが、こうした人間類型に対して「インテリゲンツィア」という概念を差し向けるには、やはり農奴解放前後期の公衆にたいして精神的イムパクトを加えた問題群の発生が必要であったように思われる。⁸¹⁾ すなわち、それらはとりあえず、次のような系で構成されたであろう。1. 軍隊と官僚制の機能不全を顕在化したクリミア敗戦とツァーリ・ニコライの象徴的な突然の死、2. 新帝の即位と農奴解放、つまり新しい時代への期待、3. 農奴解放の実施と自由への期待の破綻、「解放された」農民たちの苦悩を前に教育ある人たちの一部は真の自由を実現するほかに選択肢はないと決意したこと、4. 農奴解放令自体が多くは教会を通して周知徹底が図られたこと。だが、これまで教会は農奴制を神の名において支持してきたではないか、では何を信じ、誰を非難すべきなのか、そして5. すでに垣間見たように、科学的な世界観が社会的に成長し普及したことなどである。

これらは主に貴族のサークルやその家族の内部における対立軸を構成した主要な論点でもあり、多分に世代間の鋭い対抗をともなって表面化し現象化したものであった。ここでの衝突を契機にして、子は親と別れて大学都市へ出てサークル活動と共同生活の日々をおくる新しい環境の中で、真に生きるために人生の意義を見出そうとする苦闘の道を選び取ったのである。ここでよく観察された、「父と子」の世代間の対立は、父が事態を正しく認識しているにもかかわらず行動を差し控える、つまり社会・政治問題を道徳（罪の感情）の問題としてとらえていないと子の側が強く非難することによく表現された。⁸²⁾ 道徳的に専制へ反抗することがニヒリストの基本的信条であり、ニヒリストのニヒリストたる所以であった。彼らが父、教会、役人などの権威性を拒絶しさらに束縛と規制を拒否したのは、まずは階級や階層、グループではなく、あくまで個人（自分自身）に関してものであった。女性のニヒリストであるnigilistkaは働き、学び、サークルやコミュニンに入るために、家族、夫、子供らと別れ、貴族の巣を離れて、都会に自由な空気（両性平等と自由恋愛）を求めたのであった。そうして得られる（はずの）自立と自由はおそらく新しいライフ・スタイルと道徳律を生み出すであろうと期待された。こうしたことがロシア・インテリゲンツィアにとってそのエトスの基盤になったと考えられるのである。⁸³⁾ 「ヴ・ナロード」はその先に想定されるはずのことなのであった。

このようにいわばカウンター・カルチャーを創造しようとしたことをもってようやく1860年代にロシアのインテリ

ゲンツィアはその第一世代を画しえたと考えられるのであるが、用語法において「インテリゲンツィア」は時代的に変遷を重ねることになった。「大改革期」になると、それはピョートル一世期以来そうであったように官僚の主たる供給源としてだけあることを停止してしまい、非官僚的な民間分野にも社会的裾野を広げたことがその語義と語法を豊かにした背景になったと考えられるのである。つまり、その分、「インテリゲンツィア」に対する解釈に幅が増すことになった。A. P. ポラード（Pollard）はそれは知（intelligence）といった意味合いから始まって自覚（consciousness）、啓蒙、文明あるいは文化の意義を獲得するように進化したと整理し（I. アクサーコフの場合はそれを哲学的コンセプトから社会学的なそれへと変換させたことを想起せよ）、やはり同じ1860年代までには「インテリゲンツィア」は「自覚の担い手（bearers of consciousness）、最終的にはその自覚を有する社会集団、その人民との関係、社会におけるその活動といったことまでを含意するようになった」と指摘している。⁸⁴⁾ また、R. パイプスは、ストルーヴェの議論を下敷きにしながら、19世紀中葉に近代化が広く客観的文化的な意味での「インテリゲンツィア」を大衆とは異なる社会的グループとして生み出したが、その内部にはより狭い主観的な意味での intellectual（知識人）概念に相当するもうひとつの「インテリゲンツィア」が1860、70年代に発生したというのである。⁸⁵⁾ そのストルーヴェはさらに、政治的カテゴリーとしてインテリゲンツィアが登場したのは改革の時代である。1860年代に出版活動の興隆とともにそれは精神的に独自なものとして知識階級から区別されるようになったとも言っている。⁸⁶⁾ インテリの数的増加と社会的存在感の増進とが観察されるようになったから、コンフィーノはとくに1870年代以降、この用語は「明解な下方倍音（positive undertone）」を帯びるようになったと指摘している。⁸⁷⁾ それに力があつたのは、上述したニヒリスト的基盤のうえにナロードニキの志向性が加わったことであろう。人びとは「インテリゲンツィア」という言葉を聞いて、それに込められたある確かなニュアンスを感知するようになったのである。ここではこれ以降の用語法上の変遷についてフォローする必要を認めないが、近代ロシアの「インテリゲンツィア」はここで感得されたニュアンスを基本に据えたことは確かなようである。

さて、この一方で、この時期にロシアにおいて、いわゆる専門家（professional）が正式に登場したことにも注目したい。それは教育や社会構造だけでなく、インテリゲンツィアの文化によっても影響を受けた部分である。あるいは文化的に周囲から孤立しているという感情が彼らをしてインテリゲンツィアに対して親近感を抱かせることになっ

たとも言えるであろう。「専門家的インテリ (professional intelligenty)」なる用語が派生した所以である。近年、とくに欧米でのロシア史研究において、社会変容を理解する鍵としてこの専門家の動向に初めて本格的な関心が寄せられているが、少なくとも19世紀をとおしてロシアの専門家たちが有した存在意義は、政治的なものからはほど遠く、まずは文化的なものであったと考えられる。

改革以前、これら専門家のほとんどは何らかの形で軍部諸機関と関係していた。たとえば、医師の過半は軍医学校で養成されていた。このことは技術者一般についても言えた。軍部とは関わりなく養成された法律家などの専門家もそのほとんどが国家機関で働くことが通例であったから、ひろく専門家の世界は公的な性格を帯びていたのであった。それが「大改革」の開始とともに大きく変化することになった。改革後、大学、高等専門学校などの高等学術機関が専門家養成の役割を益々果たすようになり、⁸⁸⁾ それと同時に専門家を取り巻く世界では私的な部分が目立つようになった。

高等学術機関はペテルブルクに集中していた (1896年で25。モスクワは8、残り30が全国に散在した)。なかでも「帝室ペテルブルク科学アカデミー (Imperatorskaia Sankt-Peterburgskaia Akademiiia Nauk) (これは1836年～1917年の名称) は「ロシア帝国の最重要な科学者身分」を保障してロシア科学界で中心的位置を占め、1865年には創設140周年を迎えた。ピョートル一世が、1700年にベルリンにアカデミーを創設したライプニッツから影響を受けて、国家が科学振興を支援するようになったのはよく知られた話である。しかし、時間の経過とともにインテリの多くからそれは「ドイツ人の機関」としての酷評をますます受けるようになった。「科学アカデミー」はロシアのものではなく、その現実と真面目に対峙しておらず、むしろロシア人科学者の成長を阻害する存在でしかないというのがそれへ加えられた主たる非難であった。特にクリミア敗戦後になるとそれは立ち遅れが目立ち、革新的な気性に乏しく、社会から隔絶していると公衆によってみられることが多くなった。そこで、「科学アカデミー」の側としては「ロシア化」を試みるころとなり、1861年にはロシア語による最初の科学雑誌である『帝室科学アカデミー雑誌』を創刊し、1865年には「ロシア科学の父」としてロモノーソフ没後百周年記念事業を行ったりした。⁸⁹⁾

1875年までに全ての教授・助教授の83%がロシアの大学から最初の学位を受けるようになったから、全国的にみても、人的な面で科学の「ロシア化」は急速に進んだと考えられる。⁹⁰⁾ 19世紀後半期には、ロシア人科学者が国際的なアカデミック・コミュニティへ参加しだしたから、その分、西欧文化を知る人物がロシア公衆のなかに確かな位置

を占めるようになったともいえるであろう。⁹¹⁾ ここに成立した「アカデミック・インテリゲンツィア」は、専制権力はリベラルな方向へと変容すべきだし、またそうなるであろうこと、そして、「科学 (nauka) (それはロシアにおいては、単に science というよりはより広く Wissenschaft といった意味合いで使われる用語である。普通は人文科学的含意が優先するが、同時に自然科学と強く連携するものとみなされる)⁹²⁾ は個人的な知的報酬にかぎられるものではなく、ロシア社会の進歩や人民福祉の向上をも追及するものであるということとその最小限の共通信念としたのである。⁹³⁾

帝政ロシアの大学制度は早くも19世紀初頭に成立したが、先述したとおり、とくに1863年令によって大学は安定した地位を確保することになった。物理数学部、歴史文学部、法学部そして医学部が当時の四大基幹学部として整えられたが (これは原則であって、すべての大学、つまり、モスクワ、ペテルブルク、ハリコフ、カザン、キーエフ、新ロシアの六大学がそれらを備えたというのではない。たとえば、ペテルブルクには医学部はなく、かわって東洋語学部があった)、いわゆる「リベラル・アーツ」および自然科学は弱体で、学生の多くは医学と法学を実学として学んでいた。学生の身分別出身は1875年で貴族5割、聖職者3割、その他2割といったところであった。⁹⁴⁾ その卒業生らが専門家として各分野で活躍したのである。欧米諸国にたいするコンプレックスが実用的学問を優先させるのに力があつたと理解することはできるであろう。19世紀後半期の大学卒業生は約5万8000人で、そのうちモスクワ大学が1万9000人弱、ペテルブルク大学が1万1000人強で両大学で過半を占めた。⁹⁵⁾ 大学以外にも高等専門学校 (institut) が専門家を養成した。そのうち、鉱山高等専門学校 (Gornyi institut) は1000人以上、ペテルブルク高等技術専門学校 (S.-Peterburgskii prakticheskii tekhnologicheskii institut) は2900人、鉄道技師高等専門学校 (Institut inzhenerov putei soobshcheniia) は2500人、水工土木高等専門学校 (Institut grazhdanskikh inzhenerov) は1200人以上、林学高等専門学校 (Lesnyi institut) は1500人以上 (いずれも、同時期の卒業生を世の中へ送り出した。⁹⁶⁾ これらは鉱山、機械、通信、運輸、都市計画、林業など近代国家建設を遂行するために不可欠な人材を供給したのである。医学畑ではペテルブルクに所在した陸軍系列の外科医学アカデミー (Mediko-khirurgicheskaia akademiia) が全国に医師の五分之一を供給して大学医学部とならぶ重要な位置を占めた。学位授与機関として認められたのは、大学、神学アカデミー (Dukhovnaia akademiia) のほかにこの外科医学アカデミーだけであったから (女性が学位を取ることを最初に認めた高等教育機関でもあった。1882年で女性博士は227人を数えた)、その権威性はかなりなものであったと考えられる。⁹⁷⁾ 今後

の議論のために、この外科医学アカデミーがかような位置付けをえた事情について一言しておきたい。1867年にチューリヒ大学が旧来の男子独占を排して女子学生にもその門戸を開き、女性留学生 N. P. スースロヴァ (Suslova) にたいして医学博士の称号を与えるという、ロシアの知的社会を強く刺激する出来事があった。これに強く促されて、その後、5年間で100人以上のロシア人女性が同大へ留学することになったのである (1873年時点で77人が在学)。こうした動きは、後にみるように、チューリヒのロシア人コロニーのあり方にも影響を与えざるをえず、さらになによりも留学した女性が思想的に急進化することを当局は憂慮するようになった。そこでツァーリ政府は「女性問題」にたいして「共感的な態度」を示す必要を認め、外科医学アカデミーに助産科学の博士課程を設置して、そこに女子学生を受け入れることにしたのである。⁹⁸⁾

このように、ロシアにおいてこの時代は専門家の養成が本格化したのであり、これら大学、高等専門学校などの諸機関は「父」と離れた「子」を受け止める場を提供することになった。それ故に、後に詳しく見るように、ナロードニキに外科医学アカデミーの学生が多かったことは決して単なる符合ではありえなかったのである。彼らは社会変革事業に携わる専門家たらんとした人たちであった。

さらに、専門誌の発行がそれまではほとんど専ら政府ないし教育機関でなされていたのが、社会的な諸組織がそれに参加するようになったことも専門家の私的な世界を拡充する方向に作用したと考えられる。その一端を示せば、1866年にロシア技術協会は『通報 (Vestnik)』を創刊し、モスクワ法律家協会は1867年に『法律通報 (Iuridicheskii vestnik)』を、ペテルブルク法律家協会は『民法刑法雑誌 (Zhurnal grazhdanskogo i ugolovnogo prava)』を1873年にそれぞれ出し始めたのである。このような動きは専門家の世界を独自のものとするのに多大な貢献をなしたはずであった。さらに、バルツァーは全く私的な (独立した) 雑誌が出現したことにもその注意を向けている。⁹⁹⁾ たとえば、1882年にはロシアで最初の完全に独立した技術雑誌である『技術者 (Inzhener)』が創刊された。その編集者であったのが、ヴィシネグラツキーらのサークル『五人会』 (後述) のひとり、A. P. ボロジン (Borodin) [化学者にして作曲家であった人物とは別人] であった。¹⁰⁰⁾ そこで彼はお気に入りのテーマであった、アメリカの技術と技術者精神の高さ、鉄道を国営化することの害悪、通信省技師の無能力さ、技師養成機関の不足などを自由闊達に議論したのである。

法的に「学者 (uchenyi)」なる用語がロシアで市民権を獲得したのは、1862年4月10日法によってである。しばらくその用語のみが流通したが、世紀末になって「学識者 (uchenyi deiatel')」, 「科学関係者 (rabotnik na nauchnom

poprishche) といった言葉もそれと同義的に使われるようになった。¹⁰¹⁾ すでに触れたように、ロシア語の nauka が、ドイツ語の Wissenschaft と同様に、英語の science より幅ひろく一般的な意味合いを有していること、つまりそれを用いれば「知」のほとんどあらゆる分野に言及することが出来、自然科学と社会科学との区別を格段、気にする必要がなかったという特有な言語事情もそうしたゆるやかな学者論を世間に通用させる力になったと思われるが、ここで大事なのはこうしたことが既述したごとき内容のインテリゲンツィアなる範疇の成立に寄与したであろうことである。

ゼムストヴォがその独自の活動を「第三分子 (tretii element)」と通称された専門家に負っていたことは、近代ロシア史でよく知られた事柄のひとつである。フィッシャーはゼムストヴォが「下級 (lower)」インテリゲンツィアの過半を供給したと断言している。¹⁰²⁾ 「ゼムストヴォ・インテリゲンツィア」は医師、教師、そして統計家をその三大構成要素としたが、獣医や農業技師 (agronom) もその大切な一員であった。彼らは当然に高い教育水準を誇り、1870年代末から1880年代中ごろにかけて医師、教師、統計家の順でそれぞれが組織的な団結をみせるようになったのである。この時期で、ゼムストヴォ34県で彼らの総数は2万3000人と推定されるから、これら「ゼムストヴォ・インテリゲンツィア」は政治生活において重要な要素となっただけではなく、「地方インテリゲンツィア (provintsial'-naia intelligentsiia)」として彼らの動向は社会的雰囲気を整えるのにかなりの貢献をしたであろうと考えられるのである。¹⁰³⁾

2. 「科学と文化」の時代的雰囲気

1) 「厚い雑誌」の普及

R. パイプスは19世紀ロシアのインテリゲンツィアを結集した諸制度 (institutions) として、サロン、大学、サークル、「厚い雑誌 (tolsty zhurnal)」, そしてゼムストヴォの5つを上げている。¹⁰⁴⁾ これらのうち、人間が集結する場としては「厚い雑誌」だけ他と性格を違えるであろう。それはまず一人の人間が立てこもる読書世界そのものであって、サロンなどのように他人と顔を会わせたり、知人と議論を交わしたりする出会いの広場ではない。それは読む者の精神世界に何らかの作用を及ぼすことで時空を超えて結合と連帯の諸関係を実現する可能性を孕んだ仕掛けなのである。理論上はそうした関係の広がりは無限なのであり、なおかつその性格は、当時のロシアにあったは、体制変革的にならざるをえない恐れが多分にあったから、当局は、最悪事態主義に忠実に振舞って、これらの動向に過剰反応をなすことが常態化したのであった。

「厚い雑誌」はとくに1855年以降、検閲規制が緩むにつ

れて流通が盛んになった（検閲については、後段で触れる）。1850年代と60年代初頭を代表したのは何よりも『同時代人（Sovremennik）』であったが、それが1866年に閉刊されてしまうと、『祖国雑記（Otechestvennye Zapiski）』（1868～84年）、さらには『ロシアの富（Russkoe Bogatstvo）』（1876～1918年）がその後を襲ったのである。歴史家にして社会活動家であった M. M. スタシューレヴィチ（Stasiulevich）がやはり1866年から刊行した『ヨーロッパ通報（Vestnik Evropy）』（～1918年）は親西欧リベラルな調子を維持して、ペテルブルクの「進歩的社会（obshchestvennost'）」¹⁰⁵の結集核的存在となり、教育の古典主義的回帰、ネオ・スラヴ主義、ナショナリズム、貴族による反改革の企てなどにことごとく反対したから、当局はその読者たちを立憲主義者の集団とみなしたほどであったのだが、さらに1880年からはもう一つ『ロシア思想（Russkaia Mysl'）』（～1918年）もそうした役割を担うようになったのである。

「厚い雑誌」といわれたのは文芸にかぎらず社会や政治の諸問題などを扱って自ずから頁数が増えたからであるが、こうした総合雑誌の類がかくも評判になった理由のひとつはそれが専門家の知識欲を満たすのに成功したことにある。政府や公的機関が供給する通報は元来、彼らに満足をもたらすものではなく、この時期から社会的な組織や私的な機関が繰り出す情報が専門家たちのいわば生活必需品になったのである。¹⁰⁶ 例えば、『祖国雑記』の時事評論が「農業改革、共同体、慣習法、農村における家族および社会的諸関係、行政的農業的な秩序、つまりそれによって農村が存在しているもの」を繰返して対象としたことは、すでに触れたように、人民（ナロード）に関する知識に飢えていた当時の公衆の欲望を満たすのに少なからぬ貢献をしたのであった。¹⁰⁷ さらに、『ヨーロッパ通報』の「国内時評（vnutrennee obozrenie）」欄はゼムストヴォの活動をもっとも良くフォローしたことで知られ、同誌がゼムストヴォの準機関誌的な存在として広く認知されていたことは周知のとおりである。¹⁰⁸ このようであったから、「厚い雑誌」は世論の形成に貢献するほどの役割を果たすことになったのである。

ここで、当時、ペテルブルク検閲委員会検閲官で、その「リベラルな」判定で注目された F. P. エレニョーフ（Elenov）¹⁰⁹ が1860、70年代について書いていることは引用に値するであろう。

「わが国には政党も政府反対派（野党）も存在しないが、いかなる立憲国家におけるよりも強力な反対派が存在する。それは「全読者ロシア（vsia chitaiushchaia Rossiia）」を自己の網に捉えており、しかもその幾つかは何と国家権力や私的所有権の否定までも主張して

いるのだ。ロシアでは西欧議政党にかわって、『同時代人』、『ロシアの言語（Russkoe slovo）』、『言語（Slovo）』、『声（Golos）』、ネクラースフの『祖国雑記』といった政党が形成されているのだ」。¹¹⁰

エレニョーフがここでいう「全読者ロシア」はすぐれて直感的な用語であるが、これら総合雑誌の読者層が全国に分布し、それらが無言のうちに何らかの存在感を社会に誇示するようになりつつあることを感知したうえでの表現であろう。『ヨーロッパ通報』の発行数は1872年で8000部とされ、¹¹¹ 『祖国雑記』の場合で定期購読者は1862年で4000人、1868年で5900人、1881年で1万から1万2000人、また『ロシアの富』の発行数は1895年で7000部、1899年で1万1000部などといわれるから、¹¹² それ自体は格段に大きな数字ではないであろうが、ロシア読書人の慣例として1冊の雑誌が何人、何十人の間を回し読みされたことは実質的にこれらの数字を相当倍させたのである。さらにおそらくそれ以上に当局を悩ませたのは、地方の都市や農村の領地（地主屋敷）に個別分散的に居住している「厚い雑誌」の読者たちが目に見えない思想の力で強く結びついているのではないかという恐怖心であったと思われるのである。¹¹³ この点で、ナロードニキであった S. F. コヴァーリク（Kovalik）がつぎのように語るのは余りに悲観的であると思われる。つまり、自らを「老人（starik）」と名乗って後日、長文の回想記を執筆した彼は、1870年代が近づくにつれ、ロシア社会は政治的関心を著しく弱化させた。1870年代ほどリベラリズムが衰えた時代はない。公衆はバラバラになって完全な不一致が支配する「希望が持てない時期（mrachnyi period）」であり、インテリは政治活動に信を失い、政治を否定してややもすると「純粹社会主義（chistoi sotsializm）」へと傾斜した、というのである。¹¹⁴

2) 「科学と文化」の全国的ネットワーク — 科学団体の設立

『ブロックガウス・エフロン百科事典』はこの時期に陸続として形成された近代ロシアの「団体（Obshchestva）」を次のように分類している。¹¹⁵ 大分類は公共的なもの（publichno-pravovye）と私的なもの（chastno-pravovye）の二つであり、前者は都市やゼムストヴォなどの地方自治に関わる団体と貴族、商人らの身分的自治団体が該当するが、その種類は多くない。圧倒的に多数を占めてパラエティに富むのが後者である。それは大きくは4分類されている。第一は経済生活の発展を目的とするもので、企業家団体、相互扶助団体、生産性向上のために新知識を普及する団体などがこれに該当する。第二は精神生活の向上を目的とする団体で、これはさらに、禁酒団体や聖書普及団体のように住民の精神生活の向上を図るものとその知的美的水準を

高めようとして教育、芸術、科学の振興を図るものと小分類されている。第三は住民の肉体的発達を促進する目的を有するものであり、第四は援助団体が該当するが、それらはさらに非常事態にあたり対象を差別することなしに援助活動をおこなう部分（赤十字や消防などが相当する）と貧窮者支援を行う部分とに二分されている。このうち、後者はその規模の如何を問わず、多数の存在を認めることができる。これら全体を通して何よりも明確なのは、近代ロシアの「団体」は「非政治的」であったことである。

上の分類法は公私を基準にしているが、ここでは職業的営利を追求する「職業団体」と区別して、やはりこの時期に本格的に登場してきた非営利的な科学活動に専ら従事する学術的団体である「科学団体 (nauchnye obshchestva)」の具体例を検討することで、ロシアにおける「科学と文化」の時代の社会的な特質の更なる一面を探ることにしたい。

ロシアではこうした団体としては、古くは1765年に起点を置く自由経済協会 (Vol'noe ekonomicheskoe obshchestvo) が有名であるが、19世紀初頭に入るといくつかの分野で存在をはじめ、その後、「大改革期」に目立って増加したのである。例えば、ソボレーヴァは「科学団体」を全国に1861年で36、1900年で125を数えている。¹¹⁶⁾ この時期に、「数学協会」(1864年)、「ロシア歴史学協会」(1866年)、「ロシア技術協会」(同年)、「自然科学者協会」(1868年)、「ロシア科学協会」(同年)、「ロシア物理学協会」(1872年)といったように、集中的にそれらは発生したのである。19世紀末のペテルブルクには70以上（うち医学30以上、自然科学16、人文科学11、技術10、教育4など）あったと指摘されるから、¹¹⁷⁾ ここでもこの首都の中心性は再確認できる。

先に言及した梶雅範はメンデレーエフを論じながら正当にも「[18]60年代期」に「化学者が集団的な存在になった」ことを指摘し、さらに「科学者を含め、専門職業人として生き、奉仕できる条件がロシアでも整い始めた時期」¹¹⁸⁾ だとも言っている。たしかに一方の側で政府による強い統制という問題をかかえながらも、ロシアに専門家集団が抬頭する時代が初めて到来したといつてよいであろう。「科学団体」はなによりも専門家たちが社会的な認知を与えるための組織体であった。そして、社会の側も科学に対する共感を示すのにもはや躊躇するところではなかったのである。雑誌『知識 (Znanie)』が1870年に創刊されたときに、その実質的な編集者兼発行人はナロードニキ・シンバの I. A. ゴーリドスミット (Gol'dsmit) と D. A. コレプチェフスキー (Korepchevskii) であったが、当時の代表的な学者たちがそれに寄稿し、公衆の側はそれを支持したのであった。ダーウィン『種の起源』をはじめとして、「国際科学文庫」の名のもとに精力的に西欧作品の翻訳出版を行い、特に若い世代にたいして影響を与えて「知」にたいする新たな社

会的な雰囲気づくりに貢献したのは、この『知識』編集部であった。¹¹⁹⁾

しかし、それだけではない。この改革期の大きな特徴としてさらに指摘しうるのは、科学者や専門家のあいだで私的な交流のネットワークが形成され、なおかつそれが何らかの実的な作用と結果とを社会に及ぼしたことである。ヴシニッチの労作にして当該問題の標準作は、「知的統一体 (the intellectual unity)」の形成がこの時期のロシアに[も]認められることを実証しようとするものである。¹²⁰⁾ ここで、ひとつエピソード的な話を挿めば、先掲の回想記でアンナ・ドストエフスカヤは1877年12月に夫ドストエフスキーが科学アカデミーの名誉会員に選出されて本人同様、非常に満足したことを述べた後で、その事があって以来、作家は文学者協会が毎月、レストランで開催していた夕食会によく出席するようになった。その招待状は化学者メンデレーエフの名で各方面に送られていたというのである。¹²¹⁾ この見落とされがちな話は、実のところ、なかなか興味深い意味合いを含んでいるように思われる。それは、作家自身が科学アカデミーなるものの「権威性」に屈服していたということだけではなく（この点は本論にとってはどうでもよいことだ）、何よりもメンデレーエフという一化学者が分野を超えてある種のカリスマ性を発揮しうのような幅広い文化人サークルのようなもの（あるいは文化人階級社会とでもいいうる）がこの首都において成立していたと推察されることである。この広がり具合を特定する手立てを今の筆者は持ち合わせないから明言することは憚られるのだが、ヴシニッチが言う「知的統一体」は印象的には的外れではないであろうという印象を抱くのである。たとえば、現に、1859年に『文学基金協会 (Obshchestvo literaturnogo fonda)』が文学関係者の生活を保障するために創設されたことは、¹²²⁾ 「文学なる専門性」(literaturnost' も訳しにくい用語であるが、仮りにこうしておく。英語では literariness に相当するであろう) の存在を社会的に認知してそれを維持するために資金カンパする人たちが知識人層を中心として生まれたということである。

ここで少しだけ脇にそれて文学談義をすれば、とりわけロシア人が文学にたいしてその意義を認め、尊敬をもって対する傾向が顕著であったことから、当然のように、この literaturnost' をめぐる議論は白熱したのである。19世紀後半期には、文芸至上主義と命名しうるものが少ずつ抬頭をみせるようになったこと、文学活動の政治からの自立が志向されるようになったこと、そして出版業が盛んになり、とりわけ人民向けのそれが流行したことが「文学なる専門性」にたいして大きな圧力となったことなどがその主要論点であったのである。¹²³⁾ 全体的としては、プーシキンの時代に生まれた「文学」が社会的な認知をようやく受ける

ようになったということでもあろう。「国民文学」の発生といった問題もこうした背景抜きには考えにくい。

実際のところ、近年の研究は個別的にはあるがそうしたサークルの存在を指摘している。B. S. カガノーヴィチ (Kaganovich) は1880年代前半のペテルブルクで発生した「オリデンブルク・サークル」がその後、1913年まで少なくとも毎年、12月30日に集会し続けた（中断して革命後も再開がめざされた）ことを紹介している。無論、ここでいうオリデンブルクとは著名な教育学者と東洋学者であった兄弟をさすのであり、その他に社会運動家にしてチャダーエフ研究の D. I. シャホフスコイ (Shakhovskoi)、鉱物学者の V. I. ヴェルナツキー (Vernadskii)、中世史家の I. M. グレヴス (Grevs)、さらに社会運動家でロシア史家であった A. A. コルニーロフ (Kornilov) らがそのメンバーであったのだが、それはまさしく専門を違える者同志の横断的な結合体なのであって、かれらは人民教育の先に民主的自治の実現を熱望することで一致していたのである（後年、彼らの多くはカデット党员となり、臨時政府で要職を占めた）。¹²⁴⁾

あるいは、高橋一彦の研究は法学者に限ってではあるが、その動向を知識社会史・科学社会史的に描き出そうとしていて参考になる。それによれば、司法改革を実現する基盤ともなった実務家たちの諸サークルのなかでとくに「スターツフ＝アルセーニエフ・サークル」は将来の人材を育成するとともに法曹界を有機的に結合する重要な役割を果たしたのである。¹²⁵⁾むしろ、科学団体が当初は同人的な組織、つまりサークルとして出発する傾向があったことは、すでに触れた技術者に関するヴィシネグラツキーのサークルの例を始めとして、高橋が紹介する法の理論的・実践的な研究および法律知識の普及を目的とした「モスクワ法律協会」（1863年設立大会）の場合がよく示すとおりなのである。¹²⁶⁾そしてこのようなサークルのあり方が決して当時のロシア社会においては孤立した例外的な現象ではなかったことは後にもよく見るとおりである（Ⅲ-2-1）を特に参照してほしい。

ここで、この時期、つまり主に1860年代に成立した科学団体についていくつかの代表的な事例を見てみたい。そうすることによって「科学と文化のネットワーク」とでもいえるものが、ロシアでも全国的な広範な展開を見せるようになったことを具体的に確認することにしたい。すでに別の場所でやや詳しく触れたことがあるのだが、1861年に自由経済協会に付属して「農民の間に読み書きと知識を普及するペテルブルク委員会 (Sankt-Peterburgskii komitet s tsel'iu rasprostraneniia gramotnosti i znaniia sredi krest'ian)」が結成され、それは人民の読書にとって参考となるような推薦書リストを度々刊行した。同様な識字促進団体はモス

クワではすでに1845年から帝室農業協会に併設されて活動しており、また1867年にはハリコフにもそうしたものが出来た。モスクワでの場合、その規約は「宗教的な精神に基づいて読み書きを普及する」ことを確かに謳っていたのだが、予断をもってこれら諸機関が古色蒼然たる保守思想の培養器としてのみ機能したとみなすことはおそらく事態の半面だけを観察することに終わるであろう。この際、トルストイやツルゲーネフといった作家らもこれらの活動に協力した事実も考慮に入れよう。そして何よりも、本論後段で詳しく触れるように、一旦、人に伝達された読み書き能力は伝達者側の意図とは無関係に非常に自由に活用されるのが常であったのだから、初期の表向きの目的を離れてリテラシーはそれ以上の幅広い作用と効用を発揮したとみたほうがよいであろう。この時期に社会が抱いた科学的関心や知的世界の雰囲気は、リテラシーという重大な伝達手段を獲得することによって、予想もしえない彼方にまで新しい文化が伝達される前提的環境を整備したと思われるのである。¹²⁷⁾

さて、すでに少し触れた「ロシア地理学協会 (Russkoe geograficheskoe obshchestvo)」を生み出したのはひとりアカデミー会員 A. F. ミッデンドルフ (Middendorf) の旺盛な学術探検心（彼はシベリア探検で有名）だけではありえなかったであろう。¹²⁸⁾西方からのロマンチズムの波及とその受容は「ロシアなるもの (Russianness)」への覚醒を公衆全般にもたらして、ミッデンドルフの周囲には「協会」創設に共感を示す多数の同調者が出現したのである。ようやく整えられた1849年規約（これは1931年まで有効であった）はこの「協会」の目的として、「ロシアにおいて地理学的、地誌学的、さらには統計学的情報全般、とくにロシア自体に関わるものを収集し、整理し、普及すること。および信頼するに足るロシアに関する情報を他国に普及すること」を掲げた。つまり、この科学団体はロシア帝国を解剖してその骨格的特質を簡單明瞭に内外に提示するいわばスポークスマンの役割を担うことになったのである。そのために数理地理学、自然地理学、民族誌学、統計学の4部門制が採用された。「協会」の成立時には沿バルト海地方出身のドイツ系学者の影響力が優勢でコスモポリタニズムが盛んであったが、1850年の役員選挙でロシア人研究者が抬頭したことは「協会」のあり方をいわば内向きにしてナショナルな側面を強調する方向へとその進路を転換させたのである。ツァーリ政府は「協会」員を起用して、1864年に「中央統計委員会」を発足させた（その委員長が本稿冒頭で触れた P. P. セミョーノフ＝チャン＝チャンスキーである）。この委員たちが主体となって、「協会」は1863年から1885年の間に先述した5巻本の『ロシア帝国地理統計事典』を刊行したのである。¹²⁹⁾

「ロシア地理学協会」の支部 (otdel) は1851年に創設された「シベリア」(支部所在地イルクーツク、後に「東シベリア」と改称) と「カフカース」(チフリス) とを皮切りとして、1867年「北西」(ヴィリノ)、1868年「オレンブルグ」(オレンブルク)、1872年「南西」(キーエフ)、1877年「西シベリア」(オムスク)、1894年「プリアムーリエ」(ハバロフスク)、1897年「トルケスタン」(タシケント)、そして1913年「ヤクート」(ヤクーツク) という具合に次々に設置され、帝国全体をそのネットワークの下に納めたのである。¹³⁰⁾ この「協会」の活動成果は驚くほどに顕著であったから、早くも創立25周年の時点で (1871年)、「協会」は自らが教養あるロシアの公衆と全く不可分の存在になったと堂々と宣言するまでに至ったのであった。¹³¹⁾ もはやその民族誌学部門の仕事を見捨ててはロシアにおける人民生活を研究することは出来ないであろうとも公言されたのである。¹³²⁾ こうした発言はその頃の (つまり、本稿が主たる対象とする時期の) ナロードなるものへの社会的な関心の高まりを踏まえて、半ば意図的になされたであろうことに更なる贅言を要さない。「ロシア地理学協会」の志向性がますます国家主義的、愛国主義的になったことをよく示すのが、その『50年史』(1896年刊) である。それは母なる国とそこに住まう人々を研究し、祖国の栄光のために働くのが「協会」の目的であると高らかに謳っている。¹³³⁾ これはこの団体がロシア帝国と共に歩んできたことに対する感慨を半ば自然に表白したものであろう。

「協会」の活動で特徴的であったのは実践的な探検的調査を資料収集の基本に据えたことであり、それが公衆にたいして圧倒的な説得力を生んだのである。何次にも渡って組織的な調査旅行が行われ、それらの足跡が実際に帝国版図の隅々にまで及んだ結果、かれらの得た資料の信憑性は益々高く見積もられることになっただけでなく、結局のところ、探検隊の存在自体がロシア帝国に実質的な内実と一体感をもたらす役割すら果たすようになったと考えられるのである。代表的な探検家の一人であった N. プルジェヴァリスキー (Przheval'skii) は中央アジアへの3年間の遠征のあと、1870年代中ごろから社会的に非常な喝采を博するようになった。つまり、彼は新しいタイプの人間として、科学と知識の普及を通して進歩を求める世代を代表するようになったのである。¹³⁴⁾ 「協会」(1874年現在、会員数1179人) の活動費は個人会費だけでなく、毎年、国庫が提供する1万ループリの支援を重要な財源としていた。「協会」会長は大公であり、会員には各界の「お歴々」が名を連ねており、これほど直截に帝国性ないし国家性を体現した団体はこの国にあっては珍しいのであった。¹³⁵⁾ この「協会」をめぐる諸問題のさらなる解明がロシア帝国史研究にとって一大課題であることについては誰も異議を差し挟まない

であろう。

1866年4月22日付の規約で「ロシアの技術と技術的産業の振興」をその目的に掲げてベテルブルクに成立した「ロシア技術協会 (Russkoe tekhnicheskoe obshchestvo)」¹³⁶⁾ は経済分野で「ロシア的なもの」の十全な実現を志向した団体であった。それは1874年に「帝室 (Imperatorskoe)」の冠称が付加された。目的実現のために、次のような10項目があげられた。1. 技術的事項に関する連続講演会・相談会・公開講演の開催、2. 定期刊行物などによる理論的実践的情報の普及、3. 技術教育の普及促進、4. 祖国の産業に関する技術的問題解決にたいする表彰、5. 工場製品展覧会の開催、6. 工場の原料、製品、特にロシアで採用されている生産方法の点検、7. 技術図書館・化学実験場・技術博物館の建設、8. 技師 (tekhniki) とその補助者の仲介斡旋、9. 地元物産の販売促進、10. 政府へ技術的産業発展を請願。¹³⁷⁾ この技術協会の場合は対象とする分野からして純粋に科学団体とはいき切れない複合的な性格を有しており、実際的には資本主義的生産をロシア的に実現する意欲を秘めて、その面で政府を促そうとしたのである。この事例からも明らかなように、科学団体は定められた枠内においてであれ、一旦発足すれば、自律的な運動を行おうとするのである。それらの活動がどのような社会的作用をもたらしたかは、今はひとまず脇に置くとしても、ここで確認したいのは、この時期に特徴的なこととしてそのためのチャンネルがそれなりに用意されるようになったことであらう。クリミア敗戦は政府側に専門的知識を有する公衆の意見に聞き耳を持たずにはいられないことを教えたのであった。これは「文化と科学」の取り上げられ方のひとつであった。

前述した、モスクワ大学にできた「自然科学・人類学・民族誌学愛好者協会 (Obshchestvo liubitelei estestvoznaniia, antropologii i etnografii)」は長期間、やはり既出の教授 A. P. ボグダーノフ (Bogdanov) が代表者であったが、メンバーの関心は広範囲に及び、全体としては科学の普及、つまりその「国民的な」民主化を志向したのである。すでに言及した1867年の「全露民族誌博覧会 (Vserossiiskaia etnograficheskaia vystavka)」を開催したのは、この団体であった。この企画は帝国の版図内に居住する諸民族の生活全般をいながらにして垣間見ようとするものであったから、それがロシア帝国の広大さや多様性、そして「偉大さ」を誇示する場になったであろうことは容易に想像されるのである。これを契機としてこれも「帝室 (Imperatorskoe)」を名称の冒頭に掲げるようになったこともすでに触れたとおりである。つまり、この時期、ロシアの科学諸団体は帝国的に定置されることによって、はじめてその存在を全国的に認知されるのが標準型になったと考えられるのであ

る。この協会はさらに1872年に諸工芸の、1879年には人類学の博覧会をそれぞれ開催して好評を博し、時代の文化的雰囲気づくりに貢献した。さらに注目すべきは他の大学にもこれと同様な団体がその後次々につくられたことである。¹³⁸⁾ このようにして、「科学と文化」は帝国と運命を共にする環境に置かれたともいえるのである。

「帝室ロシア歴史学協会 (Imperatorskoe Russkoe Istoricheskoe Obshchestvo)」が創立されたのは1866年であった。その代表に就任したのはかの P. A. ヴァーゼムスキー (Viazemskii) であったが、皇室からは名誉議長が加わり、組織的には国民教育省の管轄下に置かれた。¹³⁹⁾ 帝政ロシアにおける歴史学ないし歴史研究のあり方で特徴的であったことのひとつは、例えば、N. M. カラムジーン (Karamzin) といった巨人的な一個人の仕事があたかも全体を代表するような役割を帯びてしまって、こうした組織や団体の活動が低調であったことであろう。学問上の性格からして、共同研究にはなかなか馴染まない側面が多分にあることはこの場合に限らない重大な前提的事情なのだが、それはともかくとしても、ようやくその50周年を記念して発刊された『正史』は、19世紀の後半まで祖国史はロシア公衆にほとんど知られていなかったと随分と思いついたことを述べたのである。¹⁴⁰⁾ しかし、いまや歴史的真実を想起する必要があるとしたうえで、人民の歴史はツァーリと不可分であるとする、帝政期にことある度に何度も繰り返された言説が登場し、ツァーリが今後とも名誉ある地位を占めるためにはその人民の過去の歴史を何よりも知らなければならないというカラムジーンがここでも引用された。この団体には帝政の庇護のもとで公式版帝政史を編纂する任務が与えられた。これが目指したのは保守の側からする国家主義的な歴史の提示であり（しかし、それだけのことならば、既にほかでも試みられてきた）、さらにとくには人民一般へそのような歴史認識の徹底を図ることであったと考えられる。つまり、そうした意味合いで真に「国民の歴史」の創造を果そうとしたのである。「ロシア地理学協会」の事例を参照して作られたその規約にはとくにピョートル一世期以降の祖国史に関わる史料の収集、加工、普及が第一の目的に掲げられた。シリーズものとして『集成 (Sbornik)』の創刊がなされ、なかでも『ロシア伝記事典 (Russkii Biograficheskii Slovar')』(1896年に第1巻、1916年までに22巻を刊行)はロシア科学界の画期的事業であると自画自賛するまでになった。

モスクワ大学に付属して、古くは1811年に結成されて休眠状態に陥っていた「ロシア文学愛好者協会 (Obshchestvo liubitelei rossiiskoi slovesnosti)」は1850年代末にスラヴ派の手によって復活され、ダーリ『ロシア語詳解辞典』を刊行したり、特定の作家を取り上げて顕彰するなどしたが、

1880年代は『ロシア思想』誌の編集者である S. A. ユーリエフ (Iur'ev) と V. A. ゴーリツェフ (Gol'tsev) がその代表者となったので、当局は影響力を危惧してこの団体の動きを警戒するようになった。1880年にモスクワ市都心部にプーシキン像を建立してその「国民作家」化を手助けしたのはこの団体である。¹⁴¹⁾ その除幕式の日の演説で、ツルゲーネフはインテリゲンツィアとナロードがこの偉大な作家を通して交流することを夢想したし、さらにドストエフスキーは実に煽動的な言辞を弄してロシア民族主義的なメシアニズムを吹聴したのである。この時代、文学はこのような形で人民のものになろうとしたのであった。

「科学団体」の中で「職業団体」に限りなく近い存在であったのは、ロシアにおいても医師会であった。医師は科学的技術、医療行為の実践的な価値、そして医療団体の成長をもってその専門性あるいは排他性を自ずから促進したから、遅くとも1880年代までには彼らはある種の特権と地位とをロシア社会に確立したと考えられる。特に N. I. ピローゴフ (Pirogov) の存在はロシアにおける医師会のあり方に大きな影響力を及ぼした。彼は1860年代初頭からオデッサとキーエフで大学改革に熱心であったことでよく知られ、行政当局からの干渉を排して自由を求めるリベラルなスタンスを特徴としたのである。「N. I. ピローゴフ記念ロシア外科協会 (Russkoe khirurgicheskoe obshchestvo v pamiat' N. I. Pirogova)」は1882年に結成された。この略称「ピローゴフ協会」は彼が目指していた専門的かつ人間的な目標を実現しようとして社会的政治的改革に力を使った。週間機関誌『医師 (Vrach)』(編集者は軍医アカデミーの V. A. マナッセイン [Manassein] 教授) によってその考えは広く普及されたのである。医師の数は1854年の8605人から、1870年1万1896人（内、軍医1482人）、1880年1万3846人（女医714人）、1882年1万5348人（ゼムストヴォ医946人）と増加した。¹⁴²⁾

さて、「科学団体」の多くは主要都市にその支部を開設しただけでなく、毎年のように各地を巡回して「全露大会 (vserossiiskie s'ezdy)」を開催するなどしたから（例えば、1867年から自然科学者大会、1869年から考古学大会、1875年から法律家大会など）、それによって情報の全国ネットワークの構築が促されただけでなく、国民国家的な一体性もが醸成されることになったのである。たとえば、ロシア技術協会の場合、資本家の団体である「ロシア商工業助成協会 (Obshchestvo dlia sodeistvie russkoi promyshlennosti i trgovle)」と共催で「全露大会」として、1870年には「工場主と祖国の産業に関心がある者の大会」をペテルブルクで開き、1882年にはモスクワで「商工大会」を開催したのである。それらは表向き、広範に関連情報を収集し、それを商工発展のために普及することを目的としていた。¹⁴³⁾ K. A. チミリャーゼフ (Timiriazev) は1894年にモスクワ

で開催された第9回自然科学者大会を「ロシア科学の記念日 (prazdnik russkoi nayki)」と呼ぶほどであった。¹⁴⁴⁾

もっともそうはいつでも、ツァーリ政府は専門家たちの団体が自立的になることを本能的に恐れていたから、例えば、1875年に法律家大会を認可したが、その後は全国大会開催を認めない措置をとったのである。¹⁴⁵⁾ かような当局の対応は、公的な大会を回避して、私的に会合を開き、さらにサークル間の交流を促すことになった。本論で別にサークルを取り上げて、それを重視する理由のひとつがここにある。経済学者たちが1890年にペテルブルクに作った「経済学者集会 (Sobranie ekonomistov)」はクラブを装う科学的な団体であった。¹⁴⁶⁾ また、技術者の世界では、すでに触れたように、かのヴィシネグラツキーがペテルブルク高等技術専門学校長時代に同僚の教授らとサークルをつくり (その構成員数から『五人会』と呼称した)、公的かつ私的に技術者を組織しようとしたことは有名な事実である。¹⁴⁷⁾

上に垣間見た「科学団体」のすべてがロシア政府から支援を十分に受けていたわけではない。むしろ、全体はそれと絶えざる緊張関係にあったと見たほうがよいであろう。科学研究と科学を実践することは、ナショナリズムだけでなく、あらたに社会的な集団性を生み出すのに力を発揮したのだが、それに対してツァーリズムは腰がひけた対応に終始したのである。

3) 「大改革期」の文化的国際環境

クリミア敗戦がロシアに「大改革」の実施を強く迫ったことは同時に帝国のあり方全般を見直す契機になった。「ヨーロッパ」なるものにどうしようもないほどのコンプレックスを抱き続けてきたロシア帝国はこの戦争によってヨーロッパ列強から手痛い仕打ちを受けたのであった。何故にロシア人はかくもヨーロッパばかりに関心を向けてきたのか、その結果、自身の足元を見ることすら出来なくなったのではないのか、といった自省の弁が各方面から上がったとしても不思議ではない。反動として、汎スラヴ主義はその力量を試されることにもなるであろう。そのために実際に M. P. ポゴージン (Pogodin) の『スラヴ慈善協会 (Slavianskoe blagotvoritel'noe obshchestvo)』が設立され (1858年)、1867年にはモスクワで第一回のスラヴ人大会が開催されたのであった (同『協会』ペテルブルク支部の開設はその翌年である)。¹⁴⁸⁾ たしかに、帝政ロシアの外交は19世紀中ごろまで国境を接するヨーロッパ諸国との関係にばかり腐心してきたといえないことはない状態にあった。また、現実の国際関係において、少なくとも近い将来においてクリミアでの「負け」を補いうる方面はヨーロッパ側には明らかになかった。したがって、ヨーロッパとは逆の方向、つまりアジアやシベリアといった東方に対する関心がにわ

かに高まることになった。

19世紀後半期、ロシア帝国はその版図を最終的に確定した。これが「大改革期」の内外にたいする自己主張の空間的な大枠である。それにともない国際関係的には非ヨーロッパ的な国境を確認することがめざされた。領土の拡張をともしつつ、ロシアなるものの及ぶ範囲が定められ、帝国と民族の諸関係が再定置された。

「大改革期」の代表的な戦争であった露土戦争 (1877-78年) に勝利した結果、ロシアはクリミア戦争 (これも元来はトルコとの戦争であった) で失ったベッサラビア南部を回復するなどしたのであった。ロシアはこれに至るほぼ150年間にトルコと実に9次に渡る戦争を繰り返し、この戦争を最後にして南部ウクライナ、クリミア、カフカースなど黒海沿岸地帯に版図を確立したのであった。北カフカースをめぐるシャミーリらムスリムとの闘争など、広く「周辺部」でこの時期になされた数多の戦いの「代償」として、領土の空間の漠然とした際限のなさ (prostoranstvo) が半ば自動的に安全保障と自己主張 (アイデンティティ) をもたらし、その結果、ロシアは安寧秩序をうるであろうと長閑な思いに浸れる時代はついに過ぎ去ることになった。かわって現実の国際関係的力学が政策の立案から実施の過程すべてに作用を及ぼすようになり、その実行にあたって何らかのヴィジョンを当該各地 (方) にたいして抱くことが求められるようになった。ロシアはその分、「近代的に」目覚めなければならなくなったのである。この事態を取りあげて、「母なる大地 (matushka-zemlia)」を「領土」概念化するとでも表現してよいであろう。ロシアの将来をアジア・シベリア・極東に求めること、より具体的には、例えばアムール川 (沿岸地方) をロシアの「新世界」とすることが帝国としての課題 (改革の実施、民族の再生、政治的領土的拡大の3点セットを同時に実現すること) に含まれることについてツァーリズムには明らかにコンセンサスが存在したと思われる。そして、その際に観察されたオリエンテーションにはアジアを頑なに停滞 (nepodvizhnost') とみなす偏見に裏打ちされた強烈な使命感として対象を文明化しようとする動機が力強く脈打っていたことを見逃すことはできない。¹⁴⁹⁾ 関係の実態は別様であったとしても、これが少なくとも表向きに採用された「民族関係論」の基本的スタンスであった。このことは、西 (ヨーロッパ) に対する劣等感と東 (アジア) に対する優越感とが競い合うようにして同時に存在する形で帝国ロシアがその「近代的な」全体像をようやく披露する (できる) ようになったことを意味したのであり、¹⁵⁰⁾ 国章である「双頭の鷲」が西と東を向くことに現実味を加えたのであった。

本稿は、さしあたり、このようにこの時期の国際環境を確認するのだが、その上でなおかつ西 (ヨーロッパ) に目

を向けなくてはならないのである。すぐ後段で見るように、当時の検閲行政は流入する外国書の内容に関してとくに4点を重視したのだが（注183を参照）、その中に皇室への不敬などと並んでロシア人を非ヨーロッパ的な野蛮人として描くことがあったことほどロシア人たちの自意識の一端を明瞭に示すものはないであろう。この時期、上のようにアジアに対応することで、ロシア人たちは従来になく自らの「ヨーロッパ性」をつよく感じ確かめようとし、さらにそのことを内外にひろく吹聴しようとしたに相違ないのである。これはロシア近代についてまわったひとつの重大な「歪み」であり、保守派から革命派にいたるまでロシア人たちを均しく捉えた性癖なのであった。

しかし、如何に自らの「ヨーロッパ性」を主張したところで、ロシア人がイギリス人やフランス人になれる訳ではなく、彼らは何よりも（東）スラヴ族であった。しかも、丁度この時期にそのことが国際関係上持つ意味合いに文化的なものに限らず政治的ニュアンスもが加わるようになったのである。オーストリア＝ハンガリーやオスマントルコの帝国勢力によって圧迫を受けていた、バルカン半島一帯に居住した少数民族のスラヴ諸族が共同戦線を志向してロシアを自らの保護者とみなしたことが帝国ロシアを励まし、汎スラヴ的な（ロシア）民族の使命感を標榜することが、ツァーリによって宗教的な聖戦を宣言されたこの露土戦争の熱狂期にはじめて右翼国権派はもとより左翼革命派から人民各層までも捉えて大層に流行した。¹⁵¹⁾ この汎スラヴ主義の主張は近代ロシアのナショナリズムの主要な発現様式であったに相違ないが、それが上のような「ヨーロッパ性」の強調と重なり合った点を無視することはできないのである。¹⁵²⁾

一般的な話を続けるのはここまでにして、本稿の主題である「科学と文化」に関わる国際環境の断片に、これら「ヨーロッパ性」と「汎スラヴ性」（ここではこうした言い方をしておく）の問題を気にかけながら、少しだけ触れてみることにしたい。

帝政ロシアで最初に海外（西欧）の通信社から記事の配信を受けた代理店（agency）は1866年創業の The Russian Telegraph Agency of Publisher and Entrepreneur K. V. Trubnikov（英語名）であった。それに次いだのが、『声（Golos）』紙の A. A. クラエーフスキー（Kraevskii）がつくった The International Telegraph Agency（同）である。これらの経路を通して海外から記事が安定してロシアに移入されるようになったことは、いまだ質量ともに不十分ながらも、西欧が発する文化情報に公衆レベルが触れるための本格的な新しい手がかりを得たことを意味した。対外通信網の展開が1870年代後半以降に進展した国内通信網の整備と歩調を合わせたことについては、後節でもさらに触れ

ることになる出版業者スヴォーリンが人格的にそれをよく象徴したであろう。彼は1860年にモスクワへ出たのであるが、そこで親友となったのがかつて「ペトラシェフスキー・サークル」に属した詩人で『モスクワ報知』紙の編集者 A. N. プレシチェーエフ（Pleshcheev）であったことが彼をしてジャーナリズムの道に向かわせるのに力があつたのである。1863年に、スヴォーリンはペテルブルクへ移り、一時期、『ペテルブルク通報』紙で働いたが、1876年2月になってリベラルな法律家にして出版者であった V. I. リハチョーフ（Likhachev）とともに新聞『新時代（Novoe Vremia）』を買収することに成功した。E. アンブラーは、このようなスヴォーリンの行動は「民主主義的理想と自然科学とが手に手を携えて進むような時代相」の一端をよく示すというのである。¹⁵³⁾ 確かにこれが「ヨーロッパ性」の側面だとすれば、彼には別に「汎スラヴ性」の側面があつた。よく知られるように、スヴォーリンはバルカン問題をめぐる露土戦争期により現実的な路線を選択して、『新時代』（1876年4月7日付）で「ロシアのヘゲモニーをとまなうスラヴ諸民族の対等な同盟こそが我々の歴史的課題である」と宣言した。彼自ら義勇のためにセルビアへ乗り込むほどであつたし、その新聞論調はスラヴ解放を名目とした対トルコ戦争を帝政ロシア最大級の課題とみなす国家主義的で愛国主義的な立場をますます宣伝するようになった。『新時代』は1876年2月29日の第1号を3000部で始めたのが、数ヶ月にして1万3000部から1万5000部の発行部数を誇るまでに急成長したのは彼の主張に共感する人たちが多数いたからである。¹⁵⁴⁾ このように、「大改革期」にあっては、謂わば、「ヨーロッパ性」の隙間を衝いて「汎スラヴ性」が顔を覗かせる機会を絶えず狙っていたのであつた。場合によっては、後者が前者によって、一見して「スマート」に化粧されるような時代でもあつた。スヴォーリンはこれら二つのモメントをバランスをとって活用することに長けた人なのであつた。

さて、この「大改革」期にはロシア帝国内部で生活に迫られた人の移動（「空間移動（prostranstvennye dvizheniia）」）が盛んであつたことはよく知れている。¹⁵⁵⁾ しかしながら、その動きは国内に限られるのを基本とした（それも国内旅券による統制をうけた）。このことに関連して、ここで観光旅行（turizm）に触れる必要があるかもしれない。確かに、農奴解放にともなう得た金を費消するために貴族たちがヨーロッパへ旅行することが流行し、1870、80年代には主として企業家からなる「新しいロシア人（novye russkie）」が観光することが目立つようになった。1869年には、ペテルブルクで旅行ガイドブック『ロシアおよび外国案内（Putevoditel' po Rossii i za granitse）』が出版され、1871年にはロシア最初の旅行会社「株式会社イマトラ（Aktzionernoe

obshchestvo Imatry)」が創業を認可された。しかしながら、サービスの対象となったのはごく一部の資産者に限られたのであり（だが、ここで確認されてよいのは、「恵まれた」ロシア人の国外観光旅行の行き先は何処よりもヨーロッパであったことである）、一般人民にとり観光旅行はあいかわらず現実的な意味を持たなかったとみなくなくてはなるまい。因みに、「ロシア・ツーリスト協会（Russkoe obshchestvo turistov）」が自転車愛好者組織から発展して成立したのは、ようやく新しい世紀が始まる1901年のことであった。¹⁵⁶⁾

19世紀ロシアは大西洋を越える移民史において大きな地位を占めることはなかった。1860～80年代には50万人ほどがロシアから主に隣国へ出たのだが、その多くはポーランド人、ユダヤ人、そしてドイツ人たちであり、ロシア人は少数であった。¹⁵⁷⁾ それでもようやく1870年代になって、ロシアから新大陸アメリカへの移民が目立つようになった（ロシア人による本格的な移民開始は1872年である）。アメリカにイヴァン・ツルゲーネフの作品が紹介されて好評を得たのも、化学者メンデレーエフが石油産業調査団長として訪米した（1876年）のもこの1870年代であった。¹⁵⁸⁾ 新大陸移民は19世紀最後の20年に特に増加したが、北カフカース西部出身の住民が大きな比重を占めてここでもロシア人はなかなか多数派にはならなかった。革命前のロシア帝国から新大陸への移民総数は450万人と見積もられ、そのうち約50万人が「ロシア人」とされるが、その実態はウクライナ人、白ロシア人、そしてユダヤ人という場合が多かったのである。¹⁵⁹⁾

こういうわけであるから、ロシア人の場合はドイツ人やスコットランド人がするように外国によく適応することはせず（できず）、むしろそうした環境に置かれることは彼らにとりストレス以外の何物でもないといった論評が数多くなされてきたのである。¹⁶⁰⁾ 碩学 M. ラエフ(Raef)もこの立場を分け合って、諸般の事情から国外へ出たロシア人の多くは帰国もせず、また外国の社会にも適合しようとしなかった。彼らは特有な「移民文化 (emigration culture)」を発展させることはなく、むしろそこでロシア文化の伝統と価値を維持し、故国の精神的進歩のために献身したいとする使命感を持ち続けた、というのである。¹⁶¹⁾ この主張は、彼らは祖国を離れたことにたいする絶望と罪悪感を克服しようとして、ヨーロッパの新天地をツァーリズムとの闘争を継続するための新たなステージに変えようとしたと言ひ換えることもできるであろう。¹⁶²⁾ この限りで言えば、「ヨーロッパ性」ということはヨーロッパの外部にあって（のみ）有意味なのである。その結果、ベルリン、パリ、プラハ、ハルビン、ベオグラード、リガ、ソフィアなど比較的ロシア人が多くいた都市にはそうした使命感を実現するための拠点（コロニー）がつくられたのである。ここ

では、「ヨーロッパ」はロシア史の運命を改善するために奉仕する位置を与えられたのである。

無論、「国外のロシア人 (Russian abroad)」は何も政治的亡命者だけではなかった。この時代、国外にあった、大学生、研究者、旅行者、ビジネスマン、宗教的異端派などのなかで何よりも多数派であったのは貴族と外交官たちであり、その大半は反革命専制護持派であったから、¹⁶³⁾ 少数派の専制批判派は居ながらにして闘争の過程に置かれたのであった。そうした彼ら少数派が「科学と文化」の時代にふさわしく何よりも書籍の維持と管理に工夫を凝らすのに精力を消費したことは特徴的であった。例えば、イヴァン・ツルゲーネフの後見で1875年にパリにつくられた「ツルゲーネフ図書館」は在仏ロシア人を支援したのである。¹⁶⁴⁾あるいは1870年代初め、チューリヒのロシア人コロニーには300人がいてラヴローフとバクーニンをそれぞれ擁立する派が競合していた。ラヴローフ派が圧倒的に多数で、「チューリヒ・ロシア図書館」をもつ一方でバクーニン派もほとんどがロシアの禁書から成立つ図書館を維持していたなどと回想されるのである。¹⁶⁵⁾

本稿でこれまで触れてきたように、この時期にロシア国内において様々な団体が形成され全国的展開をみせるようになったことは交際と交換の場を各所に作り出したはずであった。つまり、私的なレベルにおいても思想の交流を行いうる機会が増加したと一般的には考えられるのである。ここで問題としたいのは、そうしたことの国際的な文化的環境についてなのである。

やはり、既に触れたように、ツァーリ政府はこの「大改革期」に大学に対して規制を緩和し、留学についてもかなりの権限を大学当局に委譲した。1862～65年の間だけでもロシアからは100人を超す学生が留学したのである。最多の留学生を集めたのはドイツである。1880年代初めに自然科学を教えるロシア人教授のほぼ半数は1850年代末から1860年代初めに海外留学したもののたちであったともいわれる。¹⁶⁶⁾ やはりこうした人たちは上に触れたような「移民文化」の担い手とは異なる範疇に入るのであろう。彼らに特徴的なのは、そのかなりの部分が高い志を有し（よく観察されたのは祖国ロシアの変革＝専制の打倒を志向したことである）、そのために私的レベルにおいて思想の変換と交流を行う機会を待ち望んでいたと思われることである。したがって、ヨーロッパにあって、彼らの眼はたえずロシアに向いていたのである。¹⁶⁷⁾

1872年秋、チューリヒでネチャーエフが逮捕されて身柄がロシア当局へ引き渡された。その直後にラヴローフはチューリヒへ入った。改めて、そこはにわかに注目を集める拠点となった。1873年秋、ロシア政府はチューリヒのロシア人青年たちの動向に危惧を抱いた結果、彼らを帰国さ

せる措置をとった。¹⁶⁸⁾ 何よりも祖国ロシアの変革を第一義的に考えていた該当者の大半がそれに従い戻ることにした。これら「チューリヒ帰り」の主流はラヴローフ派であったが、ロシアにおいても彼らはすぐにバクーニン派と対決する運命にあった。帰国した彼らは当局によって、「チューリヒの学生たち (tsiurikhskie studenty)」と命名されてその動向は厳しくマークされることになった。¹⁶⁹⁾ 実際のところ彼らは、本稿後段で見るように、ペテルブルクの諸サークルに影響を与えることになるのである。

ツァーリ政府の心配は根拠のあることであった。この時代、西欧と革命ロシアは様々に繋がれていた。たとえば、後に詳しく触れることになる『ロシア北部労働者同盟』の大立者 V. オブノルスキーは少なくとも3度に渡り、西欧へ出たのであるが、その都度、在外ロシア人の支援を受けた。彼は当地の「古老 (starozhil)」に気に入られて、密輸など様々な便宜をはかってもらったのである。¹⁷⁰⁾

後年、メンシェヴィキの代表的活動家となるアクセリロートは25歳の1874年9月、非合法にドイツへ出た。彼はベルリンで労働者集会の大規模さ、労働者階級の目を見張るような成熟と規律と洗練の度合いに驚嘆して、ラサールが繰り返す労働者階級の歴史的役割に関する言葉に思いを馳せ、社会主義に対する自己の信念を確かなものとしたのであった。つまり、彼は彼なりに「ヨーロッパ性」を実体験したのである。その年の暮れに「宣伝家の華」といわれた、チャイコフスキー団員であった D. A. クレメンツがロシアからベルリンに来て、二人は早速、親交を結んだ。¹⁷¹⁾ 翌1875年の1月にアクセリロートはロシアの革命派のことをさらに知るためにスイスへ赴き、そこで V. フィグネル、N. A. サプリン、S. M. クラフチンスキー、P. N. トカチョーフなどと知り合った。ジュネーヴのロシア人コミュニティ (the Russian Community) は彼に親切に対応した。そこで彼はロシアの革命過程に具体的に参画することになった。ひとつは折からのヘルツェゴヴィナのスラヴ人グループによる反トルコ蜂起を支援するためにロシア国内のバクーニン派 (彼は同派として革命人生を出発した) をそこへ義勇兵として差し向けることであり (当時の代表的な革命派が汎スラヴ主義的であったという興味深い事実関係の所在に読者の注意を喚起しておく)、もうひとつは例の「チギリン事件」に関わって、ウクライナで印刷した金文字で書かれたツァーリの偽書500部を配布することであった。¹⁷²⁾ この時、アクセリロートのなかでは「汎スラヴ性」と「ヨーロッパ性」は何の矛盾もなしに同居していたのである。

3. 「科学と文化」の象徴としての出版

1) 検閲政策と出版

ロシアにおける世俗的文書にたいする検閲は18世紀以来

の長い歴史をもつが、それが俄然、厳しさを増すには西欧において1848年革命が勃発する必要があった。西欧諸国の多くがそうであったように、その直接的間接的な波及を大層に危惧したツァーリ政府は通称「ブトゥルリン (Buturlin) 委員会」を発足させて、いわゆる「検閲テロルの時代」(通例、1848-55年をさす) を到来させたのである。しかし、その禁圧的な政策はやはりクリミア敗戦によって見直しを強くせまられることになった。敗戦時に P. A. ヴァルーエフ (当時はクールリヤンド県知事、後に内相) は「現時点で何はさておき必要なのは検閲の転換である」と日記に書いたのである。ツァーリ・アレクサンドルは同上委員会を廃止し、代わって出版委員会を設置して、出版物の動向を非公式的に監視させる緩和策を採用した。それは「出版物とツァーリの仲介者」の役割を果し、「グラスナスチ (glasnost') とザコンナスチ (zakonnost')」(「公開性と合法性」と仮に訳しておく) をその活動指針としたのである。そして、A. ニキテーンコ (Nikitenko)、A. ゴロヴニン (Golovnin) など改革派が検閲法改正の主導権を握った。1858年5月に、文芸批評家で科学アカデミー会員にして自身がロシア語出版物の検閲官でもあったニキテーンコはペテルブルクの外国書検閲委員会委員長に就任したばかりの詩人 F. チュッチェフ (Tiutchev) (彼は死去する1873年までその任にあたった。作家や文化人が検閲官を勤めることは特に初期にはよく観察されたことである) に対して、フランス流の事後検閲制度の導入を働きかけた。¹⁷³⁾ また、1861年12月から国民教育相に就任したゴロヴニンは現実の検閲作業が信じがたいほど多くの量を処理しなくてはならないことを見聞して、驚愕した。1863年の段階で、39人の検閲官が国内9都市で23人の書記官の助けを借りて定期刊行物6669点、書籍1884点をこなし、別途に15人の検閲官と6人の書記官で国外から入ってくる数千点を担当していたのである。¹⁷⁴⁾ すぐ後で見るように、折からの「大改革」にたいする期待は出版活動全般をきわめて活性化させつつあったから、このままでは検閲行政が物理的に行き詰まることは目に見えていた。こうした具体的実情的な事情が検閲法の見直しを最終的に不可避にしたのであった。

ゴロヴニンもそれまでの事前検閲、つまり著者および出版者が刊行以前に検閲官に対してすべての関連資料を差し出しその検討に委ねる方式から、事後検閲 (つまり、懲罰的 [karatel'naia] 検閲) へと切り換えることをやはり望んだ。それは著者および出版者の側に当該出版物が適法であるか否かの判断をひとまず預けることを意味した。その判断次第では政府当局が摘発を行い、その結果として法廷闘争がおこなわれることにもなるから、その分、ロシアは法的手続きにしたがった生活をするようになるはずでもあった。ヴァルーエフは内務省 (内相) が検閲行政を統括統制

することを迫及し、1863年にはそれを国民教育省から移管することに成功した。¹⁷⁵⁾ その際、国民教育相になったゴロヴニーンが革命運動の高揚期に出版言論関係に責任をもつことを嫌ったことが有利に働いたのである。¹⁷⁶⁾

これら一連の過程の終結点がその後五年革命時まで有効であった1865年4月6日臨時規則の制定であった。¹⁷⁷⁾ それは両首都における定期刊行物、10印刷全紙（1印刷全紙は16ページに相当する）以上の著作物と20印刷全紙以上の翻訳物とをそれまでの事前検閲の対象から外して事実上事後検閲とし、さらに印刷業を県レベルの統制下におくことを主内容としたものであった。これによって、政府、科学アカデミー、大学、学術団体などの刊行物も事前検閲の対象外とされた。しかし、人民がその多くの読者であった薄っぺらな（10印刷全紙以下の）小冊子の類は相変わらず事前検閲の対象とされた。この臨時規則はロシア史上において「最も方法論的に整備され、広範に議論されて包括的であった中央集権的な出版法」と評され、また「わが国の出版業に本質的な変更をもたらした」¹⁷⁸⁾ともいわれたのである。この法案はルイ18世ないしナポレオン3世期のフランス法を実質的に複製したものであったが、その運用精神はオーストリアおよびプロシアから強い影響を受けたのである。¹⁷⁹⁾

この検閲立法は帝政ロシアにとりそれまでなかった「出版の自由」と懲罰との硬軟併せ持つ複雑な出版状況を生み出したといえる。この規則にしたがって出版権が制限される場合、対応する刑法の1866年但し書きは「不法な言葉」を1035条、1039条、1040条、1535条で扱い、それぞれ公的信頼を覆すもの、名誉を棄損するもの（個人だけではなく、組織や制度も対象になる）、口汚いもの、誹謗中傷するものを上げた。¹⁸⁰⁾ むろん、このような「不法な言葉」に関する規定は当局の自由裁量を大幅に許容するものであった（実際に、当局が警告するさいの理由のほとんどが「有害な傾向[vrednoe napravlenie]」であった）。¹⁸¹⁾ 例えば、「報道に関わる犯罪」に関して法的な整備が不十分であったために、当局の恣意的な介入を許すことになったとする解釈¹⁸²⁾が成立する余地はたしかにあったのである。

しかもその後、この1865年4月6日臨時規則は細部に渡って規制を強化する「改正」を繰り返しただけでなく、それと対抗関係にたつ一連の統制も加えられた。そもそも内相は1865年8月に秘密命令を出して、科学論文を装って無神論、社会主義、唯物論を宣伝することを厳しく取り締まるよう指示した。¹⁸³⁾ 1867年6月13日規約は県知事の認可対象を拡大し、ヴァルレーエフの後任内相チマショーフは彼が危険であると判断すれば、定期刊行物の街頭売りを禁止する権利を得たりしたのである。ピーサレフの著作刊行をめぐって行われた係争ではその内容ではなく作家が使用する表現自体が問題とされ、ルイ・ブランの『イギリスか

らの書簡』の露訳本をめぐっては著者の意図が檜玉に挙げられるなど、およそ裁判にはそぐわない側面が作為的意図的に対象とされた。たとえば、ペテルブルク警視總監であった P. A. シュヴァーロフ (Shuvalov) はツァーリにすでに検閲を通過していたフレロフスキーの『社会科学入門』を禁本扱いするように求め、第三部はこうした書籍の統制にたいしては無力であると断定したのである。M. N. ローンギノフ (Longinov) が出版総局長 (nachalnik Glavnogo upravleniia po delam pechati) に新たに就いて厳しい取り締まりを始めた。内務省の検閲当局は1872年には82人であったが、翌年には93人に増員された。当然に検閲官には「教養」が求められたから、当初は作家たちの中からそれに従事する者もでたのであるが、やがてそうした「部外者」が採用されることは例外的になり、むしろカトコフのようなジャーナリズムに隠然たる影響力を有した者の意向が罷り通るようになった。出版総局長のポストに E. M. フェオクティーストフ (Feoktistov) を推挙し、就任させた〔在任1883-96年〕のは彼であったといわれる。¹⁸⁴⁾ 1865年4月6日臨時規則の見直し作業が S. N. ウルースフ (Urusov) 委員会の手で制度的になされるようになり、そこでは出版関係の裁判を公表公開することを制限することなどが検討された。1872年6月7日令は検閲当局に未検閲の書籍と定期刊行物を没収する権利を与えた。廉価版で出版されたフレロフスキー『ロシアにおける労働者の状態』、スペンサー『社会学』、ルイ・ブラン『1848年2月革命史』やラヂーシチェフ著作集などがその犠牲になった。その翌年には国家評議会はチマショーフ内相にたいし、「非常で稀な状況においては」、敏感なトピックス（例えば、ユダヤ人問題、検閲、飢饉）を出版物において言及することを禁じる権限を認めた。この権限にしたがって五年革命以前になされた発禁処分は約570件にのぼるという数字がある。¹⁸⁵⁾ さらに、1874年4月19日法によって、事前検閲を免れた出版物は、検閲委員会にそれを提出する前に、完全に印刷しなくてはならなくなった。このことは原稿ではなく実際の印刷状態を詳細に点検することを意味したから、実質的には事前検閲の廃止を取り消すのと同様の効果を伴った。この法によって、内相は大臣委員会にそれが掛かる前に気に入らない本を発禁にすることが出来るようになった。¹⁸⁶⁾ このようにして、ツァーリ政府の出版行政は自由化と規制のバランスのなかで事態への対応を重ねながら後者の方向へと傾斜していき、結局のところ、10年間ほどの間に検閲改革はほとんど実質的な変更をとまなわなかったことになったと考えられるのである。

近代ロシアにおけるいわゆる発禁数はこれまで正確に把握されてはいない。しかし、幾つかの数字を見る人は想像されるよりもむしろ少ない印象を抱くであろう。例えば、発

禁本248点を列挙したある編者はその序言で1865年～1905年には129点の書籍と4点の雑誌がそれに相当したとする場合や188点という数値があることを紹介している。¹⁸⁷⁾ R. パイプスは1867年～94年にかけて158点だけが発禁になったとして、全体としては検閲は厳格には実施されなかったと結論している。¹⁸⁸⁾ 1865年から1904年までの間の定期刊行物にたいする行政的取り立て総数は715回という推定値もある。¹⁸⁹⁾ さらに、外国書については注の174 (116頁)を見てほしいが、そこで触れた7万タイトルのうち、禁書扱いとなったのは6000ほどで全体の一角に満たないともされるのである。¹⁹⁰⁾ しかし、問題はこうした数量的な件数にあるのではない。そうした制度が存在したこと自体がもたらす社会的な波及効果や雰囲気こそが本質的なのである。

2) 出版事情全般

上に見た行政的措置が現実の出版活動の活性化を阻害するのにかほどの作用を及ぼしたかはにはわかには測りがたい事柄であるが、改革期ロシアの出版は全体としては発展する道を選んだと考えられる。ロシアの印刷業では1860年代初めまでふつつ「平板」円筒式印刷機 (“ploskie” skoropechatnye mashiny) が利用されていた。その後普及したのは安価なうえに生産性も高かった (1時間に1000印刷全紙、つまり1万6000頁の印刷能力)、「アメリカ婦人 (amerikanki)」と愛称された圧板付きの印刷機であった。モスクワでとくに盛んであったリトグラフにも印刷機が導入されたが、やがてそれ自体が減少していき、活版印刷に取って代わられた。1870年代に入るところにはすべての印刷工場は蒸気力を使うようになった。すぐ後で触れるようにスヴォーリンの場合、1878年に自己の印刷所にロシア最初の大型輪転印刷機を導入したのだが、それは時間当たり1万8000印刷全紙分の能力を有し、新聞1頁に6から7欄の印刷を可能にしたものであった。¹⁹¹⁾ しかしながら、これら印刷機の大半は外国製であって、19世紀ロシアではドイツの Koenig & Bauer 社製のものがよく流通したのである。¹⁹²⁾ 国内最大手の印刷機メーカーはようやく1864年に創業したばかりの「I. A. ゴーリドベルク (Gol'dberg) ペテルブルク機械製造工場」であった。¹⁹³⁾ 印刷業自体がロシアにも本格的に成立したことは1867年に最初の業界誌が出たことによっても明らかとなった。¹⁹⁴⁾

ロシア国内の出版社と印刷所は19世紀後半に増加した。1883年から1904年の間に前者は1277が2964、後者は1038が1979と2～3倍になったのである。その結果、1860年に2000点ほどであった単行本発行は1880年には5倍の1万点を数えるようになった。¹⁹⁵⁾ 1点あたりの発行数もふえた。自然科学的内容の書籍の場合、1869年に1200部平均であったのが、1876年には2500部へと倍増したのである。定期刊行

物も同様な傾向を示した。『新時代 (Novoe vremia)』に関して別の数字を示せば、1868年に2828部であったのが、1877年には1万1387部、4倍になった。¹⁹⁶⁾ すでに見たように「厚い雑誌」のいくつかはこの時期に創刊されたが、印刷技術の発展に伴って「精緻な」イラストを売り物とする雑誌も生まれた。その代表格が『ニーヴァ (Niva)』(1870年創刊。畑の意)であり、その付録 (文学作品集など) が人気を呼んで、1918年まで大部数で刊行され続けたのである。

単行本の刊行に占める両首都の比率は1861年には85%であったのが、地方での出版が盛んになるにつれて徐々に低下するようになり、1870年には72%、1881年には62%にまで下落した。¹⁹⁷⁾ しかし、全体を見渡せば、帝政ロシアの出版業の中心地であり続けたのは、ペテルブルク市であった。先に引用したシェルグーノフは「ペテルブルクの出版は先進的で主要な戦闘連隊であった」と回想している。¹⁹⁸⁾ そこには、1876年の段階で、全国の印刷所の約2割 (実数にして196。モスクワは174) が所在した。¹⁹⁹⁾ なかでも代表的な存在は「M. O. ヴォリフ (Vol'f) 会社」で、それは巨大な書籍商が出版事業に手を広げた典型例であり、P. P. セミョーノフ=チャン=シャンスキー (Semenov-Tian-Shanskii) や S. A. ヴェンレロフ (Venrerov) といった著名な民族誌学者の参加をえて、すでに言及した『絶景のロシア—その使命における我が祖国 (Zhivopisnaia Rossiia. Otechestvo nashe v ego znachenii)』や『携帯家政文庫 (Karmannaia khoziaistvennaia biblioteka)』、『著名作家文庫 (Biblioteka znamenitykh pisatelei)』などシリーズものを数多く手掛け、さらに数種の定期刊行物を出したのである。創業者ヴォリフは、出版業を産業ベースに乗せることに成功して、「ロシア最初の本の百万長者」などと呼ばれるほどにその事業は発展したのであった。²⁰⁰⁾ ヴォリフ社は人々の間にロシアなるものに関して共通認識が生まれるのを促進したと考えられるから、V. アンダーソンの言い方をすれば、ロシアで「印刷資本主義」の本格的な役割を果そうとしたといつてよいであろう。この会社はすべての書物を自己の印刷所で製作したのである。²⁰¹⁾

1860年代末に A. S. スヴォーリン (Suvorin) がそのヴォリフにたいして、私に資金があれば書籍市場に本を溢れさせてやる、農奴解放後、ロシアの本には広大な原野が開かれていると語ったのは有名な話である。若干の繰り返しを顧みずにいえば、スヴォーリン自身は1863年にペテルブルクへ出てきて、『ペテルブルク報知』紙で働いたのち、1872年『ロシア暦 (Russkii Kalendar')』を出して出版事業へ参入した人である。その成功に気を良くして、1876年2月には新聞『新時代 (Novoe vremia)』の発行に加わったのだが、折からの露土戦争報道でこの新聞が飛躍的な伸張をみせたことは既述のとおりである。『安価文庫 (Deshevaia

biblioteka)』シリーズが彼によって出されるのは1880年代に入ってからのものであるが、この人は活字文化をロシアに広めた重要人物の一人となった。²⁰²⁾

近代ロシアの代表的な出版者をもう一人、モスクワから選ぶとすれば、多くの人は躊躇なく I. スイチン(Sytin)を挙げるであろう。彼はモスクワの民衆向けのルポークを扱う商店に徒弟として入ったのだが、その経営者は寛容にもスイチンが独立して印刷所をもつときに支援したのである。彼は当初は娯楽物語の出版に精を出したが、やはり露土戦争時に作成した戦況を伝える作戦行動地図が大評判となって業績を伸ばした。1884年から『仲介者(Posrednik)』²⁰³⁾の印刷を引き受けたことからトルストイをはじめとする作家やインテリたちとの関係が大きく開かれるようになり、出版内容も豊富になった。さらに、チェーホフの強い希望もあって、スイチンは新聞事業にも手を出すようになり、世紀末になって『ロシアの言語(Russkoe slovo)』を創刊した。²⁰⁴⁾

このようであったから、両首都には「恒常的に書籍販売をおこなう施設」が増加した。ペテルブルクを見ると、それは1865年に75であったのが、1870年に81、1876年に95、1880年には125といった具合であった。モスクワでは、1868年に105、1883年に225という数字である。²⁰⁵⁾ また、注目に値することに、書籍販売を促進するために、1865年からモスクワで、毎月、書誌情報誌『愛書家(Knizhnik)』が出されるようになった。²⁰⁶⁾ つまり、ロシアの首都で書店経営が本格的に成立するようになったのである。

ここで注目すべきは、この時期のペテルブルクの書籍商や小規模経営の出版社(者)のなかに急進的で革命的な志向性を有する部分が少なからず存在したことである。²⁰⁷⁾ 1858年に書店を開いた D. E. コジャンチコフ(Kozhanchkov)は革命家サークルと親交があったし、書籍商兼出版業の N. A. セルノ=ソロヴィエヴィチ(Serno-Solov'evich)も同様に革命シンパであって、彼のところは「学生参謀本部(Shtab-kvartira studenchestva)」といった風評が立つほどにそうした人物たちの溜まり場となっていた。チェルヌイシェフスキーの翻訳編集でロシア語版『世界史』全18巻を出した(1861-69年)のは彼のところである。クリミア戦争でセヴァストポリ防衛戦に参加した士官 N. L. チブレン(Tiblen)は退役後にヴァシリエフスキー島に印刷所を所有して革命派の檄文を印刷した。彼は「土地と自由」派や上のセルノ=ソロヴィエヴィチと近しかったのである。進歩陣営に人気があった D. I. マイアー(Meier)教授の『ロシア民法』(1864年)を出したのは彼である。N. P. ポリャーコフ(Poliakov)はおおよそ10年近く出版活動をしたが(1865-73年)、とくにチャイコフスキー団と関係をもった。彼らはラサール著作集、ベルビ=フレロフスキー『ロ

シアにおける労働者の状態』、マルクス『資本論』第一巻などを出したことはよく知られている。²⁰⁸⁾ 一方、モスクワ市の場合、出版活動は規模と革命派との関係においてペテルブルクに劣ったが、ルポークと絵画の分野ではそれを圧倒する勢いを見せた。繰り返すが、スイチンはこのルポーク出版で成功を収めて、やがてロシア最大級の出版社となる道を開いたのであった。また、スネギリョーフ印刷所によって、ナロード出身の「独学の作家たち(pisateli-samouchki)」の作品集、『夜明け(Rassvet)』(1872年)や『故郷の響き(Rodnye zvuki)』(1889年)が出されたことはモスクワにふさわしいこととして受け取られたであろう。²⁰⁹⁾

すでにみたように、この時期には地方においても新聞の発行が独自に開始されており、²¹⁰⁾ そこでは書籍も現実的な存在となっていたのである。元々、地方では教会関係と、やや遅れてゼムストヴォの二者が主要な出版元であったのだが、この時期には他の世俗的かつ私的な主体が目立ってそれに参入するようになったのである。地方での出版数について、1865年に518点、1870年に1101点、1875年に1810点、そして1880年に2116点という進捗状況を示すデータもある。²¹¹⁾ 地方にあって書籍を取り扱う会社は1862年にはわずかに43社であったが、1868年に224社、1874年に611社と非常な伸びを見せた。²¹²⁾ 1870年代末になると政府は野放図になされてきた行商による本の地方販売を厳しく統制するために、村々を回る行商人にたいしてその思想が穏健であることの証明と県知事による本商いの許可を求めるようになった。²¹³⁾ さらに地方各地には数は少ないが書籍を扱う店、倉庫などが開設された。ゼムストヴォは独自に書籍倉庫(knizhnye sklady)を各地につくって本を販売し(1905年までに19県都、110郡都にそれが置かれた。県都の最初の例が1877年のトヴェーリであり、郡都は1872年のウルジュムスコエ[サマール県]である)、首都の書店は地方都市に支店を開設する、あるいは県都に代理店を置く、さらにはカタログ販売に励むなど営業に工夫を凝らしたのである(代表的なのはすでに触れた M. O. ヴォリフ[Vol'f]のほか、K. L. リッケル[Rikker], N. G. マルトウイノフ[Martynov]、D. I. チホミーロフ[Tikhomirov]などである)。印刷総局の資料によれば、本屋と書籍倉庫は欧露50県に1883年1377、1885年1543、1887年1271であり、1890年の時点で県別に50以上あったのはペテルブルク(283)、モスクワ(177)であったから、両首都中心であったことには変わりがないのだが、²¹⁴⁾ ここでは書籍の地方への普及・拡散といったことに対して政府が真剣に対応しなくてはならないと認識する段階にまで至ったことを確認しておきたい。²¹⁵⁾

このような出版の活動はすべて個人的イニシアチヴに委ねられていた訳ではない。これもすでに見たように社会的に団体(obshchestvo)が広範に発生するなかで、とくに

出版や啓蒙に従事するそれらが抬頭したこともこの時代風潮をよく反映したのである。²¹⁶⁾ たとえば、1860年にペテルブルクに結成された『「公益」協会 (Tovarishchestvo “Obshchestvennaia pol’za”)』は様々な分野の知識を一般向けの本にして刊行することを目的としていたし、その翌年に発足した『ペテルブルク識字委員会 (Peterburgskii Komitet gramotnosti)』は読み書きを習おうとしている人びとを対象として出来るだけ大量かつ安価に出版することをその綱領(I. S. ツルゲーネフ[Trugenev] が作成)に掲げたのである。²¹⁷⁾ 他方、1861年に創設されたモスクワの『良書普及協会 (Obshchestvo rasprostraneniia poleznykh knig)』は「読書する公衆のあいだに健全な道徳的理解力を強化、発展させる」ことを綱領で謳っており、さらにその主要メンバーは真のロシアの教育は正教会なしには成り立たないことを公言して憚らない人たちなのであった。²¹⁸⁾

ここでやはり問題とすべきは、以上のような「資本主義的」あるいは「啓蒙主義的」な出版活動の活性化が旧来から人民の中にしっかりと根をおろしていたルポークとの競争をともなったことであろう。つまり、人民向けのルポークは打倒すべき対象とされたのであった。すぐ上に触れた諸団体の設立主旨はルポークにかえて「改良された (uluchshennaia)」書籍を人民に差し向けるところにあったのである。「良書」とはさしあたりそうした意味合いである。ということはこの時点においてもルポークは盛んなのであった。本稿後段で全面的に取り上げることになるナロードニキ宣伝家たちは宣伝媒体として本を一見してルポークのように装丁しようとしたのであり、それは検閲及び警察当局の目をくらすためだけでなく、何よりもそれに慣れ親しんできた農民たちに不慣れな違和感を与えないための配慮からなのであった。²¹⁹⁾ それほどにルポークは農民の身近にあったということであろう。1860年代末には、ルポーク印刷にクロム石版機が導入されて、印刷上の質の向上が図られるようになった。²²⁰⁾ ルポークは行商の手によって、村々に届けられていた。そうした出稼ぎが盛んであったヴラジーミル県だけでも1890年代においても6000人の行商人を数えることが出来たし、ひとりモスクワのスイチンだけをとってみても、彼のもとには2000人の行商人がいて、年間100万部以上、30万ルーブリを超えるルポークを売り上げていたのである。²²¹⁾

3) 革命派出版事情

さて、「大改革期」の社会運動で注目すべき現象のひとつに革命派によって活字文書が重要視されたことがある。彼らは革命的な世界観をひろめようとして、「思想的な」書籍普及運動 (“ideinoe” knizhnoe delo) に取り組もうとしたのである。そのための補助手段として文献目録の作成

が奨励されたことは、彼ら革命家自身が活字メディアをいかに大切なものとして本格的に取り扱おうとしていたかをよく示している。²²²⁾ それらは『カタログ (katolog)』、『読書計画 (programma chteniia)』、『自己鍛錬計画 (programma samorazvitiia)』などと表向きは穏健的中性的な用語でもって呼ばれたのである。書籍の存在を絶対視することなく、ここでは、例えば、「書物はひとりのロシア人を命がけの革命家に変えることなどできない。それが役立つのは、予め貯えられた資料から最終的結論を下すことにたいしてだけで、これら資料は全生活によって準備される」としたムイシキン²²³⁾の立場を基本的には尊重したのであるが、こうした弁明が一革命家にとって決定的とも思われる状況下でなされること自体に、やはりこの「科学と文化」の時代相の一端を見出したいと考えるのである。

この国にあって書籍は形式上も実質上も20世紀の末に至るまで、合法と非合法に二分されてきたが、革命派や反体制派が合法的文書 (当局はそれらを「傾向的 (tendentsioznyi)」と呼んだ) をもよく活用しようとしたことを見逃してはならない。チャイコフスキー団が安価にそれらの書籍を得たり出版して、首都と地方の学生文庫へ供給し、さらに自習用の文庫を新規に作ることを主要な課題の一つとしたのはよく知られることである。²²⁴⁾ この時期にあってはこの分野で最も普及したのはN. I. ナウモフ (Naumov) の作品 (『泣くこと地頭には勝てぬ (Sila solomu lomit)』など) であったといわれる。彼はとくにシベリアの農民生活を描き、それに介入するクラークや商人資本の活動をみて農奴解放後も農民の法的物質的狀態が本質的に改善されていないことを示そうとしたのである。さらに、啓蒙的パンフレットもいわゆる「科学的＝大衆的文獻 (nauchno-populiarnaia literatura)」として流通した。I. フヂャーコフ (Khdiakov) の歴史物 (『古代ロシア (Drevniaia Rus')』など) はこのジャンルで最も評判をとったものであり、あらゆる労働者サークルの蔵書になったと指摘されるほどである。²²⁵⁾

そして、厳しいと言われかつそのように想像されている当局の統制と規制にもかかわらず、19世紀後半期以降、帝国国境を超えて楽々と「非合法」文獻が外国から運び込まれて社会運動に供されたのも注目に値することであった。²²⁶⁾ すでにみたように、「大改革」の文化的国際環境はさまざまに開かれようとしていたのであり、こうした現象もその一環として捕えられないこともない。自らがチューリヒからの密輸に加担した経験を有するラヴリスト、N. G. クリャプコ=コレツキー (Kuliapko-Koretskii) は人民のためになる安価本を供するのが文明国の文明国たる由縁であると認識していた人であったが、おそらくは多くの革命家もそう考えたであろう。²²⁷⁾ 西欧の亡命者などからロシアへ向かって伸びた「禁書」密輸ルートには、大きくはペテルブ

ルクへ向かう「北部ルート」と南部地方へ入る「南部ルート」のふたつがあった。とくに後者の場合、オデッサが受け入れの中心的な位置にあり、ロンドンからコンスタンチノーポリを経由するルートとヴィーンからルーマニアを経てロシア国境を越えてくるルートがあった。さらに、これらのほかにスイスからヴィーンを経由してガリチアとキーエフに至るルートもあった。²²⁸⁾

国外ではロシアからの「亡命者による出版 (emigrantskie izdatel'stva)」が盛んであった。²²⁹⁾ 彼らは自らの仕事を「自由出版 (vol'naia pechat'あるいは vol'noe izdanie)」と称して誇ったのである。ジュネーブの M. K. エルピジン (Elpidin) の場合、1865年に脱獄亡命して以来、1867年～1907年の40年間の長期にわたって出版活動を継続し、合計して約180点を刊行した。その中にはチェルヌイシェフスキーの最初の著作集14点 (1867年～72年刊) が含まれていた。同じジュネーブの「労働解放団」も1883年以降、系統的にマルクスの著作の翻訳を出した。1891年にはロンドンで S. M. クラフチンスキーを中心としたロシア人亡命者たちが「自由ロシア定期刊行物基金 (Fond vol'noi russkoi pressy)」を結成した。²³⁰⁾ 政府検閲当局は禁書リストを作成して、実際にはあまり実効性を伴わなかったのだが、密輸の取締りに励んだ。1855年～69年用の禁書リストには3ヶ国語約4000点が列挙された。「パリ・コミューン」のあとは、摘発される外国本の数はさすがに急増し、1871年～75年の間で毎年、500～800点はその網に引っかかった。1894年の別の禁書リストは1355点を掲載したが、そのかなりの部分はロシア人亡命者の手になる作品であった。²³¹⁾

ここで国内に目を転じると、この時期のいわゆる地下出版に関して、従来はリフシツが最もよくまとまった整理を試みている。それにしたがえば、ロシア最初の地下印刷所がモスクワに開設されたのは、1861年である。そこで学生 Ia. スリン (Sulin) たちがオガリョーフの『コルフ男爵の文芸批評 (Razbor knigi barona Korfa)』を数百部印刷したのである。彼らはさらにチェルヌイシェフスキーやゲルツェンのものなどを印刷したが、その年の8月には逮捕されてしまった。²³²⁾ この1860年代初頭で最も注目されるのは第一次『土地と自由』結社がペテルブルク近郊にもった秘密印刷所であり、そこでは1862年8月にウーチンが書いた檄文『知識階級へ (K obrazovannym klassam)』をレター・ペーパーを使って綺麗に印刷した。²³³⁾ しかし、ロシア国内では1864年以降、「革命的文書」の印刷は長らく停止した。1869年になってネチャーエフのグループが活字一式 (shrift) の入手を図ったがそれも不首尾に終わり、国外に印刷拠点をますます求めるようになったから、²³⁴⁾ 少なくとも1860年代はこの分野において確たる進展は国内的には見られなかったとみなしてよいであろう。

1870年代に入ると少し動きが出てくる。1872年にペテルブルクにできた「ドルグーシン団 (Kruzhok Dolgushina)」は団員 V. A. チホツキー (Tikhotskii) が寄付した3000ルーブリを自分たちの印刷所を持つことに使った。団自体が1873年前半にモスクワへ拠点を移したから、印刷所を同県ズヴェニゴロド郡サレーエヴォ村 (モスクワ市から25ヴェルスタ、約25km) に置き、その後市中へ転じて何種類もの檄文を印刷し、人民の間に配付したのである。²³⁵⁾ フレロフスキーが彼らのために作成したパンフレット『いかに自然と真理の法則にしたがって生きる必要があるか (Kak nado zhit' po zakonu prirody i pravdy)』もそこで印刷された。²³⁶⁾ チャイコフスキー団の場合、独自の印刷所をまずチューリヒに、そしてジュネーブに持ち、専ら外国で印刷を行っていたが、1873年夏にペテルブルク高等技術専門学校聴講生にして「ニーザフキン・サークル」員であった (このサークルについては後述する) M. クプリヤノフ (Kupriyanov) が団から依頼されてヴィーンで印刷機を入手しそれを密輸して国内に印刷所を開こうとしたが、団自体が翌年には解体されてしまい、結局はそれを果せずに終わったのである。²³⁷⁾

良く知られた I. M. ムイシキン (Myshkin) の場合がそうであるが、合法的な印刷所が非合法文書を印刷することはよく観察された。彼は速記学校を修えて陸軍測地部に就職したが、1868年にそこを辞めてモスクワへ出て『モスクワ報知』紙記者を勤めたり、地裁やゼムストヴォで速記を取るなどしていたが (ネチャーエフ裁判の速記をしたのは彼である)、1873年になって知人と所定の手続きを踏んで市内に印刷所を開業したのである。その冬にアルハンゲリスクから出てきた4人の娘たちが非合法文献の印刷を求めたのに同意して、彼は印刷所内に非合法部門 (それを「婦人植字室 [zhenskaia nabornaia]」と呼んだ) を作った。そこでは実際に一連の檄文、著作が印刷されたが、²³⁸⁾ 彼の活動にとっていわば助手となった元モスクワ大学生 P. I. ヴォイナリスキー (Voinaral'skii) の存在は大きいものであった。彼は独自にサラトフに印刷所を開設した。

一般的な傾向として、当局の禁止や制限措置にもかかわらず、反体制派は独自の印刷能力を獲得していったと見なければならぬ。1870年代も後半以降、「土地と自由」や「人民の意志」といった当時の代表的な革命結社はその活動を自らの印刷物に依存することが多く、そのために印刷所を構えることは通例になったとみてよい。本稿ではそれらの具体的様相を記述する必要は認められないが、後の議論のためにわずかに関連して触れておけば、『ロシア労働者北部同盟 (Severnyi Soiuz Russkikh Rabochikh)』 (以下、単に『北部同盟』と略記する) では1878、9年ごろから独自の印刷所を所有しようとする動きが認められ、それは1880年2月に実現した。そこでは新聞というよりも檄文に

近い体裁の『労働者の夜明け (Raboचाia Zaria)』を出したりしたが、すぐに搜索をうけたからこの印刷所はそれほどの働きをしたわけではない。むしろ、われわれにとり興味深いのは、その際に没収された活字や木製手動印刷機の形態的特徴からそれら設備がかつて『新綿紡績』工場労働者に宛てた『北部同盟』の檄文やその綱領を作成したことがある「人民の意志」派の印刷所が支援した〔提供した〕ものであると判明したことである。²³⁹⁾ このことは革命諸派の間に相互支援的な連携の関係が実体をもって存在したことをよく示している。

特に国外から持ち込まれた非合法文献は1873年からロシア帝国に本格的に出現し、1875年までの3年間でいわばその最盛期であったと観察されている。ザハリーナは1872年～77年に流布された非合法文献29点を調査して、その執筆者と印刷所に関して次のような整理をしている。執筆者が属するか、それと近い関係にあったサークルないしグループの内訳は、チャイコフスキー団12点、ラヴリスト5点、新聞『労働者 (Rabotnik)』編集部4点、ドルグーシン団3点、その他2点、不確定3点である。印刷所の方はチャイコフスキー団ジュネーブ印刷所12点、ウクライナ学生ヴィーン・サークル印刷所5点、『前進(Vpered)』印刷所4点、新聞『労働者 (Rabotnik)』印刷所4点、ドルグーシン団印刷所2点、不明1点、リトグラフ出版1点である。²⁴⁰⁾ これらは当時の非合法文献がチャイコフスキー団関係者を中心として海外で刊行され、国内に持ち込まれたという基本的傾向をよく示している。人気が出たものはかなり多数部印刷された。なかでも『四人兄弟の物語 (Skazki o chetyrekh brat'iaxh)』第3版の1万5000部、『巧妙な仕掛け (Khitraia mekhanika)』の1万部といったところが最大級の数字であろう。²⁴¹⁾ これらが海外から様々なルートで密輸入されたのである。

これら革命派の非合法文献は「人民向けの文献 (literatura dlia naroda)」であり、「大衆向けの宣伝文献 (populiarnaia propagandistskaia literatura)」であったから、上に触れたクロポートキンがいうような「人民のこと」を描く民衆作家たちの作品とは明らかに相違する立場にあった。つまり、それらの内容は何よりも人民によって理解されなくてはならないものであった。そのためには「人民の言語 (narodnyi iazyk)」や「簡単な言葉 (prostoi iazyk)」を駆使して、「無知蒙昧な農民にも理解しうる簡単な形式で」伝えることが求められたのである。アプテークマンはまず手書きの段階で人民の評判を探り、そのなかで良好な関心を示されたものから印刷に回されたと回想している。²⁴²⁾ それらは「農民やファブリーチヌイエにも分かる言語で書かれて、政治的な談話に切っ掛けを提供する」²⁴³⁾ ことが目指されたのである。しかし、農民たちがそれらを読破できるわけがな

く、また農民は概して読書そのものに興味を惹かれなかったのだから、例えばそれを農民たちに読み書きを教える教材として活用したであろうなどと想像することは見当外れであろう。おそらく、実際には、当該文献はまずは口頭宣伝 (ustaia propaganda) のいわば台本として利用されたと考えたほうがよい。この点で、R. I. ヤランツェフ=ベルシャツキー (Iarantev-Bershadskii) が「人民向けの本」を3分類して、宣伝説教ピラ (proklamatsiia-propoved'), 宣伝物語 (propagandistskaia skazka), 話あるいは話合い (rasskaz ili beseda) としているのは、それらの性格をよく示すであろう。²⁴⁴⁾ 農民とのあいだでまず試みられたのは、「口頭での対話 (ustaia beseda)」, 「口頭の物語 (ustnyi rasskaz)」であった。つまり、バザーノフがいうように、「農民ロシアを旅する革命的ナロードニキは、なによりも対話する宣伝家 (beseduiushchii propagandist) であった」²⁴⁵⁾ ろう。それら文書が扱った内容は農民経営、税制、不作と飢饉、農村の内部対立、教育権、徴兵制など多岐にわたったが、その論調は部分的改良を拒否して、根本的変革を訴えることでは共通していたのである。²⁴⁶⁾

さて、チャイコフスキー団員であり、熱心にこの事業に係わったシシコーはその回想記で、当時、最も普及した「人民パンフレット (narodnye broshuriy)」に関して次のように語っている。²⁴⁷⁾ 長くなるが、簡便な記述で参考になるから、紹介しよう。

「〔合法文献で最も成功したのは〕1. 『エゴールお爺さん (Dedushka Egor)』 — ピーテル[ペテルブルク]へ使いに出されて監獄へ入れられてしまった農民の代表者の歴史、2. チャイコフスキー団が出版した、『泣く子と地頭には勝てぬ (Sila solomu lomit)』という共通題名のナウーモフの短編集。かなり大部な巻であるが、容易に個別パンフレットに分割できる。なかでも最良の短編は当局によって支持された富農層 (kurachestvo) にたいする鋭い抵抗を示してかなり強い印象を都市労働者と同様、農民にも与えた。3. フジャーコフの『古代ルーシ (Drevniaia Rus')』では、知られるように、民会体制とモスクワ・ルーシの最も顕著な特性と出来事が取り上げられている。この小冊子は反君主制の宣伝のために大きな助っ人になった。最後に博物学的内容のいくつかのパンフレット (『空と大地の物語』, 『自然に関する談話』など) に言及しなくてはならない。これらのパンフレットは不可避免的に宗教問題を提起し、大筋において我々は労働者たちに自己の反宗教的見解を押しつけることをしなくても、ほとんどいつも教会宗教のほぼ完全な否定と無神論をさえ導き出したのである。

チャイコフスキー団やその他のグループによって出された非合法パンフレットからは次に触れなくてはならない。1.『あるフランス人農民の歴史(Istoriia odnogo frantsuzskogo krest'ianina)』、これはエルクマンとシャトリアン(後出)の有名な歴史小説の焼き直しである。そこにはこの本から最も革命的部分が出来る限り引き出されている。2.『ステンカ・ラージン(Sten'ka Razin)』はナヴロツキー(Navrotskii)の物語詩であって、最初は『ヨーロッパ通報』に掲載されたが、いかなる改作をせずとも、力強く書かれた革命詩であることが随所でわかる。3.チホミーロフの『四人兄弟の物語(Skazka o chetyrekh brat'iakh)』ではかなりはっきりと人民にたいする経済的政治的宗教的搾取を、蜂起への直接的な呼び掛けとともに、描いている。4.『兄弟とは何か(Chtoi-to, brat'sy)』は散文の体裁をした小さなパンフレットであるが、需要や欲求を無視してヒツジの支配者になってしまったオオカミをテーマにして、結論として「国民会議(Zemskii Sobor)」招集の必要性を主張する。5.『プガチーフ反乱史』はチホミーロフによって書かれてクロポートキンが増補したものである。このパンフレットはテーマ自体からして、明らかに、穏やかな性格を帯びてはいない。6.革命的な歌や詩を集めたもの。それらの多くは、例えば、大変に評判を取った詩作『舢舨(Barka)』や『農民の請願(Pros'ba krest'ian)』のように、直接的にツァーリを攻撃するものである。これらすべてのパンフレットは1874年以前に執筆されたのだが、その後もクラフチンスキーによる幾つかの物語が出たのである。

シシコーの回想に列挙されたこれら諸作品のいくつかにいま少し解題を加えよう。まず指摘しなくてはならないことは、たとえ所定の手続きを経なくとも勝手に「検閲済」を印刷してしまうのが通例であったから、まず形式的に合法と非合法の境界は不明確であり、さらに実質的にみて内容で区別することも出来なかったということである。合法的文献とされた1.『エゴールお爺さん』は最初1870年7月26日付け新聞『週間(Nedel'ia)』第30号と31号にN.R.の署名入りで掲載された。これをチャイコフスキー団が内容に手を加えずにパンフレットの形にして、1873年3月、キーエフ検閲局の認可を得たのである。団員のN.A.チャルーシンはペテルブルクでは検閲に通りにくいと考えてキーエフにしたと知人宛の私信で述べている。しかし、この物語は1875年4月以降、国内での印刷は許可するが、流通を禁ずる刊行物リストに加えられた。²⁴⁸⁾

非合法とされた方では1.のフランス革命を老農夫が回

想して農民に連帯を促そうとする『あるフランス人農民の歴史』は、正確に言えば、フランス人作家エミール・エルクマンとアレクサンドル・シャトリアンの小説『農民史』を著名な女流作家M.A.マルコヴィチ(Markovich)(マルコ・ヴォヴチョク[Marko Vovchok])がロシア語に翻案したものを下敷きにしており、1873年秋にジュネーブのチャイコフスキー団印刷所で印刷された。²⁴⁹⁾ 執筆者そのものは特定できないが、ザハリーナなどはクレメンツ、チホミーロフ、ザソジムスキーらチャイコフスキー団の「文献委員会」(この委員会の存在を指摘するのは、筆者が知る限り、彼女だけである)による共同作品である可能性が高いと見ている。²⁵⁰⁾ 2.の『ステンカ・ラージン』は「ステンカ・ラージン」(1~26頁)と歌「母なる川ヴォルガの向こうから(Iz-za matushki Volgi)」(26~28頁)だけからなる、奥付をもたない小冊子である。やはりジュネーブのチャイコフスキー団印刷所で作成され、その著者は当人が逮捕された時に押収された手書き文書に照らしてみても、S.S.シネグープであると推定される。²⁵¹⁾ 3.のより正式な表題は『何処がより良いか? 四人兄弟と彼らの冒険物語(Gde luchshe? Skazka o chetyrekh brat'iakh i ob ikh prikliucheniiakh)』という。通例はかのL.A.チホミーロフが執筆者とされ、彼が1873年の秋に書いて同年中にジュネーブのチャイコフスキー団のところで印刷されたといわれるが、それよりかなり以前の1868年4月にモスクワでの検閲認可を事項記載した版があることは確かめられている。²⁵²⁾ ラヴローフによれば、この小冊子は1万5000部出され、彼自身これを「人民への普及において最も成功した」ものの一つとして高く評価している。²⁵³⁾ 4.は1873年にチャイコフスキー団のジュネーブ印刷所で、さらにその翌年にはモスクワのムイシキンの印刷所で印刷された。この著者はL.E.シシコーである。²⁵⁴⁾

さらに、シシコーの回想記からもれた「人気作」に言及すれば、スチェプニャーク=クラフチンスキーの『カペイカ物語(Skazka o kopeike)』(これもチャイコフスキー団のジュネーブ印刷所による)は近年の調査では1870年5月にペテルブルクで検閲許可の印を受けた版が所在することが確認されている。²⁵⁵⁾ クラフチンスキーは最も精力的にこの種の宣伝文書を執筆したひとりであって、ソヴィエト期の1935年に刊行された文献目録では少なくとも8点の著者になっている。²⁵⁶⁾ しかし、1874年にチューリヒの『前進』印刷所から刊行された『巧妙な仕掛け(Khitraia mekhanika)』はよくいわれるように彼の手によるものではなく、当時、ペテルブルクのラヴローフ派サークルにいて後に著名な統計家になるV.E.ヴァザーロフがその作者である。ヴァザーロフも多く宣言文書を執筆したのであるが、この場合はペンネームとしてアンドレイ・イヴァー

ノフを使用している。これは「農民の金はどこからきて、どこへ行くのか、本当の物語」という副題をもち、帝政税制の不合理さを鋭く告発するものであり、人気をえて非常に多くのバリエーションが刊行された。²⁵⁷⁾

ここで最後に、人民側に存在したと考えられる「活字崇拜」についても触れておかななくてはならない。それは彼らの中にあった、「書かれたもの」にたいするいわばコンプレックスの問題である。農奴解放にあたって多数の「偽書」が出現したことはすでによく知られる事柄である。農民たちが期待した解放証書の内容に失望したことがそれらの登場を促したのである。この間の一連の出来事は革命派によって大切に受け継がれたはずであり、必要に応じてその時の記憶を呼び覚まし、いまに甦らせようと彼らが渴望したことは自然な勢いであつたろう。つまり、「偽書」をもって、革命の発火点となそうとする動きである。その顕著な事例がよく知られるいわゆる「チギリン事件」であり、Ia. V. ステファールノヴィチ (Stefanovich) らの「キーエフ・コムニオン (Kievskaiia kommuna)」は設備を密輸入して、1876年にキーエフに秘密印刷所を開設した。そこではI. G. デイチ (Deich) や I. P. ボハノフスキー (Bokhanovskii) らが働いて、その事件を引き起こすことになる皇帝の最高秘密勅書 (Vysochaishaia tainaia gramota あるいは Zolotaia gramota) などがそれらしく印刷されたのである。²⁵⁸⁾ 農民たちは自らは理解できないその筋の文書の類を半ば盲信する傾向にあったのだが、無論、彼らがそのようにした背景にあったのは、真のツァーリに対する崇拜と期待の念である。ツァーリの存在なしにはその間の事情を理解することはできない。このように考えれば、革命派の活字文化尊重は、皮肉なことにツァーリによってその根拠を与えられていたといえないこともないのであつた。

4) 農村農民と読書

この改革期に政府や公衆が人民、なかんずく農村農民の教育に意を注いだことは確かであろう。例えば、1872年に政府は『ペテルブルクとその周辺において人民読書会を組織する常置委員会 (Postoiannaia komissiia po ustroistvu narodnykh chtenii v Peterburge i ego okrestnostiakh)』を立ち上げ、それは宗教的かつ愛国的な色彩の濃いパンフレットを300万、400万単位で出したのである。ツァーリ政府の意図は明らかであるが、ここではその大量な「物量作戦」に改めて着目すべきであろう。つまり、それは村々に流布されるルポークとの対抗からか、あるいは当時、低迷にあえいでいた正教会を支援するためか、そのほか何らか別の理由にせよ、ここには活字媒体それ自体が人民に対して作用するであろうとする当局の希望的な想定が存在したことは明らかである。²⁵⁹⁾

この点で、たとえばアクセリロートが「私にとり、読み書きは単なる手段でしかなく、革命的宣伝こそが直接的な目的であつた」という場合、²⁶⁰⁾ 「読み書き」する行為自体が有する意味合いを無視する（あるいは意識しない）知識人特有な発想を示しているのである。しかし、その一方で、上に触れたように公衆による識字運動が盛んであつたハリコフ市の人民教育家たちが作成して評判をとった『人民に何を読むのか (Chto chitat' narodu?)』²⁶¹⁾ はいわゆる人民向け文献 (narodnaia literatura) の需要者をその年齢と学力に応じて実に6分類もしているのだから、おそらくそうした発想の根拠としてあつたのは丁寧に対応しさえすれば、教えることは可能であるとする合理的で楽観的な思考であつたろう。

次節で本格的に触れるのだが、「ヴ・ナロード」で農民の中へ実際に入ってみた印象記は、全体には個別分散的に存在しているにすぎないが、現在でも比較的容易に目にすることができる。そのひとつとして、1874年8月以前にI. M. オフチニコワが知人に宛てた書簡には農民たちの「読書傾向」に関してつぎのような興味深い観察が示されている。以下、やや長くなるが、引用しよう。

「私の知識の持合わせでは農夫たちとどうやったら快適に話をするができるのかしら。……私の生徒たちはただ本性上読むのが好きだということだけで、多かれ少なかれ社会問題にかかわりがあるような読み物、たとえば工場生活に取材したような本は好まず、『エゴールおじいさん』など、こういうような本を彼らと一緒に読むのはただもう歯がゆいだけなのよ、……彼らは滑稽な面だけに注意を向けて、肝腎なことには気がつかないわけなの。ところでペテルブルクの人たち (下線強調=原文) はさらにこれらの本の読後に私たちが読者たちに課することができるとでもいったような問題を私たちに山ほど送って来ましたし、しかもそれらの問題というのは、もちろん、社会的性質のものなのよ。私はもう前にこういうふうに言ったわけなの、——彼らはこういうような問題には注意を向けていないのですから、そんな問題を彼らに課することは何にもならないことをするのと同じだって。ですから、残されているのは、つまり、私はただ教えているにすぎないってことで、私が胸に抱いてやって来た目的は果たされないでしょう。いいかえれば、私は農民の生活、彼らの考え方に根本的に通じていなかったわけなので、これはすべて、それこそ私自身がひどく碌でもないせいなんです。」²⁶²⁾

ここには首都にいて指令的立場にある革命的ナロードニ

キ、現地農村に入って実際に農民と接触した一般的な活動家、そしてこれら両者の働きかけの対象となるはずの農民の三者それぞれの立場が、不十分ではあるが、少しずつ触れられている。いわば中間に位置したこの書簡の主は双方の無理解と身勝手さに甚だしい不満を覚える、実に損な役回りを強いられている。彼女が呪うべきは首都の「司令部」の現場知らずのいわば教条主義であり、農村農民の視野狭窄で頑なな姿勢である。農民の生活に通じていないとなかば自己嫌悪的に述べる彼女の境地はもうほとんどニヒリズムの世界であろう。

4. 「科学と文化」の発現様式としての「ヴ・ナロード」

前段ですでに議論をはじめているのだが、「ヴ・ナロード」といわれてきた社会的現象を本稿では「科学と文化」の発現様式のひとつとして捉えなおしてみたいのである。金子幸彦はかつてその『処女地』論において、それが「現実をどのように反映し、どのような客観的意味をもつか」に新しい評価の可能性を探ろうとした。²⁶³⁾ それは、作家ツルゲーネフ自身は民衆に近づいて社会主義思想をもたらすことなどはできず（革命家の宣伝に乗るのは人民の墮落した部分のみである）、むしろナロードニキの運動はロシア社会のブルジョアの民主化のための戦いであると理解していたことに励まされた結果の立論であった。ここではこの問題意識とその着眼とを大いに参考にしたいと思う。

1) 人民との接触 — 「ナロード」のイメージ

B. N. ミローノフはロシアの農民文化とソヴィエト権威主義の起源との関係を論じた中で、前者にまつわる閉鎖的で固定的なイメージを強調しながら、モデル的に抽象化されたものと釈明しつつ、ロシア農民の人間類型の要素を次のように列挙している — 全体利益のために個人的なそれを犠牲にすること、強制と規制、社会経済的なパイと共同体の義務について非常に強力な平準化傾向、差別化の回避と伝統や権威に対する志向性、新規の行動様式や変化にたいする拒絶、集産主義、全員一致の原則、思考における複数性の欠如、思想および行動の統一性・独断性・陳腐性、多数の禁止事項の存在、外部からの脅威にたいする団結、内部問題におけるアナーキー、部外者への敵対・攻撃性、インテリゲンツィアと知的作品にたいする軽蔑、自然発生性・情緒主義・反逆性、偏見と宿命論。以上を列挙したうえで、ミローノフは、これらの基準に照らしてはずれる振る舞いをする農民は村では尊敬されはしない。彼らは自発的にか強いられるか、そこを立ち去ることになる。少なくとも18世紀中葉から農村共同体はそうした「墮落した分子」を軍隊やシベリアなど遠方へ送る権利を持つに至った、と述べるのである。²⁶⁴⁾ こうした人間類型の存在が政治的絶

対主義にとってこれ以上ないほど豊穡な社会的土壌を提供したというのが彼の議論の骨子なのであろうが、ここではその当否を議論しようとは思わない。ただ、ロシア農民がこのような「強烈な」（さらに「画一的な」）イメージでもって扱われる傾向にあることをひとまず確認すればよい。そして、このことは同時に社会のもう一方の側にとりそれが理解不能な存在であることを表明するにほとんど等しいことなのであった。

いささか唐突ではあるが、ツルゲーネフはその『処女地』で主人公ネジダーノフについてこう語っている。「パークリンらの親身の忠告を思い出して、ネジダーノフは農民たちと近しくすることにも努めた。しかし、彼は観察力の及ぶかぎり彼らを単に研究しているだけで、全く宣伝していないということに間もなく気づいた。彼はほとんどすべての人生を都会で過ごしてきたので、彼と農村のひととのあいだには雨溝か壕とでもいったものがあって、それを彼はどうしても飛び越えることができなかった。」²⁶⁵⁾ このようなロシア社会二重論は、すでに本論冒頭でも触れたように、古典的かつ典型的といってよいものであろう。やはり革命家フィグネルはサマーラ郡に保健婦として実際に入ることをしたのだが、「正直のところ、私はこの農民の海のなかにあって自分が独りぼっちで、たよりなく、無力だということを感じた。そればかりか、どんなふうに民衆に近づけばいいのか私にはわからなかった。それまで私は農民たちのみじめな環境を何一つ近くで見たことがなかった。」²⁶⁶⁾ と上と同じように回想しているのである。

したがって、こうした関係論に立てば、相手は「我々にとって、どんな森にも劣らず鬱蒼として暗い（*dlia nas glukh i temen ne khuzhe liubogo lesa*）」²⁶⁷⁾（『処女地』のもう一人の主人公パークリンの言）訳なのだが、こうしたことはなにもナロードニキの側だけでなく、立場をかえれば、農村農民側にも同様にいえたことであつたろう。ここでは、さしあたり記録がよく残っている前者に関して、立ち入ってみたい（後者が同じように記述的記録を残すことは基本的に期待できない）。ナロードニキと呼ばれた人たちにとって人民とはどのような存在であったのだろうか。彼らの「証言」を裁判記録などから拾い上げてみたい。

①「最良の青年男女の会話には社会的要素がますます多く顔を出しはじめ……、このために学生インテリゲンツィアの力だけでは足りないということ、人民なしにインテリゲンツィアは無力だということ、それゆえに人民に影響力をおよぼすように努力する必要があること……、それなのに青年男女は人民にぼんやりとした観念しか持っていないことを意識した」²⁶⁸⁾（『チャイコフスキー団サークル史概観、1869～1872年』、1880年代の執

筆?)。

- ②「わが国の人民は、たやすく間違った道に引き込まれ得るほど無学だと言われている」²⁶⁹⁾(ムイシキン上申書, 1876年11月16日)。
- ③「アメリカには一切が人民によって選出された代表者たちの手の中にある。それは人民がわが国の人民よりはるかに教育あるからだ」²⁷⁰⁾(A. V. ヤールチェフの供述, 1873年12月20日)。

意図的に「証言」を拾い上げて言うつもりは全くないが、ナロードニキの側は人民にたいして「ぼんやりとした観念しか持っていない」にもかかわらず、ロシアの人民が「無学である」ことだけははっきりと認識していたのは確かなようである。おそらく、さらに多数の事例を並べる努力を重ねてみたところで、ほとんど同様な結論に達するであろう。この種の「思い込み」が持つ意味合いは慎重に吟味する必要があるが、そもそもこうした偏見はどこから発したのだろうか。公衆部分で歴史伝統的に積み上げられてきた人民蔑視の遺伝的ともいえる感情の存在がその基盤にあるのはたしかであろうが、さらに、このことはこれまで触れてきた科学と文化偏重の時代気象とは無関係ではありえず、それが公衆にたいしてようやく人民と具体的実際的な関係を切り結ぶように迫った時に起きた反応なのである。したがって、このように人民を無学な啓蒙の対象とみなしたことで、結果として彼らの運動(「ヴ・ナロード」)はこの「思い込み」の風潮をむしろ強化する役割を果たしたことは改めて指摘されなくてはならないであろう。

次の問題は、この事態に対応して人民と関わらなくてはならないと立論したことについてである。関連して、同様にいくつかを引用したい。

- ④「学問によって練り上げられた社会体制の理想を人民に提起し、その理想を達成するための手段を指し示し、人民の諸勢力を結合し、統一すること——これこそ私たちの義務なのです。……人民の先頭に立っても彼らの中へ行くのであって、是が非でも自分の後ろに人民を引きずっていくのではない」²⁷¹⁾(1874年、ロシアにおける革命的サークルのメンバーたちのラヴローフ宛書簡草案)。
- ⑤「われわれの任務は農民たちに彼らのみじめな、ほんとうの状態を明らかにしてやり、特権階級のいない、全体の平等のうちに生活がととのえられる可能性を彼らに教えてやることでした。……われわれの目的は、全人民が自分たちの権利というものを理解し、その思想を身につけることによって、直ちにその理想を実現すること[です]」²⁷²⁾(1874年8月、ペテルブルクにおける「オレンブルク人」サークルの組織と活動に関するL.

M. シチーゴレフの供述)。

- ⑥「平和的なプロパガンディストの任務は人民の意識のなかに、より良き、最も公正な社会体制の理想を持ち込むということ、あるいはすでに人民の中に無意識的に根を張っている理想を彼らに理解させること、未来において同じ誤りがないように現体制の欠陥を彼らに教えることです。」²⁷³⁾(1876年11月、「50人裁判」起訴状, S. I. パルヂナの法廷弁論)。

ここでも多数を紹介する必要はあるまい。これらは「社会体制の理想」の存在に人民が目覚める手助けをすることを柔らくくいって、決してそのために積極的な主導権をとろうとはしないことを宣伝の基本路線として表明するものである(下に見るように、本来、宣伝とはそうしたものであろう)。しかし、こうした設定で最も問題なのは、彼らがいわば外部から持ち込もうとする「社会体制の理想」認識が格段の無理もなく人民のそれと合致すること(あるいは人民によって受容されること)が何の躊躇もなしに暗黙の前提とされている点であろう。④がいうような「学問によって練り上げられた社会体制の理想」がどうして⑥のような「すでに人民の中に無意識的に根を張っている理想」と矛盾なく整合的でありうるのだろうか。前段①で触れたように、「人民にぼんやりとした観念しか持っていない」人たちがこうしたことを言い切ることにたいして、私たちはむしろ不誠実の感さえ抱きかねないであろう。

「他の人たちのために役立つということ、人民のために生き、働くということ——これこそが私や私の最良の仲間たちが抱いていた唯一の思想です」²⁷⁴⁾(ムイシキン上申書)といった弁明やサヴィンコフが最後の法廷で残したといわれる次のような発言——「私は大衆を知らず、民衆を知らず、農民も労働者も知らない。私は彼らを愛した。私は自分の生命を投げ出す覚悟はできたし、また投げ出してきた」²⁷⁵⁾は、したがって、ますます一方的で宗教的な響きを帯びざるをえないであろう。サヴィンコフが上に続けていった、「しかし私は彼らの関心を、彼らの真の願望を知ることができただろうか？」という告白は熱狂から覚めて初めて言える、実に重たい文句のはずであった。

2) 宣伝と宣伝家

革命派が単独ではその事業を遂行しえず、より多数者の運動参加が必要であると判断した場合には自らの思想、意図、目標などを外部に(人民に)伝達することが不可欠となろう。そうすることによって同調者を増大して目論見の実現を達するわけである。良く知られているとおり、そのために口頭や文書などによって行われる方法には「宣伝(propaganda)」と「煽動(agitatsiia)」の二種類がある。口

シアのこの時期の革命家たちもこの問題に関わるようになった。彼らが人民主義者（ナロードニキ）と称される所以のひとつはここにあるであろう。この二つの方法に関して、本格的な「ヴ・ナロード」の直前、1874年〔春と推定される〕に執筆された「革命的な宣伝と煽動」と題された文書〔残念ながら、作成者は特定できない〕をみると、それらを「文書的な準備闘争（literaturnaia podgotovitel'naia bor'ba）」と一括したうえで、前者、つまり宣伝は一般原則的な性格を有するとして、次のように述べる。「闘士——宣伝家、理論家は何よりもまず現存する秩序の一般経済的原理と最も近い関係を有する諸事実、そこでそれらの一般原理が最も鋭く鮮明に表現される諸事実に自己の注目を止めなくてはならない。」その一方で、後者、つまり煽動についてはこう語る。「闘士——煽動家、実践家は逆に、とくに力を込めて次のような諸事実を重要視しなくてはならない。つまり、何よりも鋭く目を射るもの、社会のある階層がしばしば衝突しているもの、人びとが最も辛く苦しんでいるもの、その外面的な粗削りや醜悪さで何よりも人びとを驚かせているもの」。²⁷⁶⁾ つまり、宣伝はいわば理論的準備を想定するものであり、煽動は〔多くの場合は前者を前提にして〕革命的実践への契機たらしとするものである。こうした理解はほぼ普遍的であったと考えられる。後にも触れる1875年2月の「全露社会革命組織規約」では、宣伝は革命事業にたいする考え方を明らかにするために役立ち、煽動は個人ないしサークルを鼓舞して積極的な革命的活動を惹起させる目的を有するとしている。²⁷⁷⁾

しかし、こうした宣伝と煽動をめぐる二分法は便宜的なものであって、実際には区別不能な局面が多いことは容易に想像できる。したがって、本論で問題としたいのは両者のそのような静態的かつ理論的な関係論ではなく、革命派が練りに練って案出し執行するこれら企ての有効性の問題、つまりそれらの標的とされた人民との関係論である。ここでは時期的にも特に宣伝をめぐる議論したい（煽動がロシアでその存在感を増すのは19世紀末である）。

学生が他の学生を仲間にしようとする場合と学生が農村農民を工作しようとする事例をともに同じ宣伝のカテゴリーで議論しようと思えば、それはできることであろうが、宣伝においては社会的にいわば同質的な分子を相手にする場合とそうではない異質的な部分を対象とする時とでは働きかけとそれがもたらす結果は必ず同じになるわけではないであろう。ここでは両者の差異に敏感になろうと思う。「ヴ・ナロード」は後者のケースであり、それは人民の間に合理的民主的な思考様式を普及しようとするプロセスをとらないながら、社会的に異質な部分を包摂して自陣営を強化しようとするものであり、ただ単に量的に勢力の増大を図るだけのものではない。つまり、少なくとも客観的に

はそれは全体として人民を近代的な集団としてまとめ上げようとする志向性を有した。しかも、そこで具体的にそのために活用されようとした道具立ては、何よりもロシア語によって印字された文書の普及活動によく認められるように、はっきりと「ロシア的」色彩を帯びていたことにも注目しよう。このように見れば、「ヴ・ナロード」運動はロシアにおいて国民国家形成的なベクトルを保持していたろうことに気付くのである。もっともこの論点は筆者の発見であるわけではなく、例えば、アクセリロートはその回想記において、「ヴ・ナロード」の名において行われる啓蒙＝宣伝活動が「ロシア化（russifikatsiia）」を意味することになるから、そうした用語は意識して使用しなかったというのである。²⁷⁸⁾ 彼は「ヴ・ナロード」にロシア・ナショナリズムの抬頭を、そのブルジョア民主主義的性格を見ていたのである。私はこの視角を重要視したいと思う。

「ヴ・ナロード」に関わって逮捕された活動家は1400人であり、そのうち770人が取調べを受け、裁判の開始までに93人が自殺したといわれる。とくに「危険」とみなされた197人は別途、裁判にかけられたのである。いわゆる「帝国における革命的宣伝」事件、通称、「大裁判」あるいは「193人裁判」である（数字が減ったのは4人が死亡したからである）。²⁷⁹⁾ 1877年3月付で提出された1870年代の宣伝家に関する第三部の報告書があり、²⁸⁰⁾ 私たちはこれによってひとまず統計的に宣伝家の社会的相貌を確認することができる。この資料を紹介したシードロフは「ドルゲーシン事件」を契機に宣伝が目立つようになったとする1873年から1877年までのほぼ3年半の間に宣伝行為に絡んで取り調べを受けた1611人（男1367人、女244人）を運動への参加度合いに応じて次の4グループに整理している。①刑事罰相当525人（445人、80人）、②証拠不十分で裁判の維持は困難だが、警察の監視下におく79人、③積極的活動家ではないシンバだが、警察の監視下におく450人、④証拠不十分で釈放された557人。²⁸¹⁾ したがって、逮捕された者のうち何らかの罰則を被ったのは、全体の三分の一ほどであった。それとほぼ同数は「無罪放免」になっている。①の部分について年齢分布をみると、30歳以上42人、25～30歳93人、21～25歳199人、21歳以下117人であって、若い20歳台前半以下に全体の7割が集中している。²⁸²⁾ この時代、完全な法的当事者能力をもったのは25歳以上であったから、宣伝家たちの「若さ」が当局の追及を手続き的にかわすのに力があつたことは否めない。身分別に分布をみると、貴族147人、聖職者90人、農民65人、官吏の子弟58人、町人54人、商人・名誉市民12人、雑階級人14人、軍人11人である。²⁸³⁾ 貴族と聖職者という近代ツァーリズムの体制を維持すべき、まさしく基幹的身分が宣伝家の主要部分を構成した事実は確認されてよい。官吏の子弟などもこれら範疇に加え

るべきであろうから、体制の中枢部からその批判者が産出される構図はここでも確認されるのである。雑階級人は少ないのであるが、このことを意外に感じるとすれば、それは社会的身分制度の周縁者の急進化に感情を移入してそれを多分に過大視する結果でもあろう。一方で町人や商人・名誉市民といった都市住民層と農民からかなりの参加があったことは注目される（都市労働者の多くは身分的には農民であった）。これらのことは宣伝が貴族インテリの専売品ではなかったことを示すのである。また、この統計はユダヤ人23人、カフカース人10人、外国人6人を記載し、この宣伝活動が広く帝国内外にまで及んだことを正確に伝えている。

この報告書は容疑者たちの学歴に関してとりわけ詳細に記している。刑事罰相当とされた525人のその内訳は「在学」152人、「中退」117人、「生徒 (uchashchiesia i nedouchivshiesia)」50%（実数は不明）であり、特に152人のうち105人は男子高等教育施設、11人が女子同施設、36人がギムナジアおよび宗教セミナーであって、この部分は大学などの高等教育関係である。その男子105人のうち37人がすでに何度か言及した外科医学アカデミーの学生であって、その突出ぶりは実に顕著なのである。ついでペトロフ農業アカデミー (Petrovskaja zemledel'cheskaja akademiia) が14人、[ペテルブルク]高等技術専門学校 (Tekhnologicheskii institut) が9人である。帝国大学生はあわせて35人で、内訳はペテルブルク12人、ハリコフ9人、キーエフ7人、モスクワ5人、カザンおよびオデッサ各1人とほぼ全国に渡っている。この他、農業高等専門学校、通信技師高等専門学校、ハリコフ獣医高等専門学校が各2人、鉱山高等専門学校、芸術アカデミー、ミハイロフ砲兵学校が各1人である。これら学生たちの大半は自然科学や医学を専攻している。繰り返すが、なかでも付設女子コースにも宣伝家が多かった外科医学アカデミーの存在は注目されるのである（その理由に関して、いまだ個別研究はないであろう）。²⁸⁴⁾

冒頭に掲げた①～③の計1054人が、在学、中退、卒業の別を無視して、関わった教育歴統計に触れると、²⁸⁵⁾「最高学府」32.5%、「中等学校」20.5%、「読み書きできる農民と町人 (gramotnye krest'iane i meshchane)」18%、「婦人学校」6%等となっている。「最高学府」の実数は342人であるが、その内訳は外科医学アカデミー80人、[ペテルブルク]高等技術専門学校49人、ペトロフ農業アカデミー46人、ペテルブルク帝国大学39人と上位をペテルブルクの諸学校が占め、キーエフ、ハリコフそしてモスクワの3帝国大学は20人程である。これらのことから宣伝家の主要部分はペテルブルク所在の高等教育施設の学生であったことが確認されるのである。インテリゲンツィアの本格的な形成

期の1860年代に、大学に若い貴族身分が増加したことに注意を喚起したのは M. コンフィーノであったが、その彼らが宣伝家となったのである。かつて V. S. アントーノフはソヴィエト史学界のいわば総力をあげた労作である革命家略歴集成『ロシアにおける革命運動活動家 (Deiateli revoliutsionnogo dvizheniia v Rossii)』のうち1870年代部分について統計的な処理を試みたことがあったが、それによれば掲載された5600人余りの社会的構成は50%以上が学生であり、知的職業人を含めると60%に上ったのである。そして、学生部分(1414人)だけを所属学校別に見ると、外科医学アカデミーが366人で全体の25.9%を占めて他を圧して第一位であるから、上にみた宣伝家に関する分布状況は大勢をよく反映しているとみてよいのである。²⁸⁶⁾

他方、労働者で宣伝活動に参加した度合いが強い都市はペテルブルクとオデッサであり、モスクワはこの点で後れを取った。²⁸⁷⁾ オデッサの場合はとくに鉄道関係者を指しており、上の「読み書きできる農民」の多くはやはりペテルブルクに居住した工場労働者であったと推定してよいであろう。この報告書から確かめられることは、宣伝家の主力を構成したのはペテルブルクの若いインテリゲンツィアであったが、決して無視できない部分として労働者たちも存在したということである。したがって、宣伝家論の文脈ではまずインテリが、ついで労働者が語られなくてはならないことになるであろう。

おそらく、宣伝家について最も深い分析をした同時代人は自らもそれに従事した体験を有する S. M. クラフチンスキー (Kravchinskii) であろう。しかも筆者の見るところでは、彼の議論は後の、特に欧米の歴史家に多大な影響を与えているのである。クラフチンスキーは1851年7月にポルターヴァ県に軍医の息子として生まれたが、ペテルブルクのミハイロフ砲兵学校在学中に L. E. シシコー (Shishiko) とともに非合法的な文庫を組織した。その後、一時、軍務に就いたり別の学校に入ったりしたが、1872年夏からチャイコフスキー団に加わって、宣伝活動に従事したのである。自ら『カペイカ物語 (Skazka o kopeike)』などの宣伝文書を執筆し、ニーゾフキンのサークルへ赴いて労働者に講義をし、さらに1873年夏にはトヴェーリ県に秘密印刷所を開設しただけでなく、早くも同年11月には D. M. ロガチョーフ (Rogachev) とともに農村に入って農民の間で宣伝した、いわば代表的な宣伝家のひとりであった。²⁸⁸⁾ その著名な回想記『地下ロシア』のなかに、人民に対する宣伝活動に関して次のような記述がある。少し長くなるが、引用したい。

「このような運動は、後にも先にもなかった。プロバガンダというよりは、そこには何か天啓 [otkrovenie]

が作用していたように思われた。初めの時期には、ある一人の人間が、どんな本、あるいは誰の影響から運動に加わっていたかを示すことができるが、のちにはそれは不可能になってしまう。それは、あたかも、どこから湧いてきたかわからぬある力強い叫び声が生ける魂をもつすべての人々に、祖国と人類を救済する偉大な事業へ[参加を]呼びかけながら、ロシア中を疾駆して行ったかようであった。」「この運動は政治的なものとは恐らくいえまい。むしろこの運動は、宗教運動の伝染性のようによいさいを呑み込んでしまう性格を十分にもっていた点で、あたかも十字軍のようなものであった。かれらは、一定の実際的な目的を達成するためだけではなく、それとともに、各人の道徳的浄化をも強く願った。」「1870年代のプロパガンジストたちのタイプは、革命運動によってというよりは、むしろ宗教運動によって歴史の前面へ引き出された人間のそれに属していた。社会主義とはかれらの信仰であり、人民とはかれらの神であった。」²⁸⁹⁾

宣伝活動を天啓として読み替え、その宗教運動的な性格を強調するこの議論はおそらくこの時期の「ヴ・ナロード」運動に特徴的であった全人格的で自己犠牲的な運動への関与を説明するのに適当とみなされたのであろう、その後、広く内外に伝播されることになった。

アクセリロートはこのクラフチンスキーについて次のように述べたといわれる。

「人民のために働こうとするものは、大学をやめ、断固として彼の特権的な条件や家族を放棄し、そして学問や芸術さえもあきらめなくてはならない。彼を社会の上流階級とむすびつけている一切のきずなを断ち切り、背水の陣をしなければならぬ。要するに、どんな可能な避難所をもみずからすすんで捨てなければならぬ。革命の宣伝家は、単にイデオロギーの面だけでなく、日常生活様式でも社会のどん底にいる人々と一体感をもつために、いわば、内面の本質をすっかり変えねばならない。」²⁹⁰⁾

したがって、ここでは革命理論の解析に終始するような議論は排されていて、むしろ宣伝という方法はそれを行う人にとってもそれを受ける人にとっても互いの人間性の本質に何らかの作用を及ぼすはずのものである（及ぼさなくてはならない）とするある種の思い込み（それを教育ということもできようか）さえもが存在したことが主張されているのである。この点を端的に表現したのがフィグネルである。彼女はその回想記で専ら人民にそうした変身を行うべき位

置をあたえて、こう述べる。

「宣言派は、人民とは社会主義の文字をその上に書き連ねなければならない白紙だとみなした。彼らは自分たち自身の理解力の水準にまで知的・道徳的に大衆を引き上げ、自然発生的な運動あるいは組織によって準備された運動が起こった場合に社会主義の原理や理想の実現を完全に保障するような、少数の結束した自覚的分子を人民の間から作り出そうとした。」²⁹¹⁾

ロシア思想史家ヴァリツキのばあい、ロシア人民主義を後進国における民主的インテリの西欧社会主義へのリアクションとみなした上で、「ヴ・ナロード」を論じてそれを農民の社会主義的本能に対するインテリ側のロマンチックな信念の表明であり、宣伝というよりは天啓であるという。この部分は先にみたクラフチンスキーの議論を下敷きに繰り返して新味に乏しいのだが、それよりもむしろ彼の議論で注目されるのは、それを革命の大義の観点からする「教育と科学の価値に対する論争」であるとするいまひとつの理解を示した点にあらう。²⁹²⁾ このわずかばかりの言及を手がかりにして、いま少し議論を深めようとするところに本論の目的のひとつがある。

さて、当該論点に関してすでに熱心に議論したひとりがロシア労働史家ゼルニクである。²⁹³⁾ ロシア革命史において急進派が宗教的信念なしに宗教的熱情を持ったとすれば、人民の宗教性にたいして彼らが差し替えようと仕向けたものが教育であり、科学であった。宗教性と科学ないし教育といった近代性とは急進派その人がたえずバランスをとって勘案すべき二大項目であった（換言すれば、彼らは宗教的な情熱をもって神の代わりに人間の可能性を信じたということであり、科学の発達に根拠づけられた「進歩」を確信したということでもある。彼らが最も合理的と考えた社会主義がこうした非合理的な信念によって支えられていたといえるであろう）。ニヒリストに教師が多かったことはよく知られる通りであり、教育の恩恵を信じることは彼らの綱領の一項に入っていたのである。²⁹⁴⁾ 逆に言えば、このように教育ないし科学にたいして格別の思い込みをなしうるところに彼らの特徴のひとつがあった。その点で彼らは決して単純な近代派ではなく、場合によってはその教育観や科学観は宗教的確信さえ帯びたであろう。農村を離れてようやく都市へと赴いてきた農民＝労働者が彼らの第一の標的となった。そうした労働者自身も世俗と宗教の境界を彷徨いうる新たな都市的環境の中にあった。ゼルニクが具体的に問題としたのは、日曜学校における世俗教育である。このロシア労働史家は長年に渡り日曜学校の存在に気を掛け続けている人であるが、²⁹⁵⁾ ここでは特にロシア技

術協会系学校におけるそれを扱い、教育と宗教に関する企業家たちの価値観を問題として、宗教的リソースを動員することと世俗教育を実施することとは衝突せずにむしろ並列したと主張している。その結果、そこでは宗教的教材を使う読み書き教育や宗教的愛国心の涵養が施されたから、労働者はその協会学校で最も包括的な労働者教育を受けると同時に「組織された宗教」をも体験したというのがとりあえずの結論なのである。このことは当時の「科学と文化」が、そうした意味合いで、宗教的な環境におかれていたこと（あるいは宗教的なあつかいを受けたこと）を物語っている。

さらに関連して、同時代の自らもペテルブルクで労働者工作に携わるなどした革命家チホミーロフの回想は参考になるであろう。彼は当時を回顧して、それは「知識(znanie)」や「科学(nauka)」に名を借りて、社会主義や革命のイデオを執拗に宣伝する「文化的発達(kul'turnoe razvitiye)」の時代、あるいは「科学と革命とが同じものとして語られた幻想(illiuziia, chto nauka i revoliutsiia govoriat odno i tozhe)」の時代であったというのである。²⁹⁶⁾

さて、『処女地』につぎのような表白がある——「まず最初に人民の言葉を習得し、その習慣や風俗を知ることが必要であるといわれている。しかし、そんなことは戯言だ、戯言だ、戯言だ！ 君が話していることを信じるが必要なのだ。好きなように話せばよいのだ！」。²⁹⁷⁾ このように、農民との対話に行き詰まった果てに吐き出された本心はある種の居直りを示すと同時にニヒリズムに大きく傾斜する。この1870年代の革命家は1840年代のニヒリストとはどういう関係に立つのか。前者は人民のために自己犠牲をともなったから、そうではなかった後者とは区別されるとするのが従来の大方の理解であろう。モスクワで1870年代に活動したS. A. ヴィクトローヴァ=ヴァリテル(Viktorova-Val'ter)はわれわれの世界観においてはナロードの理想化(idealizatsiia naroda)が大きな役割を果たしたと回想している。彼女は農村教師として人民のために働くことを生きがいとし、単なる知識の普及を企てるのではなく空虚な頭と心でもって人民に近づくことを悪として、運動における倫理性を大切にしていた人であった。²⁹⁸⁾ ヒングリーなどのように「ニヒリストあるいは革命家として記された者たちは、〈ニヒリスト〉という言葉は反感を、〈革命家〉という言葉は是認を表していたということを除いては、全く同じ人々であった」²⁹⁹⁾として、両者は明確には区別されえないとするのもひとつであろう。しかし、ここでは人民との関係論をつぎのように重視したい。

ナロードの理想化と倫理性の重視は単なる闇雲な信仰告白ではなく、それは「科学的実証主義」の装いを凝らしたものであった。チャイコフスキー団は青年が宗教や倫理が求めていることを正確に感知したのであり、そのためにわ

ざわざ選り出したのがベルビ=フレロフスキーであったことは知られる通りである。彼は団(そして青年)のための倫理学として『社会科学入門』を執筆し、さらに後年には「新しい宗教」と「友愛の宗教」のために『三つの政治体制』を刊行したのである。³⁰⁰⁾ 若者が革命的な倫理学を求めたのに対して、フレロフスキーは科学的な倫理学を差し向けたというのは当時の状況をよく見ない発言である。「ヴ・ナロード」をするさいに、彼らはかならずその「必然性」を「論理的かつ科学的に」強く求めたことは無視し得ない。これは「ヴ・ナロード」運動が「科学と文化」の時代の現象であったことのあらわれ方である。『チャイコフスキー団小史』はこう述べる——

「労働生産物の不平等な分配と労働の資本への奴隷的従属、政治的権利の不平等と人格の権力への奴隷的従属、道徳的規範の形式主義と狭隘さ、家族における不公正と不平等、宗教における虚偽、学問の独占とその売物的性格——こうしたことすべてが、ロシアにおいても、西欧においても、誠実な人間にとっては、あらゆる出生の特権を放棄して、公正と平等と自由を唱導するために人民のなかへ行くことのほかに出口はどこにもないという最終的結論を立証するための論拠の武器庫となしていたのである。」³⁰¹⁾

ここでは「ヴ・ナロード」の「必然性」が近代的な社会科学用語を用いて十分に「論証」されようとしている。社会科学それ自体がある種の宗教であるという立場をとるのでなければ、ナロードニキはその意味で単に素朴な「ナロード信仰」を宗教的な高みにまで押し上げただけの単純な過激派であったのではないといわなくてはならない。

従来の研究史ではこの運動は全体としてそのナイーブさが強調される傾向にあったといえる。³⁰²⁾ このことは革命家の側についても、農民の側についても同様にいわれてきたであろう。ナロードニキについてはその異様なほどの精神的純粋さが指摘され、ムジークについては「わしはミール(共同体)と一心同体だ(Ia ne ot mira proch)」という決まり文句が繰り返されてきた。その結果、たとえば、この宣伝活動の不首尾を農民のせいにするかやそれが全く意味がなく無駄であったがゆえにその後にテロルへと走るようになったとするような解釈が行われもしたのであろう。

3) 宣伝の方法——言語コミュニケーションをめづって

「ヴ・ナロード」の目標地としてとくに沿ヴォルガ地方(Povolzh'e)が選ばれたのにはそれなりの「合理的な理由」があつてのことであった。その一帯にプガチョフ反乱の伝統が生きていたからであろうと考えるのは格段に説得力

があるわけではなく、むしろ革命派が当時、現地で進行していた飢饉に注目したことが重要なのである。それは現体制の欠陥を端的に示すことになるから、それを宣伝に活用しない手はないと考えたのである。そこではサマーラから始まって飢饉各地へと宣伝活動が波及していったのである。³⁰³⁾ しかしながら、こうした「客観的」と思われる事柄が一定の説得力と共感とを同時代の革命的な青年たちだけでなく、後代の研究者にまで与えてしまったこと自体が問題なのである。農民たちにとって飢饉は何年かに一度はかならず訪れる、予期しえて、あり得る事であったのだから、彼らにとってそれは決して「体制の問題」などになるべくもないものであった。

いかに宣伝家たちが村々を走り回ったことか、やはり『処女地』の作家はつぎのように若き宣伝家の「事例」を紹介している——「彼の言葉によると、最近一ヶ月間に11の郡を駆けずり回って、9つの都市 (gorod) と、29の大村 (selo) と、53の小村 (derevnia) と、1つのフートルと、8つの工場 (zavod) を訪ね、16日の間は乾草小屋で夜を過ごし、一夜は馬小屋で、さらに一晩は牛小屋にさえ寝たことがある。……それから土小屋や労働者の宿舍へも潜り込んで、至る所で教えたり、導いたり、小冊子を撒いたり、その場で書きとめたり、最新の記憶法によって暗記したりして瞬く間に情報を集めた。長い手紙を14通、短いのを28通、そしてメモを18通書きあげた。」³⁰⁴⁾

あるいは実際にヴォイナラーリスキー (Voinaral'skii) の場合、彼はサラートフを拠点として「製靴作業場」を開設し、そこには非合法文献、偽文書、偽旅券などを集積した。ここを常住地 (priton) として、「人民の中への探検旅行 (ekskursiia v narod)」に出かけたのである。³⁰⁵⁾

こうした「勤勉さ」は未知の世界に格段の期待と使命をもって分け入った人間にのみ固有な現象であるのかもしれない。「ヴ・ナロード」の初期段階では相似した熱狂が各地ではほぼ等しく観察されたはずであるから、後のひとつともそれを「狂った夏」と呼ぶことを躊躇しなかったであろう。しかしながら、元来、熱狂性は変革運動の戦術論や戦略論には決してなじまないはずのものである。

ナロードニキはこの初期段階の運動の不首尾を総括して、今度は「定着型」を志向したことはよく知られている。しかしながら、問題の所在はそうした運動の形態論ではなく、それよりは遥かに深い次元での人間関係論にあったはずなのである。農民にとってはじめて出会うインテリなどよりも仲間内とみなせる労働者のほうが何かと違和感が少なかったろうと思われるが、これも場合によるであろう。すでに別に見たように、³⁰⁶⁾ とくに中央部ロシアの農村農民は出稼ぎなどで規則正しく都市などとの間を行き来していたから、ナロードニキがその存在に着目したのは自然の

勢いであつたろう。自分が身なりだけでなく技能の面でも労働者に変身するだけでなく、労働者自身を宣伝に活用することが考えられたのである。なかでも、本稿後段で触れるファブリーチヌイエのいわば「農民性」が着目された。あるいは都市に居住する労働者が農村へ移住することも考えられた。そこには労働者にたいするある種の思い入れとそれを媒体とすれば農民を教育することが出来るとする楽観的な見通しがあったはずである。1873年12月、ペテルブルクとトヴェーリ県で行った活動を踏まえて、A. V. ヤー ルツエフは次のような供述をしている。「革命家たちの一人ひとりが労働者たちの中から数名の人たちを選び、彼らに教えなければならず、彼らの間に現在の社会機構にたいする不満を強めてゆき、富の不均衡配分、地主貴族たちや金持ちたちの搾取を指摘しなければなりません。これら数名の人たちが次には他の人たちの間でこのような思想を展開しなければならず、住民の大多数がこのような思想を抱くようになり、その上に、たんなる個人的利害によってではなく導かれるほどに道徳的になるならば、革命は到来するにちがいない。」³⁰⁷⁾ この人がここで述べることは、そうした楽観論の典型である。

都市にあって学生らの宣伝工作を受けて急進化した労働者が仲間内に同調者を見出せずに、農村へ向かったこともあった。例えば、チャイコフスキー団にとって期待された労働者活動家であった G. F. クルイローフ (Krylov) の場合、その勤務先の『マリツェフ繊維工場』で同僚労働者を組織できず、1873年の夏に工場を辞めて農村へ本の行商をする道を選び、彼はその年の暮れまでに故郷のトヴェーリ県に入って宣伝をはじめたのである。³⁰⁸⁾ この場合のように、人間関係が保たれている農村へ入るのは自然であつたろう。もうひとり、やはり後に触れることになるオプノルスキーの場合、1873年の暮れにオデッサを出てほぼ1年後にペテルブルクへ戻ったのだが、その時はすでにチャイコフスキー団は解体してなく首都滞在は何かと危険なので、かつての労働者仲間 P. モナーコフ (Monakov) および学生レヴァシヨフ (Levashov) とモナーコフの故郷であるアルハンゲリスク県へ行き、農村で宣伝をするようになったのである。³⁰⁹⁾ このケースでは都市を回避するために農村が選択されたのであるが、ここでも人間関係が一定の作用をしている。因みに、この学生はペテルブルク大学を学生運動で退学処分となった人で1873年にチャイコフスキー団に接近した経験を有し、この時は人民に対する宣伝に従事することを強く望み、そのために実際に農婦と結婚するまでしている。

正確に言えば、都市労働者は宣伝媒体として肯定的にのみ受け入れられたのではない。クラフチンスキーのように、都市労働者が都市生活にスポイルされていて学生たちの話

を聞かないことを嘆くむきもあった。³¹⁰⁾ 話をもう一歩進めれば、M. A. オルローフ (Orlov) のように、人民の中に入る者はいるにはいたが、概してザヴォツキエはファブリーチヌイエほどにはその呼びかけに乗ることはなかったという論者もいるのである。³¹¹⁾ この場合は、都市労働者の工作に行き詰まり都市で打つ手がなくなって、農村に向かわざるをえないといった消極的な動機付けも想定しうることになる。かつてのマッキンゼイの「ヴ・ナロード」論はこうした側面を強調する立場にあった。³¹²⁾

モスクワを主たる活動領域とした M. フロレンコの場合、農民に近づくには都市労働者の手を借りた方がうまく行くと考えて労働者を宣伝した。しかしながら、その労働者たちは読み書きを習得し社会問題に関心を示すのだが、どうしても自らが宣伝のために村に行くとは言わないので、彼自身が出かける覚悟をして指物の技を習うまでするのである。³¹³⁾ このケースは革命家の労働者にたいする思い入れが見事に裏切られたことを示している。モスクワでのことであるから、彼が相手したのは通例ならば繊維労働者であった可能性が高い。つまり、彼らは、その後とくにマルクス派の思想家や革命家によって意識的に「低く」扱われることになるファブリーチヌイエに一絡げにされた部分であるが、フロレンコの体験は、可能性の問題として、これら労働者のなかにも自律した精神を保持する者たちが出現しつつあることを示している。

ここで、宣伝の方法について、もう一歩立ち入ってみたい。『処女地』からの引用を続ける。

「すっかりまいった!!」猛烈な口調でマルケーロフはいった。「どんなにあの連中[農民たちをさす]に分かるように説明してやったって、何ひとつ理解できないんだ。——そして命令も実行しやしない。……ロシア語さえ分からないんだ。——『地所(uchastok)』という言葉はよく知っている。しかし、『参加(uchastie)』となると、……参加って何ですか? 分からないんだよ! だって、これだってロシア語じゃないか、くそつたれ。僕が地所を彼らにやりたがってると思い込んでるのだ!」³¹⁴⁾

これはナロードニキが繰り出す都市の「進んだ」言語体系がはじめての試練に出会う場面である。まず、誤解があってはならないのは、こうした言語コミュニケーションの不成立はただ単に農民側の無教養さのみを示す訳ではないということである。都市側の人間たちが自分が操る言語に普遍性があることを信じて疑わない点も問題なのである。改めて付言するまでもなく、農民たちは生活するに必要十分な言語体系を駆使しつつ独自の渡世法を何世代にも渡って

実践してきたのだから、それに不必要な用語にたいしては拒否反応や理解不能を引き起こすのは自然なことであろう。この点で、フィグネルは引用する価値がある。彼女は言う——「口に出して言うのも恥ずかしいことだが、私たちにとっては当然のことと思われ、常識的と呼ばれるにちがいないような生活が、農村においては突拍子もない、耐えがたい不協和音だったのだ」。³¹⁵⁾ フィグネルは、ほとんど確実に、両者の間に横たわる言語問題をはじめとして価値観あるいは人生観の相違に気付いている。彼女は事態を相対化する能力を備えた人である。しかし、「ヴ・ナロード」の失敗因を「非抑圧者の未発達と当方の側の社会的な無為性(shalopaistvo)」にひたすら求め、それらを克服するために農村に居住して、「強固な組織を作りあげ」なくてはならないといった反省の弁を別に聞くと、³¹⁶⁾ そして運動に熱心な人ほどこうした発言をする傾向にあることに気付くとき、そこはかたない虚しさとともにその頑なな対応にある種の宗教性をやはり感じざるをえないのかもしれない。近代ロシアの革命派一般が展望しようとした「ブルジョア民主主義」はこの局面を突き抜けた先に想定された世界であるが、そこにいたる道程にはかくも超えがたき「良心的な」偏見が横たわっていたのである。

民衆の言語を知っていることは、したがって、民衆なしには何もできないナロードニキにとり、みずからの革命家としての資質を問われかねない試金石のひとつとなった。それ故に、自らはログアチョーフとともに最も勤勉に「ヴ・ナロード」したにもかかわらず、クラフチンスキーはクレーメンツにその才を認めて彼を「宣伝家の華」と高く評価したのである。外科医学アカデミー5年生の時に「ヴ・ナロード」を試みようとして、アプテークマンは自分がユダヤ人であることから一旦は躊躇したが、ロシア人が民族および宗教の関係において最も寛容であること、そして何よりも自分が人民との会話に長けていることを励みとしてそれに踏み切ったのである。³¹⁷⁾ しかしながら、農民たちは教育ある人間が好む服装を「ドイツ人の身なり」などと呼んで、そうした恰好の者に対する不信感を顕わにしていたのだから、³¹⁸⁾ 内面にまで及ぶような深い付き合いをするには当初から格段の困難が予想されたのである。

ひとまず宣伝の方法として確認されていたのは、例えば、1875年2月付の「全ロシア社会革命組織規約(Ustav Vserossiiskoi sotsial'no-revoliutsionnoi organizatsii)」が示す次のようなものであった。この組織はモスクワで形成されたもので、カフカース人サークルや女性サークル「フリッチ」のメンバーらが中心になっていたが(「50人裁判」にかけられたのが彼らである)、前年の「ヴ・ナロード」運動の苦い体験を受けて作成されたものであるから、その内容はそれなりの見直しをとまなう確信をえたものと判断して

よいであろう。そこで触れられた「宣伝にさいしての最重要な一連の方法」とは、①平易な会話をするように努める、②宣伝家が必要と認める小冊子の朗読する、③「問題の」喚起 (vozбуzhdenie) を行う、④緩い団結 (splachivanie) を図る、⑤組織本体の外部に組織的なサークルを創出する、⑥組織はその構成員がつくるサークルに金庫、文庫を設立する義務を負わす、⑦労働者の間で生活する構成員は彼らが組織したサークルの集会在居住地で行われるよう努める、ことであった。³¹⁹⁾ これらの方法は必ずしも同じレベルのものが列挙されている訳ではない。宣伝のための手段と目的が混在している。組織的にはサークルが重視されているが、ここでまず問題としたいのは、①や②に示された情報伝達方法についてである。

人民はリテラシイに欠けるのが通例であったから、「私は口頭の宣伝だけを人民の間では好適なものと考えていました」³²⁰⁾とペテルブルクで「サマーラ人」サークルの中心人物として宣伝活動に熱心に従事した L. S. ゴロデツキーがいうのは頷けるであろう。「ヴ・ナロード」運動の全面的展開の前夜に用意された、1874年3月15日の日付がある『革命家 — 宣伝家は人民と何についてどのように語らなければならないか』と題した匿名の文書には、ukazhit', skazhit', govorit', rasskazyvat', peregat' など「語る」ことを含意する動詞がふんだんに踊っている。³²¹⁾ それはツァーリの無制限な専横をはじめとする今の苦しみが由来する根源を説き起こして、ロシア農民の意識の奥深くに密かに伝承される抑圧者に対する抵抗と革命的伝統とへ思いを馳せらせることを目標としている。整理してみると、ここで注目すべきはさしあたり次の三点であろう。つまり、①人民に対して説明可能であると考えること、②人民の中にそうした「伝統 (traditsiia)」あると見なすこと、③それ以上の働きかけを迫及しないことである。

出発点の①について。宣伝にあたって言語が最も重視されるのはなかば当然であろう。クラフチンスキーは回想記でこう述べている。「この〔農民暴動の〕接近を予見している人たちにとっては、運動に自覚的な要素を注ぎ込むことができるような要員 (カードル) を養成する仕事だけが残されている。それゆえ、われわれの時代のスローガンは言葉 (slovo) である。プロパガンダ — インテリゲンツィアの間でのプロパガンダ、都市労働者の間でのプロパガンダ、軍隊での、そして、すでに自分たちの知識階級を持つようになってきた農民たちの間でのプロパガンダ、等々である。」(下線強調=引用者)³²²⁾ 宣伝家が「語り」、「話す」ことが農民側に正確に伝わるにはそこで使用される語彙を双方が一致してひとしく理解することが前提となる。その際、言い回しや表現法も大切な要素であろう。

しかしながら、都市で高等教育を受け、外国語を理解で

きる人たちが駆使する言語は、教育とは無縁の農村でいわゆる「方言」の世界に生きてきた人たちが使う言語とは自ずからそれらの面で相違したと考えなくてはならない。E. ヴレシコフスカヤ (Vreshkovskaia) は1873年の夏、100日ほどであったが、人民の中で暮らした体験をもつが、それを回想して、「ただの人 (prostoi narod)」がやるとおりの生活をしようとしたが、人民の言葉はとうてい真似ることは出来ず、時々「きれいに人民的な表現 (chisto narodnye vyrazheniia)」を使うだけで精一杯であったという。³²³⁾ 繰り返すが、クラフチンスキーはドミトリー・クレーメンツが宣伝家として最も卓越していたのは彼が「民衆の言葉をクルイローフ [19世紀前半の寓話作家] のように素晴らしくよく知っていた」³²⁴⁾ からだというのである。また、すでに引用した回想記においてチホミーロフはモスクワの労働者アルテリを訪問した際に、そこの労働者が大変冷静に対応したこと、かつてネチャーエフ派学生の宣伝を受けた労働者が「余りにも立派な標準語的な言葉で」(prekrasnym literaturnym iazykom) 話したことを印象的に語っている。³²⁵⁾ 彼はこのアルテリ体験はすべてが「普通でなかった (neobychno)」というから、通例ならば (モスクワの) 労働者は農民と等しく無学であるはずなのに、どうしてこのような立ち居振る舞いができるのか不思議に思ったということであろう。つまり、通じるはずがない話を通じたことに驚いたのである。このことは彼が人民に対するインテリ特有の偏見の所有者であり、農民とは本来、通信不可能であると信じていたことを示している。M. フロレンコはこう回想している。「農民が理解しうる言葉で私たちは話すことはできない。おそらく、農民は赤の他人 (chzhoi) の言うことなどを信じはしないであろう。しかし、労働者は別だ。彼らは村では〔農民にとって〕身内 (svoi chelovek) なのだから。」³²⁶⁾ このように、運動論のレベルにおいて、言語が決定的な位置を占めたということである。

たしかに、この問題は長い間、近代ロシアのインテリゲンツィアを悩ましつづけたのであった。例えば、イヴァーノフ=ラズムニクの場合、1906年に『ロシアの富』誌に掲載した「農村は何を考えているか？」と題した論考で、五年革命ではインテリゲンツィアがナロードのために語ってきた理論的命題が点検された。ナロードは19世紀ロシア・インテリの言葉で語ったか？ 双方は通じ合えぬ言葉で語っているではないか？ と改めて問題提起したのであった。³²⁷⁾ もっとも彼のばあい [も]、ナロードの「創造的精神の力」がインテリゲンツィアを乗り越えうると倫理的側面を重視することで、この難題の「解決」を夢想したのであったが……。

このように見れば、ロシアの革命的なインテリゲンツィアは使用する言語にたいして敏感であったといえる。しか

し、後日、クラフチンスキーは『ヴ・ナロード』の巡礼は言葉の威力(mogushchest' slova)の経験であり、その英雄主義は驚嘆すべきものであった。いまや、これとは反対の道——すなわち実行の道(put' dela)を体験すべきであった³²⁸⁾といわなくてはならなかった。つまり、彼が推奨したのは、言語を用いないで済む農民間の煽動、蜂起をめざす反乱(ブンタリー[buntar'])や公然と広場へと出るデモである。彼によって「言語の威力」は期待した果実を何ら生み出さないものとして、総括され、直接行動によって取って代わられた。

さて、早くも1873年夏の段階で「ヴ・ナロード」を試みたいいわゆるドルグーシン団(Kruzhok Dolrushintsev)は『ロシア人民へ(K russkomu narodu)』と『インテリの人たちへ(K intelligentnym liudiam)』と題したふたつの檄文を出したのだが、これらは用語法で著しい差異を見せたことで印象的であった。前者はかなり平易な言葉で書かれており、革命綱領的な性格の諸要求(オブローク・徴兵・旅券の廃止、土地の全面的再分割、学校改革、政府にたいする人民統制)を列挙しているが、全体はほとんど宗教的で福音書的なトーンで貫かれていた。そうすることが人民にとり理解しやすいと判断されたからであろう。一方、後者は「現在の秩序が極めて非正常であることをよく理解しているインテリの人たちよ、私たちはあなた方にむかって人民の中へ行くことを呼びかける。より良い社会制度のために人民を抵抗へと駆り立てよ」というが、その語り口は決して福音書的な調子ではなく、あたかも切断用ダイヤモンドによって切り開かれたように鋭く明晰であった。³²⁹⁾彼らがこのように檄文の用語法を意識的に相違させたことはインテリ世界の言語は人民にとり理解不能であると予見していたこと、だが何とか工夫を凝らせば通信できる「はず」と考えていたことを示しているであろう。

D. L. パール(Pearl)は1870年代末から1880年代初頭にかけてペテルブルクで展開された「労働者教育」を論じるなかで、労働者向きに当時発刊された二紙(『穀物[Zerno)』と『労働者新聞[Rabochaia gazeta]』。ただし、これらは新聞といっても名ばかりで小冊子と考えたほうがよい代物である)によく掲載された会話調の文体を問題として(40歳ほどのベテラン労働者と同郷から上京したばかりの20歳ほどの若者の会話などが多い事例)、そこで使用された「煽動的な語り(agritatsionnyi rasskaz)」といわれた文語形態に注目している。³³⁰⁾ここでいわれる「煽動的な語り」とは人民向けの物語に親しんでいた労働者の言語であったから、いってみればインテリと農民との「中間地帯」に独特な言語世界が生まれつつあったことがうかがわれるのである。[未完]

注

- 1) B. Mironov, *A Social History of Imperial Russia, 1700-1917*, vol.1, Colorado, 2000, Ch.7. これは前年に刊行されたロシア語版(B. N. Mironov, *Sotsial'naia Istoriia Rossii perioda Imperii*[XVIII-nachalo XX v.], v dvukh tomakh, S.-Peterburg, 1999)の英語版であり、ロシア教育史家 Ben Eklöf が英訳を統括するだけでなく、内容的にも著者と合意して、変更(改良)している部分がある。ここでは英語版に依拠する。
- 2) N. V. Riasanovsky, The Problem of the Peasant, in W. S. Vucinich (ed.), *The Peasant in Nineteenth-Century Russia*, Stanford University Press, 1968, 263.
- 3) V. Semenov-Tian-Shanskii, Gorod i derevnia v Evropeiskoi Rossii, *Zapiski imperatorskogo russkogo geograficheskogo obshchestva po otdeleniiu statistiki*, t. X, vyp. 2, SPb., 1910, 54-55, 87-88, 193-194.
- 4) N. A. Rozhkov, Gorod i derevnia v Russkoi istorii, izd. 3-e, SPb., 1913 [The Hague, reprinted edition, 1967], 120-123.
- 5) S. P. Frank and M. D. Steinberg (eds.), *Cultures in Flux; Lower-class values, Practices, and Resistance in Late Imperial Russia*, Princeton U. P., 1994.
- 6) Provintsial'yi gorod: kul'turnye traditsii, istoriia i sovremennost', M., 2000, 4, 11.
- 7) Russkaia provintsia: mif-tekst-real'nost', M.-SPb., 2000.
- 8) さらに近年は「地域(region)」研究が開始されたことにも触れるべきであろう。それは地域の史的発展のパターンの析出をめざし、何よりも地域の居住と開発の型(tip zaseleniia i osvoeniia regiona)を重視してその歴史的・政治的・文化的な「ポートレート」を描こうとするものである。Sm. G. Liukhterkhandt i dr.(red.), *Politika i kul'tura v rossiiskoi provintsii*, M.-SPb., 2001.
- 9) 坂内徳明「アレクサンドル・ラヂーシチェフ『ペテルブルグからモスクワへの旅』の時代」『一橋大学研究年報 人文科学研究』38号, 2001年, 225-226, 235, 268頁。
- 10) さしあたり、1870年法については、G. I. Shreider, Gorod i gorodovoe polozhenie 1870 goda, v kn.: *Istoriia Rossii v XIX v.*, [SPb., b.g.], t. 4, 1-29. 1892年法については、Ego zhe, Gorodskaiia kontr'-reforma 11 iunია 1892 g., v kn.: *Istoriia Rossii v XIX v.*, [SPb., b.g.], t. 5, 181-228. を参照。
- 11) Vera Tolz, *Russia (the Inventing the Nation series)*, Oxford U. P., 2001, 33.
- 12) ロシア「地方都市」のタイポロジーが論じられる時、さらにその人口の少なさ(5000~1万人が平均的)と「工場村」的存在が触れられるのが通例であろう。例えば、次を参照。L. V. Koshman, K voprosu o tipologii russkogo provintsial'nogo goroda (XVIII-XIX vv.), v kn.: *Provintsial'nyi gorod*, 10.
- 13) Mironov, *op. cit.*, 429, 436.
- 14) さらに次を見よ。E. W. Clowes, S. D. Kassow, and J. L. West (eds.), *Between Tsar and People: Educated Society and the Quest for Public Identity in Late Imperial Russia*, Princeton, 1991, 3-14.
- 15) ミローノフは別稿において、この点を強調する傾向にある。B. N. Mironov, Peasant popular culture and the origins of Soviet Authoritarianism, in S. P. Frank and M. D. Steinberg (eds.), *op. cit.*, 54-73. 彼はロシアにおける改革の悲劇を社会の広範な層がその必要を感じる以前に、上から試みられたこと、そしてその急進的・構造的な改革が農民生活の基盤と衝突したこと、つまり習慣が法律以上に強力であったことに求めている。
- 16) Mironov, *op. cit.*, 484.
- 17) V. Tolz, *op. cit.*, 174.
- 18) 上でロスシタインの議論に触れたが、従来、概して欧米史学界は、ロシア(ソヴィエト)史学界に比して、この視点を強調する傾向にあるといえる。J. von Geldern, *Life In-Between: Migration and Popular Culture in Late Imperial Russia*,

- Russian Review*, v. 55, July 1996, 365-383はそのほんの一例にすぎないが、やはりチャストウーシカを手掛かりにして都市民の農村観と農民の都市観の関連性を探っている。もうひとつ、エンゲルは農民が都市にいる人たちが自分たちとは異なるモラリティーを持っているのではないかと思っていたことを問題にしている。B. A. Engel, *Russian Peasant Views of City Life*, *Slavic Review*, v. 52, no. 3, Fall 1993, 446-459. ロシア側の「一方的な」視角についても一例を示さなければならない。本文でも触れるアプテークマンの場合、その著名な回想記でこの「大改革期」に都市と農村が再び完全に新しい関係におかれたこと、都市が農村を引き付ける中心となったこと、その結果、農村は以前からの孤立性 (obosoblennost') を徐々に失っていったことなどを述べている。O. V. Aptekman, *Obschestvo "Zemlia i Volia" 70-kh, po lichnym vospominaniyam*, 2-e izd., Petrograd, 1924, 24-25.
- 19) Mironov, *op. cit.*, 467-471.
 - 20) *Ibid.*, 470.
 - 21) 高田和夫「近代ロシアにおける資本家の社会的位置 — 1905年のモスクワ資本改革派をめぐる —」『スラヴ研究』39号, 1992年, 39-72頁.
 - 22) M. Confino, *On Intellectuals and Intellectual Traditions in Eighteenth- and Nineteenth-Century Russia*, *Daedalus*, 101, Spring 1972, 117-149.
 - 23) 分かり切った話であるが、この時期にナロードとの連帯を志向したのは急進的なナロードニキ＝革命家に限られたわけではない。いわゆるリベラルや保守派の中にもそれを模索する動きが顕著であったのだが、帝政ロシアに出現したこのあたかも国民国家形成的ベクトルに関しては本論では本格的に論じることはいない。
 - 24) L. M. Kleinborg, *Russkii Chitatei'-Rabochii*, L., 1925.
 - 25) E. R. Ol'khovskii, *Formirovanie rabocheho intelligentsii v Rossii v kontse XIX-nachale XX v.*, v kn.: *Rabochie i intelligentsia Rossii v epokhu reform i revoliutsii 1861-fevral'* 1917 g., SPb., 1997, 77.
 - 26) E. V. Soboleva, *Organizatsiia nauki v poreformennoi Rossii*, L., 1983, 20.
 - 27) N. V. Shelgunov, *Vospominaniia*, M.-Ptg., 1923, 82.
 - 28) A. Vucinich, *Science in Russian Culture, 1861-1917*, Stanford University Press, 1970.
 - 29) 梶雅範『メンデレーエフの周期律発見』北海道大学図書刊行会, 1997年, 27頁.
 - 30) 同所.
 - 31) Vucinich, *op. cit.*, 7.
 - 32) *Ibid.*, 16.
 - 33) 高田和夫「近代ロシアの労働者教育」『社会科学論集』[九大] 28号, 1988年, 特に第一節を参照してほしい。
 - 34) J. C. McClelland, *Autocrats and Academics Education, Culture and Society in Tsarist Russia*, The University of Chicago Press, 1979, 17-9.
 - 35) アンナ・ドストエフスカヤ (松下裕訳)『回想のドストエフスキー』1, みすず書房, 1999年, 12頁.
 - 36) Vucinich, *op. cit.*, 51.
 - 37) E. V. Soboleva, *Ukaz. soch.*, 29-30.
 - 38) 人民読書会については、とりあえず高田和夫「ロシア農民とリテラシー」『法政研究』[九大]第62巻第1号, 1995年の第8節を見てほしい。
 - 39) R. G. Eimontova, *Idei prosveshcheniia v obnovliaiushcheisia Rossii (50-60-e gody XIX veka)*, M., 1998, 108.
 - 40) S. P. Frank, *Confronting the domestic other: Rural popular culture and its enemies in Fin-de-Siècle Russia*, in S. P. Frank and M. D. Steinberg (eds.), *op. cit.*, 74-107.
 - 41) この点について、さらに高田和夫「近代ロシアにおける改革に関する一考察」『法政研究』[九大]第63巻第3/4号, 1997年を参照してほしい。
 - 42) ロシア語で「啓蒙」に相当するのは *prosveshchenie* と *prosvetitel'stvo* であるが、ここでいう行為そのものを表現するのはふつうは後者である。しかしながら、双方を区別しない用語法が見られたのがこの時期に特徴的なことであろう。この点に関しては、次を参考。R. G. Eimontova, *Ukaz. soch.*, 46-47. 例えば、次の作品はロシア啓蒙史のあり方が従来、労働者による啓蒙の実を評価して、専制が果たした役割を否定し、さらに政府とブルジョアジーによる試みを反動として一蹴してきたと総括し、その上で革命前ロシアの「文化的ポテンシャル (kul'turnyi potentsial) をとくに都市のそれに着目し協調する立場 (文化啓蒙におけるイニシアチヴの公私二元性) にある。これは最近のロシアにおける研究動向に反映するひとつであろう。T. A. Parkhomenko, *Kul'tura Rossii i prosveshcheniia naroda*, M., 2001.
 - 43) V. R. Leikina-Svirskaiia, *Intelligentsiia v Rossii vo vtoroi polovine XIX veka*, M., 1971, 261.
 - 44) 例えば、ロシアに電話が出現したのは1880年代であったが、それは当初は都市内部の利用に限定されたものであった。ペテルブルク＝モスクワ間でそのサービスが開始されたのはようやく1899年からのことである。Entsiklopedicheskii slovar', t. 54, SPb., 1899, 370-371.
 - 45) アンナ・ドストエフスカヤ, 前掲書, 55, 185-6頁.
 - 46) 高田前掲「ロシア農民とリテラシー」。全体をみてほしいが、とくには56頁.
 - 47) Leikina-Svirskaiia, *Ukaz. soch.*, 270.
 - 48) 「ポルターヴァ・サークル (Poltavskii kruzhok)」の活動については、次を見よ。G. E. Zhurakovskii, *Iz istorii prosveshcheniia v dorevoliutsionnoi Rossii*, M., 1978, 100-130.
 - 49) M. Stuart, 'The Ennobling Illusion': The Public Library Movement in Late Imperial Russia, *Slavonic and East European Review*, v. 76, no. 3, July 1998, 408-409.
 - 50) B. Anderson, *Imagined Communities, Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, L., 1983.
 - 51) 『国民読書 (Narodnoe Chtenie)』(1858～62年。年に3冊, P. ネポリシン, S. マクシーモフ, N. ウスペンスキーといった人民教育に熱心な者が協力), 『国民談話 (Narodnaia Beseda)』(1862～67年。年に6冊, A. F. ポゴスキーが編集。農業や小営業の実用的情報, 科学と経営の各分野), 『国民新聞 (Narodnaia Gazeta)』(1863年ペテルブルクで創刊, 68～69年モスクワで発行された日刊紙。編集＝発行人はI. クシネリョーフ。「身分や地位にかかわらず、あらゆるロシア人」を対象とする), 『国民児童図書館 (Narodnaia i detskaia biblioteka)』(月間の図書雑誌。I. Iu. ネクラソフが編集し, モスクワの「良書普及協会」が発行。1879～80年), 『国民の富 (Narodnoe Bogatstvo)』(ペテルブルクで1862～63年に発行された日刊の政治経済および文学新聞。編集発行人はI. パラビン), 『国民小営業新聞 (Narodnaia remeslennaia gazeta)』(モスクワで1871～77年, 月に2～4回発行。73年から『小営業新聞』と改称。編集発行人はN. F. サヴィチ), 『国民法律家 (Narodnyi Zakonoved)』(1871～73年, ペテルブルクで発行された週刊誌。編集者N. オルフェリエフ), 『国民学校 (Narodnaia shkola)』(1869～89年, ペテルブルクで月に2回出された教育雑誌。編集者はF. メドニコフ, A. ピャトコフスキーら)。これらはEntsiklopedicheskii slovar', t. XX^A, SPb., 1897が所収した事項である。
 - 52) Kh. S. Bulatsev, *Pionery provintsial'noi pechati (pervye shagi demokraticeskoi pressy rossiiskoi provintsii vtoroi polovine XIX v.)*, L., 1981, 5, 8, 81, 135.
 - 53) P. クロボトキン [高杉一郎訳]『ロシア文学の理想と現実』下, 岩波文庫, 1985年, 150頁.
 - 54) 同153頁.
 - 55) 同上7章を参照。

- 56) 正確に言えば、この協会は設立とほとんど同時に「ロシア的なものすべて」の情報を収集するために、1847年に N. I. ナジェジデン (Nadezhdin) が作成した民族誌情報収集計画7000部を全県下に配布している。L. S. Borg, *Vsesoiuznoe Geograficheskoe Obshchestvo za sto let*, M.-L., 1946, 146.
- 57) A. A. Pypin, *Istoriia russkoi etnografii*, t. 2, SPb., 1891, 336.
- 58) Vera Tolz, *op. cit.*, 199. 1872年、「南西」支部として復活する。
- 59) 高橋一彦「近代ロシア法学史序説」『研究年報』[神戸市外国語大学]36号, 1999年, 48頁。
- 60) A. A. Pypin, *Ukaz. soch.*, 336.
- 61) S. A. Tokarev, *Istoriia russkoi etonografii*, M., 1966, 290-91. さらに Leikina-Svirskaiia, *Ukaz. soch.*, 244.
- 62) V. I. Semevskii, *Ne pora-li napicat' istoriiu krest'ian v Rossii? Russkaia Mysl'*, 1881, kn. 2, 215-265. 土肥恒之「なぜ農民の歴史を学ぶのか」『一橋論叢』第103巻第4号も参照。
- 63) V. I. Semevskii, *Ukaz. stat'ia*, 223.
- 64) 調査結果の一部は, B. M. Firsov, I. G. Kiseleva (avtory-sostaviteli), *Byt vekikorusskikh krest'ian-zemleposhtsev, Opisanie materialov etnograficheskogo biuro kniazia V. N. Tenisheva (na primere Vladimirskoi gubernii)*, SPb., 1993. さらに次を参照。B. M. Firsov, *Teoreticheskie vzgliady B. N. Tenisheva, Sovetskaia Etonografiia*, 1988, no. 3, 15-27. Ego zhe, "Krest'ianskaia" Programma V. N. Tenisheva i nekotorye rezul'taty ee realizatsii, *Sovetskaia Etonografiia*, 1988, no. 4, 38-49.
- 65) たとえば, 1878 g. Programma dlia izucheniiia naroda, v kn.: S. N. Volk (red.), *Arhiv "Zemli i Voli" i "Narodnoi Voli"*, M., 1930, 290-306. Programma dlia sobraniia svedenii v provintsii, v kn.: A. V. Iakimova-Dikovskaia i dr. (pod red.), *Narodvol'tsy posle 1-go marte 1881 goda*, M., 1928, 165-167.
- 66) N. S. Rusanov, *Iz moikh vospominanii*, Berlin, 1923, 114.
- 67) Tokarev, *Ukaz. soch.*, 285.
- 68) スラヴ人大会については、まず次を参照。Vserossiiskaia etnograficheskaia vystavka i Slavianskii c'ezd v mae 1876 goda, M., 1867. さらに、高田和夫「ロシア・ナショナリズム論ノート」『比較社会文化』[九大]5号, 1999年も見てもいい。
- 69) A. A. Pypin, *Ukaz. soch.*, 313-314.
- 70) Tam zhe, 306.
- 71) S. A. Tokarev, *Ukaz. soch.*, 312.
- 72) 伊藤秀一「中央アジアにおけるロシア人の統治 [I] — パレン伯の勅命査察報告を中心に —」『研究紀要』[日本大学文学部人文科学研究所]57号, 1999年, 18-19頁。
- 73) E. A. Lazarevich, *S Vekom naravne, Populiarizatsiia nauki v Rossii*, Kniga, Gazeta, Zhurnal, M., 1984, 166. 念のために言えば、パーヴレンコは『著名人の生涯 (Zhizn' zamechatel'nykh liudei)』の伝記シリーズで20点の伝記を刊行し、1899年には一巻本の『百科事典』で評判をとった人である。
- 74) Leikina-Svirskaiia, *Ukaz. soch.*, 5.
- 75) *Vospominaniia L'va Tikhomirova*, M.-L., 1927, 60.
- 76) G. V. Plekhanov, *Russkii rabochii v revoliutsionnom dvizhenii (po lichnom vospominaniiam)*, *Sobranie sochinenii*, t. 3, M.-L., 1923, 132.
- 77) Leikina-Svirskaiia, *Ukaz. soch.*, 5.
- 78) R. Pipes (ed.), *The Russian Intelligentsia*, Columbia University Press, 1960, 32.
- 79) 坂内徳明「アレクサンドル・ラヂーシチェフ『ペテルブルグからモスクワへの旅』の時代」, 259頁。
- 80) M. Confino, *op. cit.*, 118.
- 81) パイプスは1849年2月の独逸の革命議会で社会グループをさすものとして使われた *die Intelligenz* が1860年代にロシア語に取り入れられ、70年代までにそれは広範な政論を巻き起こす慣用語になったという。R. Pipes, *Russia under the Old Regime*, N. Y., 1974, 251.
- 82) *Ibid.*, 130.
- 83) R. Stites, *Women and the Russian Intelligentsia*, in D. Atkinson et al (eds.), *Women in Russia*, The Harvester Press, 1978, 48, 53. R. Pipes, *op. cit.*, 135を参照。
- 84) A. P. Pollard, *The Russian Intelligentsia; the mind of Russia, California Slavic Studies*, v. 3 (1964), 11, 19.
- 85) R. Pipes (ed.), *op. cit.*, 48.
- 86) P. B. Struve, *Intelligentsiia i revoliutsiia*, v kn.: Vekhi, *Intelligentsiia v Rossii, 1909-1910*. M., 1991, 139, 142. ストルーヴェ「インテリゲンツィアと革命」, 『道標』, 現代企画室, 1991年, 178, 182頁。
- 87) M. Confino, *op. cit.*, 138.
- 88) H. D. Balzer (ed.), *Russian's Missing Middle Class, The Professions in Russian History*, N. Y., 1996, 11.
- 89) Vucinich, *op. cit.*, 67-68.
- 90) J. C. McClelland, *op. cit.*, 61.
- 91) *Ibid.*, 25.
- 92) *Ibid.*, 82 以下に紹介されている、すでに1860年代末から光合成で国際的な評価を得ていた K. A. チミリャーゼフの科学観を参照せよ。純粋科学研究が専制批判に結びつく（つかざるをえない）ことが示されている。
- 93) *Ibid.*, 60.
- 94) G. I. Shchetinina, *Universitety v Rossii i Ustav 1884 goda*, M., 1976, 71.
- 95) Soboleva, *Ukaz. soch.*, 109.
- 96) Tam zhe, 116-124.
- 97) Tam zhe, 127, 170. J. C. McClelland, *op. cit.*, 9.
- 98) C. Johanson, *Autocratic Politics, Public Opinion, and Women's Medical Education During the Reign of Alexander II, 1855-1881*, *Slavic Review*, v. 38, no. 3, September 1979, 426, 433-435.
- 99) H. D. Balzer, *op. cit.*, 12.
- 100) *Ibid.*, 58.
- 101) Soboleva, *Ukaz. soch.*, 42. 渡辺正雄は、西欧で「サイエンティスト」なる用語（造語）が登場したのは19世紀半ばであり、職業的専門家としての「科学者」の誕生をそのあたりに認めているから、ロシアが格段に「遅れた」わけではないであろう。渡辺『文化としての近代科学』講談社, 2000年, 346-7頁。
- 102) G. Fischer, *Russian Liberalism, From Gentry to Intelligentsia*, Harvard University Press, 1958, 60.
- 103) L. D. Briukhatov, *Znachenie "tret'ego elementa" v zhizni zemstva*, v kn.: *Iubileinyi Zemskii Sbornik*, SPb., 1914, 187-188. Kn. Dm. Shakhovskoi, *Politicheskie techeniia v russkom zemstve*, v toi knige, 447 i sl. N. M. Pirumova, *Intelligentsiia i ee pol' v obshchestvennoi bor'be go nachala XX v.*, M., 1986, 63.
- 104) R. Pipes, *op. cit.*, 262-265.
- 105) *obshchestvennost'* という用語も理解がなかなか困難である。本文で「進歩的社会」としたのは、それを急進的なインテリゲンツィアとほとんど同義とみなしてのことであるが、これ以外にも、より広く社会に生活する人々によって発達させられた社会的な連帯性や特有な性質をさす場合もある。次を参照のこと。C. Kelly and D. Shepherd (eds.), *Constructing Russian Culture in the Age of Revolution: 1881-1940*, Oxford University Press, 1998, 26-27.
- 106) H. D. Balzer, *op. cit.*, 12.
- 107) O. V. Aptekman, *Ukaz. soch.*, 35.
- 108) N. M. Pirumova, *Ukaz. soch.*, 171.
- 109) A. V. Mez'er, *Slovar' russkikh tsenzorov, materialy k bibliografii po istorii russkikh tsenzorov*, M., 2000, 51-52.
- 110) Leikina-Svirskaiia, *Ukaz. soch.*, 226.
- 111) E. Ambler, *Russian Journalism and Politics 1861-1881*, De-

- troit, 1972, 74.
- 112) Leikina-Svirskaja, Ukaz. soch., 226, 228.
- 113) 高田和夫「ロシア農民とリテラシイ」, 41頁. この論点に関連してわずかに言及すれば, 各地に点在した地主屋敷(ウサーヂバ usad'ba)で何が行われ何が起きていたのかは近年, 研究者の関心を改めて集めている論点である. その好例として, 次を参照のこと. Dvarianskaia i kupecheskaia sel'skaia usad'ba v Rossii XVI-XX vv. Istoricheskie ocherki, M., 2001. 坂内徳明も前掲論文においてウサーヂバの存在に注目している.
- 114) Starik [S.F.Kovalik], Dvizhenie semideiatykh godov po Bol'shomu protsessu (193-kh), Byloe, 1906, no. 10, 4, 5, 13.
- 115) Entsiklopedicheskii slovar', t. 42, SPb., 1897, 609 i sl.
- 116) Soboleva, Ukaz. soch., 245.
- 117) Tam zhe, 153-154.
- 118) 梶, 前掲書, 42, 63頁.
- 119) Kniga v Rossii 1861-1881, t. 2, M., 1990, 128-129.
- 120) Vucinich, *op. cit.*, esp. see Introduction.
- 121) アンナ・ドストエフスカヤ, 前掲書, 第1巻, 158頁.
- 122) Leikina-Svirskaja, Ukaz. soch., 249.
- 123) C. Kelly and D. Shepherd, *op. cit.* 37, 47.
- 124) B. S. Kaganovich, O genezise ideologii "Ol'denburgovskogo kruzhka" i "Priutina bratstva", v kn.: Russkaia emigratsiia do 1917 goda — Laboratoriia liberal'noi i revoliutsionnoi mysli, SPb., 1997, 90-92.
- 125) 高橋一彦「近代ロシア法学史序説 — 帝政ロシアの知の断層」『研究年報』[神戸市外国語大学外国語学研究所] 36号, 1999年, 42-44頁.
- 126) 同上, 57頁以下.
- 127) 高田和夫「ロシア農民とリテラシイ」, 56頁.
- 128) ミッデンドルフについては, さしあたり次を参照せよ. M. Bassin, *Imperial visions, Nationalist Imagination and Geographical Expansion in the Russian Far East, 1840-1865*, Cambridge University Press, 1999, 78-84.
- 129) Vucinich, *op. cit.*, 90.
- 130) L. S. Berg, Ukaz. soch., 47, 200.
- 131) Dvadtsatipiatiletie Imperatorskogo Russkogo Geograficheskogo Obshchestva, 13 ianbaria 1871 goda, SPb., 1872, 44.
- 132) Tam zhe, 58.
- 133) Istoriiia poluvekovoi deiatel'nosti Imperatorskogo Russkogo Geograficheskogo Obshchestva, 1845-1895, SPb., 1896, xxii, xxx.
- 134) D. Brower, Imperial Russia and Its Orient: The Renown of Nikolai Przhevalsky, *The Russian Review*, v. 53, no. 3, 1994, 369-370.
- 135) さらに次を参照. T. N. Oglezneva, Russkoe Geograficheskoe Obshchestvo: Izuchenie narodov severo-vostoka Azii, 1845-1917 gg., Novosibirsk, 1994. M. Bassin, *op. cit.*, C. B. Clay, Russian Ethnographers in the service of Empire, 1856-1862, *Slavic Review*, v. 54, no. 1, 1995, 45-61.
- 136) この協会については, さしあたり, 高田和夫「近代ロシアの労働者教育」『社会科学論集』28号, 1988年, 第6節を見てほしい.
- 137) PSZ, t. XLI, otd. 1, no. 43219.
- 138) 高田和夫「ロシア・ナショナリズム論ノート」, 9-10頁. Leikina-Svirskaja, Ukaz. soch., 201-2. G. I. Shchetinina, Ukaz. soch., 38 以下にこの時期に各大学に開設された学術団体を通覧する記述がある.
- 139) 『正史』はその本文で外務省の管轄とするが, ここでは規約第9条に従っておく. Imperatorskoe Russkoe Istoricheskoe Obshchestvo 1866-1916, Petrograd, 1916, 7, 128.
- 140) Tam zhe, 4. 田中陽児「P・M・ストローエフの史料探査行 — ロシア近代史学成立の一前提 — 」『東洋大学文学部紀要 史学科篇第40集 XII』1987年も参照.
- 141) 高田和夫「ロシア・ナショナリズム論ノート」, 第8節を見てほしい. Obshchestvo liubitelei rossiiskoi slovesnosti pri Moskovskom universitete. Istoricheskaja zapiska i materialy za sto let, M., 1911.
- 142) N. M. Frieden, *Russian Physicians in an Era of Reform and Revolution, 1856-1905*, Princeton University Press, 1981, 5, 53, 106, 113, 323.
- 143) E. A. Vorontsova, Nauchno-tekhnicheskaja intelligentsia i obshchestvo dlia sodeistviia promyshlennosti i trgovli, v kn.: Provintsial'nyi gorod, 147.
- 144) G. I. Shchetinina, Ideinaia zhizn' russkoi intelligentsii konets XIX-nachlo XX v. M., 1995, 147.
- 145) H. D. Balzer(ed.), *op. cit.*, 12, 47.
- 146) G. I. Shchetinina, Ukaz. soch., 145.
- 147) H. D. Balzer(ed.), *op. cit.*, 56ff.
- 148) スラヴ慈善協会の活動については, さしあたり, 次を参照. Iz istorii slavianskogo blagotvoritel'nogo komiteta v Moskve, vyp. 1, M., 1871, vyp. 2, M., 1872. また, スラヴ大会については, Vserossiiskaia etnograficheskaja vystavka i slavianskii c'ezd, M., 1867 も参照.
- 149) 以上の議論にとり参考になるのは, さしあたり, M. Bassin, *op. cit.*, part 1.
- 150) このことはひとまず, ロシア帝国を英仏などの西欧的帝国型とオスマントルコなどの非ヨーロッパ型との中間雑種型として捉えようとするものの別表現であるとみなしてよいであろう. 雑種型の事例として, 地政学的傾向が過ぎるが, 次を参照のこと. D. Lieven, Dilemmas of Empire 1850-1918. Power, Territory, Identity, Ideology, *Journal of Contemporary History*, v. 34(2), 1999, 163-200.
- 151) 高田和夫「露土戦争とロシア・ナショナリズム」『法政研究』[九大]68巻3号, 2001年を見てほしい. 誤解なきよう念のために言えば, 例えば当時は革命陣営に身を投じていたチホミロフがその回想記で露土戦争期を振り返って, 「この時代の好戦的な機運は革命家たちの闘争本能を強く揺り動かした」(Vospominaiia L'va Tikhomirova, 86) などという場合, 革命家も参戦したといているのであって, 彼らだけは革命闘争に励んだという意味ではないのである. 露土戦争にまつわるロシア・ナショナリズムの発現に関してはさらに別に議論する予定にしているが, とりあえずは次も見てほしい. 高田和夫「ロシア・ナショナリズム論ノート」16頁以下.
- 152) 汎スラヴ主義に関して関連文献は非常に多いが, ここでは次だけをあげておく. A. S. Tuminez, *Russian Nationalism since 1856, Ideology and the Making of Foreign Policy*, Rowman & Littlefield Publishers, 2000, ch. 3, Panslavism: 1856-1878.
- 153) E. Ambler, *Russian Journalism and Politics 1861-1881*, Wayne State University Press, Detroit, 1972, 31, 32, 34, 49, 61, 113.
- 154) *Ibid.*, 113, 145.
- 155) とりあえず, 高田和夫「近代ロシアの労働者と農民」, 第2節を参照.
- 156) G. Usyskin, Ocherki istorii rossiiskogo turizma, M.-SPb., 2000, 28, 62-63.
- 157) G. Ia. Tarle (sost.), Natsional'nye diaspori v Rossii i za rubezhom v XIX-XX vv., M., 2001, 28.
- 158) N. E. Saul and R. D. McKinzie (eds.), *Russian-American Dialogue on Cultural Relations 1776-1914*, University of Missouri Press, 1997, 128-129, 152-159.
- 159) G. Ia. Tarle (sost.), Ukaz. soch., 29-32.
- 160) N. Stone and M. Glenny, *The Other Russian*, L., 1990, xvi.
- 161) M. Raef, *Russia Abroad, A Cultural History of the Russian Emigration, 1919-1939*, Oxford University Press, 1990, 4, 5.
- 162) M. A. Miller, *The Russian Revolutionary Emigres 1825-1870*, The Johns Hopkins University Press, 1986, 209.

- 163) *Ibid.*, 211.
- 164) M. Raeff, *op. cit.*, 68.
- 165) Starik [S. F. Kovalik], Ukaz, stat'ia, 10-11.
- 166) Vucinich, *op. cit.*, 50. R. Pipes, *op. cit.*, 314.
- 167) 近代ロシアのリベラルと革命派の思想の多くは西欧で形成され、それがロシアに移入されたことと「一方的に」見なすことに対して、最近のロシア学界は批判的である。例えば、1995年にペテルブルクで開催されたシンポでは、東（ロシア）西の相互の関係と作用を重視すべきであるとする（半ば当然な）議論が多くなされた。その一例としてここでは、本稿でも後述する予定であるラヴローフの「前進」綱領に関わるロシア側とのやり取りが取り上げられた。Sm. Russkaia Emigratsiia do 1917 goda, Laboratoriia liberal'noi i revoliutsionnoi mysli, SPb., 1997. 特に V. N. Ginev 論文を参照せよ。
- 168) 高等教育機関が1870年代に女性に対してようやく開かれたのは、当局がチューリヒに行った若い女性がラジカルな悪習に染まることを恐れた結果であるとする見方があるほどに kursistka (女子専門学校生) は revoliutsionerka (おんな革命家) であるとする風評が立った。R. Stites, *Women and the Russian Intelligentsia*, 43-44.
- 169) Gosudarstvennye prestupleniia v Rossii v XIX veke, t. 3, Paris, 1905, 5-6.
- 170) L. Deich, Viktor Obnorskii, *Proletarskaia Revoliutsiia*, 1921, no. 3, 52.
- 171) P. Aksel'rod, *Perezhitoie i Peredumannoe*, Berlin, 1923, [reprinted ed., 1975] 128, 131.
- 172) A. Ascher, *Pavel Axelrod and the Development of Menshevism*, Harvard University Press, 1972, 27-29.
- 173) M. T. Choldin, *A Fence around the Empire, Russian Censorship of Western Ideas under the Tsars*, Duke University Press, 1985, 60.
- 174) 最も多量にロシアに流入したのは、ドイツ語文献である。1856年からの40年間をみると書籍は7万タイトルを超える。1869年だけをとると、ドイツの新聞雑誌は6000部定期購読されており、タイトル数で約300に上り、Modenwelt や Criminalbibliothek といったポピュラーなものから、Annalen der Physik und Chemie, Zeitschrift für das Bauwesen など科学技術関係まで広範囲に渡った。*Ibid.*, 8, 120, 128. 外国出版物にたいする検閲は原則として国内出版物のそれに準じてなされた。それを担当したのは、ペテルブルク中央を始めとして、リガとオデッサの両市に置かれた外国検閲委員会とモスクワ、キーエフ、ヴィリニウス、そしてレーヴェリの個々の検閲官であった。I. I. Frolova (pod red.), *Kniga v Rossii 1861-1881*, t. 1, M., 1988, 43. これらのことは当時のロシア帝国が置かれていた外国情報の取り入れ口に対応しているであろう。なお、1875年の数字として、輸入外国書788万6045冊のうち、9412点が検閲の対象とされ、8839点が許可、325点が部分的な削除、238点が不許可というデータもある。計算が合わないが、検閲で輸入が全く不許可となる外国書はおおよそ2%ほどであったということである。D. Balmuth, *Censorship in Russia, 1865-1905*, University Press of America, 1979, 145.
- 175) W. Bruce Lincoln, *The Great Reforms; Autocracy, Bureaucracy, and the Politics of Change in Imperial Russia*, Northern Illinois University Press, 1990, 121-134.
- 176) M. T. Choldin, *op. cit.*, 61.
- 177) 「オボレンスキー委員会」を中心としたこの法案の準備段階の様子は次に詳しい。D. Balmuth, *op. cit.*, 19ff.
- 178) Russkaia pechat' i tsenzura v proshlom i nastoiashchem, M., 1905, 84. なお、本文で紹介した「懲罰的検閲」という用語はこの規約で使用されていない。それに換えて、婉曲的に「事前検閲から自由な」刊行とが、無検閲の刊行といった表現が使われたといわれる。Sm. G. Doktorov, *Reforma tsarskoi tsenzury*, *Kontinent*, no. 36, 1983, 180.
- 179) M. T. Choldin, *op. cit.*, 14-15.
- 180) C. A. Ruud, *Fighting Words: Imperial Censorship and the Russian Press, 1804-1906*, University of Toronto Press, 1982, 140-150, 167.
- 181) Russkaia pechat' i tsenzura v proshlom i nastoiashchem, 227-250に1865-1904年に雑誌にたいして行った警告一覧がある。検閲の実施にあたっては検閲官の個人的な判断によるところが大であったと思われる。検閲官は各自が特定の雑誌を担当したりした。例えば、1860-70年代の『祖国雑誌』を担当したのはペテルブルク検閲委員会検閲官 N. G. レベデフ (Lebedev) であった。Sm. A. V. Mez'er, Ukaz. soch., 68.
- 182) D. Balmuth, *op. cit.*, 25.
- 183) E. A. Lazarevich, Ukaz. soch., 149. 当局が外国書の検閲にあたって神経を使ったのは、大きくは次の4点に関してである。①ロシア皇室に対する侮辱、②社会秩序への反抗、③ロシア人を非ヨーロッパ的な野蛮人として描くこと、④宗教と道徳に反する思想。M. T. Choldin, *op. cit.*, 7. これらの中で、本稿の筆者は何よりも③に関心を引かれるが、その理由はさらに別の機会に紹介することとしたい。
- 184) Leikina-Svirskaia, Ukaz. soch., 83.
- 185) C. A. Ruud, *op. cit.*, 182-193.
- 186) L. M. Dobrovol'skii, *Zapreshchennaia kniga v Rossii 1825-1904*, Arkhivno-bibliograficheskie razyskaniia, M., 1962, 4.
- 187) Tam zhe, 3.
- 188) R. Pipes, *op. cit.*, 293.
- 189) Russkaia pechat' i tsenzura v proshlom i nastoiashchem, 134.
- 190) M. T. Choldin, *op. cit.*, 128.
- 191) E. A. Dinershtein, A. S. Suvorin, *Chelovek sdelavshii kar'yeru*, M., 1998, 61.
- 192) E. G. Nemirovskii, *Izobretenie Ioganna Gutenberga*, M., 2000, 253.
- 193) AN SSSR Otdel Istorii, *Russkoe knigopечатanie do 1917 goda*, t. 1 (1594-1917), M., 1964, 368-370.
- 194) A. A. Govorov i T. G. Kurianova (pod red.), *Istoriia knigi*, M., 2001, 211-212.
- 195) *Knigovedenie, entsiklopedicheskii slovar'*, M., 1981, 195.
- 196) *Kniga v Rossii 1861-1881*, t. 2, 36.
- 197) *Kniga v Rossii 1861-1881*, t. 1, 24-29の付表を筆者が計算した。
- 198) N. V. Shelgunov, *Vospominaniia*, 81. 彼はその一方で、モスクワ市はロシア精神の原理に関して理論に耽る傾向にあり、スラヴ派の機関誌をよく出したとペテルブルクと対比させて述べている。
- 199) *Kniga v Rossii 1861-1881*, t. 1, 33-34.
- 200) *Kniga v Rossii 1861-1881*, t. 2, 53, 66. ヴォリフ社についてはこの文献の60-66頁に簡略な紹介がある。
- 201) この M. O. ヴォリフ (Vol'f) 会社社員 S. F. リブローヴィチ (Librovich) には書誌学の嗜みがあって、読書人向けの情報誌 *Izvestiia po literature, naukam i bibliografii knizhnykh magazinov T-va M. O. Vol'f* を1897-1917年の間、刊行し、大変な評判となったこともこの会社を近代ロシアの代表的な出版社の一つとするのに力があつた。A. A. Govorov i T. G. Kurianova (pod red.), Ukaz. soch., 20, 31, 217-218. さらに、次を参照。A. A. Govorov, *Istoriia knizhnoi trgovli v SSSR*, M., 1979, 179-180.
- 202) Tam zhe, 222, AN SSSR Otdel Istorii, Ukaz. soch., 378-383.
- 203) 『仲介者』については、さしあたり、次を見てほしい。高田和夫「ロシア農民とリテラシー」、とくに61頁以下。
- 204) Ch. Ruud, *Russkii predprinimatel', moskovskii izdatel' Ivan Sytin*, M., 1996, 12. これは次の露訳本である。Charles A. Ruud, *Russian Entrepreneur, Publisher Ivan Sytin of Moscow 1851-1934*, McGill-Queen's University Press, 1990. この巻

- 末に付された出版記録をみると同社がいわゆる総合出版社であったことが分かる。
- 205) *Kniga v Rossii 1861-1881*, t. 3, M., 1991, 45.
- 206) *Tam zhe*, 48.
- 207) *Kniga v Rossii 1861-1881*, t. 1はその第5章でそうした人々を、本文で触れた者を含めて、20人近く紹介している。
- 208) AN SSSR Otdel Istorii, Ukaz. soch., 385-393.
- 209) *Tam zhe*, 406, 412, 417.
- 210) これは首都において人民向けの新聞がようやくこの時期に創刊され出したことに対応することでもある。1863年には『日曜日の余暇(Voskresnyi dosug)』、『国民新聞(Narodnaia gazeta)』、そして『共同体の言葉(Mirskoe slovo)』の3紙が発刊になった。今の筆者は、怠慢なことに、それらを直接見ていないが、ある解説によれば、このようなわざわざ人民を対象とするような新聞は貧困、労働、啓蒙といった事柄に強い関心を寄せてはいたが、必ずしもその編集方針は定まったものではなく、いろいろなテーマが雑然と混在しているという(Lazarevich, Ukaz. soch., 199 i sl.). 1870年代になってもこの基本的傾向は同様に認められ、例えば1871年に創刊された『国民小営業新聞(Narodnaia remeslennnaia gazeta)』なども単に小営業に関する技術的知識にかぎらずに外国生活の様子まで紹介したといわれる(Leikina-Svirskaia, Ukaz. soch., 200)。しかし、編集者たちが新聞にたいする人民の関心を買おうとして彼らに入りやすい、切り口をいろいろと提示しようとしたのは半ば当然のように思われる。
- 211) *Kniga v Rossii 1861-1881*, t. 2, 142.
- 212) AN SSSR Otdel Istorii, Ukaz. soch., 421.
- 213) 高田和夫「ロシア農民とリテラシイ」、46頁以下を参照してほしい。
- 214) AN SSSR Otdel Istorii, Ukaz. soch., 423.
- 215) Leikina-Svirskaia, Ukaz. soch., 216.
- 216) 「団体」については、本論のⅡ-2の当該項目を参照してほしい。ここで、個人と団体のいわば中間に、いくつかの「出版アルテリ」が存在したことを無視するつもりはない。例えば、化学者 A. N. エンゲリガルト(Engel'gardt)と結婚したアンナ・ニコラーエヴナは1863年にペテルブルクに最初の婦人出版アルテリを開設し、1875年までに16点を発刊した。その大半は英独仏語からの翻訳物であった。E. Mazovetskaia, Anna Engel'gardt (Sankt-Peterburg i poloviny XIX vaka), SPb., 2001, 52-57.
- 217) AN SSSR Otdel Istorii, Ukaz. soch., 393-394.
- 218) *Kniga v Rossii 1861-1881*, t. 3, 10.
- 219) *Tam zhe*, 12.
- 220) *Kniga v Rossii 1816-1881*, t. 2, 24.
- 221) A. A. Govorov, Ukaz. soch., 192-193.
- 222) S. S. Levina, Propaganda literatury sredi revoliutsionnoi molodezhi 70-80-kh godov XIX v., *Sovetskaia bibliografiia*, 1979, no. 3を参照。
- 223) 1876年11月のムイシキンの元老院副議長宛て上申書に見える文言。田坂昂編訳『人民の中へ ロシア・ナロードニキ運動資料集Ⅰ』新泉社、1976年、126頁。
- 224) チャイコフスキー団が行った書籍普及運動については、さしあたり、高田和夫「チャイコフスキー・サークルと労働者」『社会科学論集』[九大]21号、1981年を見てほしい。その団が普及を図った書籍一覧は次において確かめることができる。Revoliutsionnoe narodnichstvo 70-kh gg. XIX v., t. 1, M., 1964, 226-228. N. A. Charushin, O dalekom proshlom; Iz vospominanii o revoliutsionnogo dvizhenii, 2-e, izd., M., 1973, 345-348.
- 225) V. F. Zakharina, Golos revoliutsionnoi Rossii, M., 1971, 14, 15, 37, 40.
- 226) 例えば、アクセルロートなどはロシア国内の出版事情の悪さと「密輸」の相対的な安易さを考慮して、むしろ西欧に印刷所をおくことを奨励したほどであった。A. Ascher, *op. cit.*, 40.
- 227) N. G. Kuliapko-Koretskii, Iz davnykh let, Vospominaniia lavrista, M., 1931, 109.
- 228) D. W. Hay, *The Development of the Revolutionary Movement in the South of the Russian Empire, 1873-1883*, Ph. D. Thesis, Glasgow University, 1983, 52.
- 229) その様子は例えば、次のカタログにうかがえる。L'Émigration russe en Europe, Catalogue collectif des périodiques en langue russe 1855-1940, Paris, 1976. Russkaia poppol'naia i zarubezhnaia pechat', Bibliograficheskii ukazatel' 1, 1831-1879, vyp. 1, M., 1935.
- 230) *Kniga v Rossii 1861-1881*, t. 1, 55-56. Leikina-Svirskaia, Ukaz. soch., 267.
- 231) *Tam zhe*, 45.
- 232) S. Livshits, Podpol'nye tipografii 60-kh, 70-kh i 80-kh godov, *Katorga i Ssylka*, 1928, no. 41, 24.
- 233) *Tam zhe*, 30.
- 234) *Tam zhe*, 32.
- 235) *Tam zhe*, 1928, no. 43, 61. AN SSSR Otdelenie Istorii, Ukaz. soch., 355.
- 236) Aptekman, Ukaz. soch., 88.
- 237) *Tam zhe*, 63.
- 238) Livshits, Ukaz. stat'ia, *Katorga i Ssylka*, 1929, no. 55, 59.
- 239) *Tam zhe*, 51.
- 240) V. F. Zakharina, Ukaz. soch., 135-6.
- 241) *Tam zhe*, 229.
- 242) Aptekman, Ukaz. soch., 88.
- 243) V. G. Bazanov, "Khozhdenie v narod" i knigi dlia naroda (1873-1875), v kn.; Agitatsionnaia literatura russkikh revoliutsionnykh narodov, Potaennye proizvedeniia 1873-1875 gg., L., 1970, 35.
- 244) Lazarevich, Ukaz. soch., 195.
- 245) *Tam zhe*, 54.
- 246) V. F. Zakharina, Revoliutsionnaia propagandistskaia literatura 70-kh godov XIX v., *Istoricheskie zapiski*, t. 71, 74-112.
- 247) L. E. Shishko, Sbranie sochineniia, t. IV, Ptg.-M., 1918, 148-150.
- 248) Agitatsionnaia Literatura Russkikh Revoliutsionnykh Narodnikov, L., 1970, 486-7.
- 249) AN SSSR Otdelenie Istorii, Ukaz. soch., 67.
- 250) V. F. Zakharina, "Roman Erikmana-Shatriana "Istoriia krest'ianina" i ego peredelka v narodnicheskoi propagande," *Russkaia Literatura*, 1964, no. 2.
- 251) Agitatsionnaia Literatura Russkikh Revoliutsionnykh Narodnikov, 489-490.
- 252) *Tam zhe*, 485.
- 253) P. L. Lavrov, Narodniki-propagandist 1873-1878 godov, 37, 121.
- 254) L. E. Shishko, Soch., t. IV, 149. Russkaia podpol'naia i zarubezhnaia pechat', no. 698-699.
- 255) Agitatsionnaia Literatura Russkikh Revoliutsionnykh Narodnikov, 485.
- 256) Russkaia podpol'naia i zarubezhnaia pechat', 67-69.
- 257) Agitatsionnaia Literatura Russkikh Revoliutsionnykh Narodnikov, 482-485. Russkaia podpol'naia i zarubezhnaia pechat', 31.
- 258) Krest'ianskoe dvizhenie v Rossii v 1870-1880 gg., sbornik dokumentov, M., 1968, 122-60. 和田春樹『農民革命の世界』, 東京大学出版会, 1978年, 304頁以下。
- 259) 人民読書会については、高田「ロシア農民とリテラシイ」、第8節を参照のこと。
- 260) P. Akse'rod, Ukaz. soch., 97.

- 261) Chto chitat' narodu? t. 1, SPb., 1884, t. 2, SPb., 1889, t. 3, M., 1906.
- 262) 前掲『人民の中へ』, 201頁.
- 263) 金子幸彦『ロシア小説論』岩波書店, 1975年.
- 264) B. N. Mironov, Peasant Popular Culture and the Origins of Soviet Authoritarianism in S. P. Frank and M. D. Steinberg (eds), *Cultures in Flux*, 66-8.
- 265) I. S. Turgenev, Polnoe sobranie sochinenii i picem v dvadtsati vos'mi tomakh, Sochineniia, t. 12, M.-L., 1966, 99.
- 266) ヴェーラ・フィグネル (田坂昴訳)『遙かなる革命: ロシア・ナロードニキの回想』, 批評社, 1980年, 113頁.
- 267) I. S. Turgenev, Ukaz. soch., 28.
- 268) Revoliutsionnoe narodnichestvo 70-kh godov XIX veka, sbornik dokumentov i materialov v dvukh tomakh, t. 1, M., 1964, 208. 前掲『人民の中へ』163頁.
- 269) Tam zhe, 191. 同上, 137頁.
- 270) Tam zhe, 321. 同上, 237頁.
- 271) Tam zhe, 173. 同上, 120-121頁.
- 272) Tam zhe, 252-253. 同上, 191, 193頁.
- 273) Tam zhe, 356. 同上, 256頁.
- 274) Tam zhe, 184. 同上, 129頁.
- 275) サヴィンコフ (川崎淡訳)『テロリスト群像』現代思潮社, 1967年, 訳者解説433頁.
- 276) Revoliutsionnoe narodnichestvo 70-kh godov XIX veka, Sbornik dokumentov i materialov v dvukh tomakh, t. 1, 135-136.
- 277) Tam zhe, 121-122. ラヴローフ派は「準備と宣伝」を、バクーニンは「反乱と煽動」をめざしたとする整理がよくなされてきたことは知られるとおりである。例えば、佐々木照央は、前者は「野蛮な破壊を防止し、真の革命をもたらす前提条件を文明の到達した「科学知識」に求め」、後者は「ナロードが反乱し勝利した暁にナロード自身が自分に必要な知識や科学を自ら身につけるという見方」を示していると整理している (佐々木『ラヴローフのナロードニキ主義歴史哲学』彩流社, 2001年, 289-291頁)。本文で述べたように、私はこのような整然としたまとめ方には必ずしも賛成しないが、ここでとりあえず確認したいのは、いずれにせよ両者がともに科学ないし知識を重視していたことである。
- 278) P. Aksel'rod, Ukaz. soch., 54. 佐々木照央は、ヴ・ナロードに参加した活動家にユダヤ人が多かったことから、それは極めてインターナショナルな性格をもつはずであったと正當に指摘しながら、デイチ (彼もユダヤ人だ) の回想に依拠しながら、押しなべてユダヤ人活動家たちは大ロシア主義的傾向を有したと断定している (前掲書, 350頁)。このことは、本文で述べたようなヴ・ナロード運動が有した「ロシア化」論を補強するものとして読むこともできるであろう。
- 279) N. A. Troitskii, Protsess '193-kh, v kn.: Obshchestvennoe dvizhenie v poreformennoi Rossii, M., 1965, 316-318. チホミーロフはその回想で、ネチャーエフの陰謀が失敗に終わり、そのために青年の間で革命に対する信頼感は著しく失われ、彼らの中には「巨大な精神的空白 (ogromnaia dushevnaia pustota)」が生じていたのだから、「ヴ・ナロード」に2000人もの青年が登場するなどとは考えても見なかった、とその「意外性」を率直に述べている (Vospominaniia L'va Tikhomirova, 38, 46, 52.). したがって、その参加者は千数百から二千ほどであつたろうと思われる。この裁判は1877年10月18日から翌年1月23日まで開かれた。10月21, 22日に読み上げられた起訴状の内容に特徴的なのは宣伝の「企て」レベルの話に終始してその実行性や結果についての言及に欠けることである。B. Bazilevskii (red.), Gosudarstvennye prestupleniia v Rossii v XIX veke, t. 3 (2-aia polovina 1877 goda), Paris, 1905, 4-267.
- 280) N. I. Sidrov, Statisticheskie svegeniia o propagandistakh 70-kh godov v obrabotke III otdeleniia, *Katorga i Ssylka*, 1928, no. 38, 27-56.
- 281) Tam zhe, 30.
- 282) Tam zhe, 31.
- 283) Tam zhe.
- 284) Tam zhe, 32-3.
- 285) Tam zhe, 42.
- 286) V. S. Antonov, K voprosu o sotsial'nom sostave i chislennosti revoliutsionerov 70-kh godov, v kn.: Obshchestvennoe dvizhenie v poreformennoi Rossii, 338, 340.
- 287) N. I. Sidrov, Ukaz. stat'ia., 36.
- 288) Deiateli revoliutsionnogo dvizheniia v Rossii, Bio-bibliograficheskii slovar', t. 2, vyp. 1, M., 1929, stolb. 671-674.
- 289) Stepniak, *Underground Russia, Revolutionary Profiles and Sketches from Life*, with a Preface by Peter Lavroff, London, 1883, 25-26, 30. S. M. Stepniak-Kravchinskii, Sobranie sochinenii, chast' 2, Podpol'naia Rossiia, Petrograd, 1917, 12-13, 15. ステュブニャーク=クラフチンスキー (佐野努訳)『地下ロシア』三一書房, 1970年, 50-51, 54頁.
- 290) Samuel H. Baron, *Plekhanov The Father of Russian Marxism*, L., 1963, 15. サミュエル・H・バロン (白石治朗他訳)『プレハーノフ: ロシア・マルクス主義の父』, 恒文社, 1978年, 37頁.
- 291) フィグネル, 前掲書, 98頁.
- 292) A. Walicki, *A History of Russian Thought from the enlightenment to Marxism*, Stanford University Press, 1979, 227-8.
- 293) R. E. Zelnik, "To the Unaccustomed Eye"; Religion and Irreligion in the experience of St. Petersburg Workers in the 1870s, *Russian History*, v. 16, no. 2-4, 1989, 297-326. この文節は、さらにイーゴリ・イワンチク、アスコリド・イワンチク (小林茂樹訳)『混迷するロシアの科学』岩波書店, 1995年, 特に17頁を参照している。
- 294) ロナルド・ヒングリー『ニヒリヒト』, みすず書房, 1972年, 8-9頁.
- 295) 次を見よ. R. E. Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia: the Factory Workers of St. Petersburg, 1855-1870*. Stanford University Press, 1971.
- 296) Vospominaniia L'va Tikhomirova, 51, 53.
- 297) I. S. Turgenev, Ukaz. soch., 227.
- 298) S. A. Viktorova-Val'ter, Iz zhizni revoliutsionnoi molodezhi 2-i polovine 1870-kh godov, *Katorga i Ssylka*, 1924, no. 11, 67.
- 299) ヒングリー, 前掲書, 60頁.
- 300) V. V. Bervi-Flerovskii, *Azbuka sotsial'nykh nauk*, SPb., 1871. Ego zhe, Tri politicheskie sistemy, London, 1897.
- 301) Revoliutsionnoe narodnichestvo 70-kh godov XIX veka (1870-1875 gg.), t. 1, 226. 前掲『人民の中へ』, 182頁.
- 302) D. Field, Peasants and propagandists in the Russian Movement to the People of 1874, *Journal of Modern History*, vol. 59, Sep. 1987.
- 303) B. S. Itenberg, Dvizhenie revoliutsionnogo narodnichestva, M., 1965, 307. V. N. Ginev, Revoliutsionnaia deiatel'nost' narodnikov 70-kh godov sredi krest'ian i rabochikh srednego povolzh'ia, *Istoricheskie zapiski*, t. 74, 1969, 220-244.
- 304) I. S. Turgenev, Ukaz. soch., 115.
- 305) Starik [S. F. Kovalik], Ukaz. stat'ia, *Byloe*, 1906, no. 12, 67.
- 306) 高田和夫「近代ロシアの労働者と農民——モスクワ地方の労働力移動をめぐって——」『法政研究』第57巻第1号, 1990年を見てほしい。
- 307) Revoliutsionnoe narodnichestvo 70-kh godov XIX veka (1870-1875 gg.), t. 1, 324. 前掲『人民の中へ』, 240頁.
- 308) P. S. McKinsey, From City Workers to Peasantry: The Beginning of the Russian Movement "To the People", *Slavic*

- Review*, v. 38, no. 4 (Dec. 1979), 641.
- 309) V. Nevskii, Viktor P. Obnorskii, v kn.: Istoriko-Revoliutsionnyi Sbornik, t. 3, M.-L., 1926, 19.
- 310) P. S. McKinsey, *op. cit.*, 648.
- 311) G. Golosov, K biografii odnogo iz osnovatelei "Severo-Russkogo Rabochego Soiuz", I. A. Bachin i ego drama, *Katorga i Ssylka*, 1924, no. 6, 51.
- 312) P. S. McKinsey, *op. cit.*
- 313) B. S. Itenberg, Dvizhenie revoliutsionnogo narodnichestva, 281.
- 314) I. S. Turgenev, Ukaz. soch., 83.
- 315) フィグネル, 前掲書, 123頁.
- 316) Starik [S. F. Kovalik], Ukaz. stat'ia, *Byloe*, 1906, no. 12, 71.
- 317) O. V. Aptekman, Ukaz. soch., 142.
- 318) ヒングリー, 前掲書, 65頁.
- 319) Revoliutsionnoe narodnichestvo 70-kh godov XIX veka, t. 1, 121. 『人民の中へ』114-5頁. 訳を変えている.
- 320) Tam zhe, 309, 同上, 229頁.
- 321) Tam zhe, 132-133.
- 322) 前掲『人民の中へ』, 279頁.
- 323) E. Vreshkovskaia, Vospominaniia propagandistki [Iz no. 7, 8/9, *Obshchina*, za 1878g.], *Byloe* [London edition], 1903, no. 4, 31.
- 324) Tam zhe, 82.
- 325) Tikhomirov, Ukaz. soch., 66-67.
- 326) M. Frolenko, Zapiski semidesiatnika, M., 1927, 43-4.
- 327) 松原広志『ロシア・インテリゲンツィア史』, ミネルヴァ書房, 1989年, 52頁以下.
- 328) Stepniak, *Underground Russia*, 33, S. M. Stepniak-Kravchinskii, Sobranie sochinenii, 16, ステプニャーク=クラフチンスキー『地下ロシア』, 57頁.
- 329) A. A. Kunkul', Kruzhok dolgushintsev, M., 1927, 16-19, Aptekman, Ukaz. soch., 96-100.
- 330) D. L. Pearl, Educating Workers For *Revolution*, *Russian History*, v. 15, no. 2/4, 1988, 276.

[付記1] 本稿は、今年度、定年退官される横田耕一教授に捧げる。これまでのご厚誼とお導きに深く感謝するとともに、わが国におけるリベラリズムの本格的な成立と展開のために多大な仕事をなされてきた教授に心よりの敬意を表し、ますますのご発展を祈るものである。

[付記2] 本稿校正の段階で、佐々木照央『ラヴローフのナロードニキ主義歴史哲学』（彩流社、2001年）が出た。大急ぎで一読したが、本論ではその成果を十分に生かされていない。そのための機会を待ちたいと思う。